

第二十三章 光道の果て

1

ここはどこだ——？

ああ、いつもの押し入れか。また放り込まれてしまった。チクショー、親父のヤツ、呂律がまわらないくらい酔っぱらっても、俺を捕まえる時だけは鬼みたいに足が速いんだから始末におえん。それでとっ捕まれば、押し入れに一昼夜閉じ込めの刑だ。毎度お決まりのパターン——。

俺、今回は何をしでかしたんだろ？ 思い出せない。身体のうちがちがヒリヒリするし、見ればなまなましい火傷の痕もある。よほど大掛かりな^{あと}いたずらをしたか、悪い連中相手に大暴れしたのか。俺が他人をつかまえて「悪い」なんて言えた義理じゃないが。ああ、また飯抜きだな。弟のヤツのしかめっ面が目に見えかぶぜ——。

弟。生年月日は俺と同じ、たったひとりの兄弟にして

双子。一卵性双生児。

だがそんなこと、信用する奴はいない。なぜなら俺たちは、背格好も違えば、性格も正反対。声だって全く似てないからだ。

弟は生まれつきの優等生。小さな頃から神童と呼ばれ、学校に上がってからは、勉強、スポーツ、全ての点で常にトップクラス。おまけにハンサムで愛想がいいから、先生やPTA、先輩や同級生たちの覚えもめでたい。弟は成長とともに長所にさらに磨きをかけ、学校も有名中学、有名高校、そして一流大学へと進み、今じゃ外務省のお偉いさんと来たもんだ――。

俺は弟とは正反対の道を歩いてきた。それは生まれた時点で運命づけられたと言っている。

すんなりとこの世に生まれた弟とは違い、俺はなかなかお袋の腹の中から出てこなかった。そのせいで、お袋は手術を受けることになり、へたくそな医者とは、俺を手荒に引きずり出しやがった。お袋は俺の命と引き換えに死んだ。俺の顔に傷跡の置き土産を残して――。

親父は俺を徹底的に忌み嫌った。『お前がお袋を殺した、お前など生まれてこなけりやよかつた』と、ことあるごとに俺を罵った。まあ、ひいき目に見ても、俺には

弟の小指の先ほども、存在する値打ちはなかった。

出生時の後遺症のため、発育のよくなかった俺は身長がなかなか伸びなかった。加えて人相は悪い、頭は悪いで、小学校を卒業する頃には、すでに街の悪ガキたちの仲間入りを果たしていた。補導歴も数知れずだ。

それでも中学をなんとか卒業したのは、親父に対する意地だった。

『お前が学校なんか行っただって意味はない。力が有り余ってるんなら働け。どこか目の届かない遠くで働け。お前がいるだけで弟の将来に傷がつく』

クソ親父！ そんなことを言われて、ハイそうですかと家出するわけにいくか。俺はギリギリのところで、退学だけはしないよう注意を払って過ごした。

肝心の弟は……あいつはものごとろついて以来、ずっと俺を無視し続けていたつけ——。

中三の冬、俺は家の物置で一枚のディスクを見つけた。それには生前のお袋の動く姿が記録されていた。撮影したのは親父らしい。お袋は大きな腹を抱えてベッドの上に腰かけていた。

お袋は腹の中の俺たち兄弟に向かって、優しく話しかけていた。

じつは、俺はその時までお袋の顔を知らなかった。親

父が写真も映像も全て処分してしまったからだ。それでも俺にはそれがお袋だとすぐに判った。

お袋は美しかった。そして神々しいまでに優しい人だと思った。まだ見ぬ我が子たちに向かって、自分がいまどれくらい幸せか、どれほど我が子との対面を楽しみにしているのかを切々と語っていた。そして家族が揃って過ごす未来の様子を、とてもうれしげに空想していた。

俺は十五年の人生で初めて泣いた。声を上げて泣いた。そして、俺がどれほどお袋の愛に飢えていたのか、そのとき初めて知った。

映像にはときたま若い親父の姿も映った。親父は、今の姿からは想像もできないほど快活だった。そして、子供たちとお袋のことを宝物だと何度も口にした。母親の顔を覗き込んで、一生守り抜くと断言した。

記録された映像は、出産の前日で終わっていた――。

俺は周到な計画を立て、それを実行に移した。

お袋の手術を執刀したヤブ医者には、信じられないことに、その病院の院長に出世していた。俺は深夜、病院に侵入すると、ヤブ医者をロープで椅子にくくりつけ、さんざん恨み言を聞かせた上で刺し殺した。お袋を殺した罪、親父から笑顔を奪った罪、家族から幸せを奪った罪。『貴様が生まれ変わっても、俺は未来永劫、何度でも繰

り返し、貴様を殺してやる』

そう宣言して、ヤツをなぶり殺しにしてやった。

逃げる時には、物盗りの仕業と思わせるよう細工した。^{ものと}俺が捕まるのは覚悟の上だったが、お袋が愛した親父や弟にまで累が及ぶのを避けたかったからだ。

警察もまさか十五年前のことが引き金になったとは想像もしなかったらしく、事件の犯人は捕まらなかった。
だが――。

ヤブ医者殺害が大々的に報じられた一週間後のこと。

弟が珍しく俺の部屋に入ってきた。彼はこう言った。

『兄さんに出し抜かれちゃったな。いつか僕がそれなりの権力を握ったら、彼に強烈な社会的制裁を加えてやろうと思っていたのに』

弟のヤツ、それまで一度も見せたことのない、残忍な笑みを浮かべていたつけ。

俺たちは紛れもなく、実の兄弟だった――。

中学を無事に卒業すると、予定どおり俺は家を出た。

以前から考えていた道に進むことを決心したのだ。

傭兵。それこそが俺の天職だと信じて疑わなかった。

ヤブ医者をおの手に掛けてからというものの、俺は命というものが軽く思えてしかたがなかった。このままだと、

何かの拍子にまた人を殺めてしまいそうな気がした。それならいつそ、それを生業なりわいにすればいい。そんな短絡的な動機だった。

アメリカに渡った俺は傭兵学校に入学し、地獄の特訓を受けた。そして誰よりも優秀な成績で卒業すると、すぐに危険な紛争地帯に赴き、いかなる能力を発揮した。命のやりとりの中で、友達もできた。新しい仲間には、顔の傷は戦闘で受けたんだと偽り、ハクをつけた。

それから数年、俺は経験と実績を積み重ね、世界でも指折りの傭兵へと成長していった――。

思い出したぞ。

ある日俺は、日本政府の非公式なFAXを受け取った。そこには『リアルキラーズ募集』と書かれていた。

日本はいま未曾有の危機に直面している。日本国民を救うため、勇気ある戦士を募るといった内容だった。

母国を後にして丸十年。俺は一日としてお袋の眠る国を思い出さない日はなかった。俺の故郷は自然に恵まれた土地だった。最近では夢にまで見るようになっていた。いわゆるホームシックだ。恥ずかしい話だが。

そんな時にこのFAXだ。報酬は十分に魅力的な額だったし、それ以上に『国民栄誉賞の授与』『自衛隊に要職として迎え入れる』にも心が動いた。

またあの国の地面を踏める。しかも国を挙げて歓迎される身分として。そうなりや親父も俺を見直さずにはいられないだろう。

FAXの最下段には、外務省の担当部署の長として、弟の名前が書かれていた。

俺にはヤツが、そしてその向こうにはお袋が「帰ってこい」と言っているように思えてならなかった――。

編成されたリアルクリアーズでは副隊長に任命された。隊長の男は、前時代の遺物のような頑固者だった。俺はどうか奴を追放したが、最大の誤算は、俺自身がリアルになってしまったことだった。

何としても任務を成し遂げ、元の世界に帰らねば。だがもし最悪のケースを迎えることになったら、その時は全てのリアルを殺し、自分も死ぬだけだ。手段を選ばずに――。

待て、待て。そんな俺がどうして押し入れに閉じ込められてるんだ？ これは夢か？

薄暗い光の中では、頭の中までぼやけちまう。

身体を少しねじってみる。壁に体当たりもしてみた。

ダウン。いやに硬い壁で、びくともしない。そのわりに音だけはよく響く。壁の向こうには広い空間がありそ

うだ――。

ガコン。ズズズズ……。

あつ、壁が動いたぞ。まるで引き戸のように開いていく。まばゆい光が差し込んでくるじゃないか。

やっと親父の怒りが解けたんだ。また外に遊びに行けるぞ。

違う違う。それは子供の時の話だ。

今の俺は、リアルキラーズ隊長代理の真崎だ。もつともこれは傭兵としての偽名だが――。

真崎は光の中に転がり出した。

身体が妙にだるいな。ここんとこ睡眠が足りてないせいか。チツ、俺もヤキがまわったかな。

アツ、あそこにいる小娘には見覚えがある。確か……そうだ、光嶋萌黄だ。小生意気なリアル娘だ。

わっ、顔に水が！　なんだこりゃ………滝？

こんなもので俺様に対抗できるとでも思ってるのか。小娘の考えそうなことだぜ。

伝説のパンチをお見舞いしてやる。

そらっ、喰らえ！

むんの首筋から赤黒い血がほとばしった。

その光景を目の当たりにした萌黄は大きくバランスを崩し、エンジェルフォールの水に飲み込まれて、穴の底へと落下していった。

穴の内部に明かりはない。落ちるほど周囲は急速に暗くなっていく。萌黄は必死で気を集中させ、身体のみわりから水の流れを排除すると、急いでエアクッションで包んだ。風を切るようなスピードで正二十面体目指して上昇する。

むんは清香に抱き起こされていた。揺れる立体の上に突進するように着地すると、四つん這いになってにじり寄った。

むんの首はざっくりと半分までも切断されていた。即死でもおかしくないほどの大怪我にもかかわらず、薄く開いた眼が萌黄を見た。

顎や胸の辺りは、すでに砂状化が始まっている。

「わたしには止められない」

清香はうめくように言った。萌黄も反対側からむんの肩を抱き、リアルパワーが伝わるよう、一心に精神を集中させた。

それでも傷口からあふれる血流は止まらない。

「むん、むん！」

萌黄はひたすら親友の名を呼んだ。それ以外、他にどうすることもできなかった。涙が汗と鼻水に混じって顔を伝った。Tシャツの袖でぬぐつても、後から後から湧き出してくる。

むんが死ぬ――。

そんなことは有り得ない。そんなこと絶対に――。

むんの口がわずかに開いた。いや、そう見えたただけかも知れない。砂状化の進行はリアルパワーで若干鈍ったようだが、それでも頬や側頭部は、着実に灰色へと変化していた。

「どうしよう」

すがるように清香の顔を見たが、彼女は困った表情で顔を横に振るばかりだった。

「……も」

むんが眉を動かして、何か言おうとした。その時、ころじてつながっていた首の残りが、砂の塊となってごっそりと崩れ落ちた。顎と胸元の隙間には、黒光りする骨組みが覗いていた。

「――！」

言葉を失った萌黄の腕に、むんの頭がごろりと転がった。親友の目はすでに光を失っていた。

萌黄は親友の頭に頬を寄せた。冷たかった。力を込めると指の間からぼろぼろと砂がこぼれた。こぼれた砂は骨組みのあいだから、深い穴の底へと落ちていった。

救いようのない悲しみが、泉のように涙を押し出した。彫像のように眠るむんは、その涙を受け止め、ひび割れた皮膚の中に吸い込んだ。

「また来よるぞ！」

齋藤の叫びが滝の音にかぶさった。

パン生地 of 怪物は、再び狙いを定めるように、水の隙間で白い鎌首をもたげている。彼らのいる正二十面体ごと取り込もうとでもするかのように。

（アイツのせいだ！）

萌黄はむんの頭をそっと骨組みの上に置くと、空中に向かつて胸を突き出し、大きな声で吠えた。そうしないではいられなかった。

清香も雛田も首をすくめた。なぜなら彼女の咆哮は、聞く者をゾツとさせる響きがあったから。

萌黄は怒りの気迫をこめて拳を前に突き出すと、気合いと共に、立体を蹴って、怪物に向かつていった。

水をくぐる。しぶきが激しく飛び散る。思わず眼を細めた。

次の瞬間、怪物の姿が消えた。

（どこへ行った？）

萌黄は怒りに燃える目を左右に走らせた。

いた！

敵は床に作り付けの青い観客席をなぎ倒しながら移動し、最後部の壁に張りついていていた。まるで壁に投げつけられたホットケーキのように。

すぐ下に、驚きの顔で見上げているシュウたちがいた。だが興奮と怒りに取り憑かれた萌黄は、脇目も振らずに怪物に突進した。握り直した拳にパワーを込めて。

「コノヤローーッ」

ドンッッッ。

壁が怪物ごとへこんだ。しかし萌黄の拳は敵に全く触れていなかった。

シュウは落ちてくる壁の破片をよけながら、ぶるっと身体を震わせた。

「これがリアル同士の戦いか……」

萌黄は自分の身体が、まるで厚い装甲に覆われているような気がした。空気の鎧よろい、エアスーツ。それでいて、指を伸ばせば先端まで神経が通っているような。力がすみずみにまでみなぎっているような――。

（倒す――倒す、倒す、倒す！）

しかし怪物は想像以上にタフだった。自力で壁からはがれると、客席の上を転がりながら横へと逃げていく。

「逃がすか！」

萌黄も執拗に追う。伸ばした左足（のエア）で怪物の尻尾らしき部分を踏みつけ、動きを封じる。そして右足に体重をかけると、怪物の真ん中に振り下ろした。キュウツと空気の漏れるような悲鳴が上がる。

怪物は苦しんでいる。哀れみを乞うている。

（何を今さら！）

萌黄は齒を軋ませて怒りを増幅させた。今度は怪物の特に膨らんだ部分を、力いっぱい踏みつけた。怪物は追いつめられたネズミのような声で鳴いた。

（苦しめ！ 苦しみ抜け！ むんはもつと痛い目に遭うたんやから）

萌黄の怒りは残忍さを帯び、さらに膨れ上がった。

「シュウさん」

部下のひとりが、ぽかんと口を開けて寄ってきた。

「なんだ」

「あの娘ですけど……俺の目がおかしいんでしょうか。身体が大きくなってませんか？」

「なっている」

「えっ？」

「大きくなっている——彼女もリアルだ。何が起きても不思議はなからう」

ふたりには萌黄が三倍ほどにも拡大して見えた。いや

見えているだけではない。実際に巨大化していた。でなければ、彼女程度の体重で、怪物を押さえきれぬわけがなかった。

ごとり。

物音がした。さつきパン生地が叩きつけられた。その下の瓦礫が床に散乱している辺り。瓦礫の陰から、いま、クッションのような白い物体がゆらりと現れた。

（壁の中に詰まっていた緩衝材か？）

白い物体は二、三回転がると、勢いがついたように空中に跳ねとんだ。

「あれは？」

部下が間の抜けた声を上げたが、シュウはすぐその正体に気づいた。

「真崎の一部だ！」

クッションはまるで見えないプレスで圧縮されたかのように平べったく横に伸びた。そして空中を浮遊しながら、周囲にギザギザの刃を生やし、回転さえし始めたではないか。

「丸ノコ!？」

丸ノコはギュイーンと回転音を高めると、円盤のように、さらに高みへと舞い上がった。

丸ノコの飛んだ先には――。

「萌黄さん、後ろに気をつけろ!!」

萌黄は自分が巨大化していることにも気づかないまま、怪物の上に馬乗りになって、怒りを塗り込めた鉄拳を幾度も幾度も振り下ろしていた。

「こいつ！ こいつ！ こいつ!!」

ボコンッ、ベコンッ。ボヨンッ。

殴っても殴っても、まるで餅をこねているような感触しか返ってこない。

「なんとか言うたらどないや！ ホンマに真崎やったら、嫌みのひと言もしゃべってみい！」

怪物は、反抗するのをあきらめたように、ゲフッなどと空気の抜けるような声を漏らすばかりだ。

張り合いのない相手に怒りの収まらない萌黄は、怪物の背中に指を食い込ませると、力を込めて引きちぎった。怪物は身をよじって痛みを訴えたが、萌黄は意に介さない。

切れ端は手の中でモコモコと動いた。あまりの気味悪さに、壁際に投げ捨てると、まるでひな鳥が親鳥を求めるように、ササッと本体に帰ってこようとする。萌黄はそばに落ちていた青い破片を拾い上げ、切れ端に突き立てた。切れ端は本体に合流する直前で、針で止められた

標本の虫のように動けなくなった。

青い破片は、ミニチュアの椅子だった。

（なんでこんなオモチャが？）

その時、誰かが萌黄の名を呼んだ。

――？

声のほうに顔を向けた途端、萌黄の右耳を白いものがかすめた。あわてて手を持って行く。指に血が付いた。

飛行物体は、はつきりした形もつかませないまま、航空機のような滑空音を響かせて弧を描き、今度は正面から向かってくる。

――ブーメランか？

正体を探っている余裕はなかった。萌黄は身体を倒して飛行物体をよけた。物体は反転して、三度目の接近を試みる。萌黄は別のオモチャ椅子をつかむと、物体がギリギリまで近づくのを待ち受け、ラケットでボールを打ち返す要領でこれをはたき落とした。物体は壁に突き刺さって止まった。舞台の外周には刃が二重に付いていた。平べったい部分はパン生地 of 怪物と同じ色と質感を持っている。萌黄は怪物の本体に目を落とした。コイツが分離した自分の一部を遠隔操作していたというのか？

――なんちゅう奴^やっちゃ……。

萌黄は身体から力が抜けていくのを感じた。

「すげえ……」

シュウの部下はため息をついた。シュウは頷くだけだったが、部下は続けて、

「どっちを応援したらいいんでしょう？ あの手物は隊長代理ですよね？」

「……」

シュウにも答えられない。いずれにせよ戦いは萌黄の勝利に終わったようだ。シュウは部下の様子に、

「おい、あんまりジロジロ見てやるな」

「はあ。あのコ、ひょっとして気づいてないんですかねえ」

萌黄はようやく異変に気がついた。

「うわっ、なんでなんで！」

彼女は全裸だったのだ。下着すら付けていなかった。

身体が巨大化し始めた時点で破り去っていたのだが、敵に気を取られて全く気づいていなかったのだ。

両手で胸を押さえながらうつむく。周囲の景色が小さくなっていることにも、やっと注意が行った。

（どないなってるの、わたし——）

羽織るものを探しても、布の切れっばし一枚落ちていない。代わりに苦笑混じりで見上げるシュウたちの視線とぶつかったただけだ。互いに視線を逸らす。

そこに油断が生じた。

空気がほんのかすかに震えた。

本能的に危険を感じたシユウは、瞬時に腰を屈めて難を逃れた。しかし部下は不幸にも、自分の身に何が起きたのか、知る暇もなかったろう。真ん中を縦に分断された部下の身体は、霧のように砂をまき散らしながら、左と右に泣き別れていった。

しかし狙われたのは彼らではなかった。

萌黄の左腕に、突然、焼きごてをあてられたような激痛が走った。

「——っ！」

耐えきれず、萌黄は乗っていた怪物の上から転げ落ちた。集中力の吹き飛んだ身体を受け止めたミニチュアの座席が脇腹に食い込む。

やられた、油断した！

一個目の丸ノコ型円盤はオトリだったのだ。安心させておいて時間差で相手にダメージを与える、二段構えの攻撃。

激痛に頭の芯が熱くなった。かなりの深手だ。動こうにも、足許に横たわる怪物のぬるぬると滑る皮膚のせいで、なかなか身体を起こせない。

ギューーンと不快なノコギリ音が左へと移動していく。しかめた眉の下の瞼を無理して開く。白い物体がエ

ンジェルフォールの向こう側を迂回しながら、再びこちらに戻ってこうとしている。再アタックをかけるつもりだ。

萌黄は背中を支点にして壁際に怪物から離れた。傷口に座席が当たって、思わず仰け反る。これではエアスーツを身に着けたくても、精神の集中がままならない。

——リアルパワーで傷口をカバーせんと。

萌黄は壁に背を押して、飛翔する円盤から目を離さずに、右手で左腕をさすろうとした。

しかし手の平が触れたのは脇腹だった。手の甲に温いものが垂れた。萌黄は呼吸するのを忘れた。

——ない！ 腕がない！

4

周囲の景色が、ふっと遠のいた。

意識を失おうとしているのか。

そうではなかった。萌黄の身体が縮み始めたのだ。元の大きさに戻ろうとしているのだった。

そのせいか、無性に身体が熱い。後から後から汗が噴き出してくる。まるでサウナに入っているようだ。実際には行ったことはないけれど。

聞こえるのは心臓の音ばかり。早鐘のようにつて表現

はこんな時に使うのだったか。呼吸もひどく荒い。肺が大量の酸素を欲して、必死に働いている。

萌黄の指は、左腕の切断面をなぞるように撫でた。まるで沸騰した薬缶を押しつけられているような熱い痛みが、付け根を通ってじりじりと伝わってくる。

この上もない虚脱感が重くのしかかる。動こうにも、足にも腰にも力が入らず、気力さえ吸い取られるように消えていく。

もはや、頭の中は真っ白だった。

どうして自分はここにいるんだろう？ なぜこんな目に遭うんだろう？ むんは——そうだ、むんはどこにいるんだろうか？ むん無しでは何をしていいのか判らない。

リアルキラーズに我が家を襲撃され、母が殺された。猫のウィルもいっしょに。伊里江真佐夫と出会って、むんや揣摩とともに逃亡を続けた。米軍の攻撃も受けた。ヴァーチャルの伊里江が落命した。久保田と出会った。岩村とサキを手に掛けてしまった。京都では父と再会し、清香や齋藤と出会ったのも束の間、脱出。たどりついた先はW I B A。なのに真佐吉は既に亡き人だった。

（それで……それから、何があったかなあ）

頭の中がグシャグシャで思い出せない。そして、自分がこんなひどい苦痛を受ける理由が思い当たらない。こ

んな罰を受けるようなことを、何かしでかしたのだろうか？

——疲れたな。

ずっと片隅に追いやっていた睡魔が、ゆらりと腰を上げて萌黄に襲いかかってきた。そういえば大津のコテージ以来、まともに眠る暇がなかった。

上瞼が終演の幕のように降りてくる。ちよつとのあいだでいいから眠りたい。

その時、狭まる瞼のあいだを横切ったものがあつた。ふと、まぶたの下降を止め、ゆつくりと顔を上げた。

あれほどのダメージを受けたはずのパン生地怪物が、萌黄の前にすくと仁王立ちしていた。そう、怪物は今や二本の足で立っていた。両腕もある。あちこちに焦げ目があるが、まぎれもなく人型に変貌していた。

「も……えぎ……」

驚いたことに、怪物の顔のあたりに切れ目ができ、言葉が漏れ出した。その上には横に並んだ二つの切れ目。人間だった時の目の名残だろう。

「これ……で……お……前も……終わ……りだ」

目と口の間が隆起し始めた。鼻だ。口には赤味が差し、唇らしい形に変わろうとしている。

「お前を……殺せば……俺は……英雄だ……親父に……ギヤフン……と言わせ……てや……る」

言っていることはよく理解できないが、まぎれもなく真崎の声だった。浮き出した顔が真崎に似てきた。のっぺりした肌の上に、まるでデスマスクのように浮かぶ真崎の顔。傷跡までが再現されている。それは能面のような、あまりに不気味な顔貌だった。

——ここで真崎にやられるのか。

あきらめの気持ちが次第に心を支配していく。ひどく眠たい。もういいや。何も考えたくない。

今にも眠りに落ちてしまいそうだった。しかし、腕の激痛が伝わってきては、失いそうになる意識を何度も引き戻そうとした。

怪物はあらぬほうを向いてかがみこみ、またこちらに向き直った。そして萌黄の瞼が閉じようとした時、つかんでいたものを彼女の膝の上に、無造作に放り投げた。

左腕。一瞬にして萌黄の目は覚めた。顔を上げると、真崎は人間とは思えないひきつった声で笑った。

「……とどめだ……」

怪物の手は、萌黄の腕を切り落とした円盤を握っていた。円盤の周囲には、一枚目のよりさらに鋭い刃が並んでいて、まるで食虫植物の棘とげのようにうごめいている。

隊長代理！ 男の声がした。怪物は振り上げた腕をそのままに、わずかに横を向くと、

「シュウか……黙って見てろ」

言い捨てると、怪物は腕を大きく振りかぶった。シュウの部下がやられたように、唐竹割りにするつもりだ。

「あばよ……」

裂けた唇がにやりと微笑んだ。ところがその時、怪物は奇妙な動きを見せた。足の裏を前に突き出すと、ぐらりと傾き、背中から客席の上に倒れていったのだ。グエエと動物めいた悲鳴とともに。

萌黄にひとつの影が迫ってきた。

「まあ——ヒドい！」

清香だった。彼女はリアルパワーで怪物を背中から攻撃、いや空気の塊を当てて、押し倒したのだ。

「これを着るのよ」

清香は倒れたままの怪物を一瞥すると、全裸の萌黄に手早くジーンズをはかせ、急いでTシャツに首を突っ込ませた。ジーンズの丈は彼女の足より幾分長かった。

「服……どこにあったん？」

「むんさんのよ。構わないでしょ？」

——むん！

途端に現実がドツと頭の中に流れ込んできた。

むんが死んだ——。あらためて突き付けられた事實は、やはり受け入れがたいものだった。

「わたしも……死にたい……」

「バカッ」

清香が萌黄の頬を平手で打った。

「ヴァーチャルのむんさんがここまでがんばったのに、リアルのアナタがそんな弱気でどうするの!？」

厳しい口調でたしなめる。萌黄の目はうつろなままだ。清香は萌黄の傷口を見やった。

「スゴい……。もう塞がりかけてる。さあ、早く逃げるのよ！」

清香は自分の肩を貸して萌黄を立たせようとした。しかし、動く^{しび}と痺れるような激痛が全身を貫き、萌黄はたまらず腰を床に落とした。

怪物は、再び飛びかかろうと身構えていた。バランスの悪い二本足を反省してか、今度は足を仕舞い込み、元のパン生地に戻っていた。

清香は空いている手を広げて気を集中し、空気の塊を作って怪物に浴びせた。しかし相手もリアルである。容易に跳ね返すと、身体を大きく広げて迫ってきた。今度の作戦は、パン生地の中にふたりを取り込み、窒息させようというらしい。

見上げるような怪物の壁。睨みつける切れ長の目。清香は射すくめられて、震える膝を床に落とした。争いごとを好まない彼女には、闘うなど土台無理だった。

「あわわわ」

救いを求めて正二十面体に視線を送っても、すでに穴

にたまった水はあふれんばかり、水面は立体を叩かんばかりになっている。しがみつくと人々がどうにか落ちずにいるのは、齋藤が立体をエアシールドで囲んでいるためだ。それもいつまで保つか。

「萌黄さん、どうしよう……」

だが萌黄はうなされたように、もういい、もういいとつぶやくばかりで、全く当てにならない。

怪物は退路を塞ぎながら、静かに間合いを詰めてきた。萌黄と清香は袋のネズミだった。

怪物は勝ち誇ったような含み笑いをこぼすと、ふたりの上にゆつくりと覆いかぶさった。清香にはそれを押し返すだけのパワーはなかった。

水の流れ落ちる巨大スリット。ハジメはその隙間から顔を覗かせて、遙か眼下を見おろした。

ここに来るまでは、彼の行く手を阻むものはなかった。ただ、一度は止まった湖水の流入が再び始まった時にはさすがに心配した。このままではW I B Aは湖の底に沈んでしまうのではないか？

階段の行ける所まで降りてきた終点がここだった。

だがスリットの下には、その先の空間が広がっていた。しかもどうやら競技場のようだ。

彼はスリットに飛び込んだ。服をはためかせながら猛

スピードで落下していく。目指すは競技場。

「ン？」

客席に妙なものが寝そべっている。動物のようで、そうでなさそう。さらに高度を下げる。どうやら様子がつかめてきた。白い物体は眼前にいる人間を取り込もうとしているらしい。その人間は――

「清香と……萌黄、か？」

白い物体がふたりを包み込んだ。

「ヤバイ！」

ハジメは身体を密度の濃い空気で包むと、落下速度を速め、白い物体の上に弾丸となって落下した。

ズドンッ。

床を揺らすほどの衝撃が走った。ハジメはランポリンに弾かれたように宙天高く飛ばされると、一回転して、客席の中に着地した。

白い物体は、まるでダメージを受けていない。

彼は舌打ちし、銃を向けたまま立ちすくんでいるシュウに駆け寄った。

「なぜ撃たない」

非難するように訊ねると、

「さつきから撃ってる。全く効かないんだ。このままでは、ふたりは窒息死してしまう」

ハジメはもうひとつ舌打ちした。

「——貴様、リアルの一味じゃないか」

シュウは、横に並んだ男がハジメであることにようやく気づいた。生き残りの部下とでも思っていたらしい。

「ここで何をしてる!？」

ハジメは答えず、目の前の異様な光景を指さし、

「このデツカい布団みたいなのは何なんだ！ まさか生きてるんじゃないだろうな？」

「生き物だ。真崎隊長代理の成れの果てだ」

「真崎？ あのクソったれの!？」

「隊長代理も——リアルだったんだ」

ハジメは目を丸くした。

シュウの拳銃が怪物に向けて火を噴く。銃弾はボスボスとめり込むばかりで、全く打撃を与えられない。

怪物の地肌の一部が、スルスルと天井に向かって伸び上がった。伸びた先端が見る見るうちに鎌のような形へと変わっていく。

「気をつけろ、攻撃してくるぞ！」

シュウが言うや、鎌が風を切ってふたりに襲いかかった。シュウは床に身を投げてこれかわした。

ハジメは身軽にジャンプし、長細い鎌首に足を絡めた。

すかさずリアルパワーを込めた手刀を落とす。しかし鎌首はぐにやりとへこんだだけで手応えはなく、逆に振り落とされてしまった。

チッ。三たび舌打ちすると、姿勢を低くし、客席のあいだをダッシュで駆け抜けた。怪物と床の隙間から中へ突入しようと考えたのだ。ところがどこに目が付いているのか、ハジメの行く手は、垂れ下がってきた怪物のひだのような身体によって遮られた。別の場所からの侵入をと周囲を見回したが、すでにほとんどの座席は剥ぎ取られて、這い込む隙間はなかった。

いま、萌黄と清香がいた辺りだけがふつくらと盛り上がっている。それもさつきよりは小さく、しかもタオルを絞るように振^ねじれ始めている。

「ふたりを圧殺するつもりだ！」

シュウが後ろから叫んだ。ハジメも同感だった。怪物が真崎だというのは理解を超えていたが、ふたりを潰そうとしていることだけは確かだ。

何か策は？ 焦ったハジメは、周囲に目を走らせた。流れ落ちる滝の向こうに黒い立体が左右に揺れている。その上に齋藤がいるのを発見した。他にもいくつか見覚えのある顔が、落とされまいとしがみついている。他には客席の離れたところに見知らぬ男たちがかたまっているくらいで、加勢を頼めそうにもない。

ふと、ズボンの後ろポケットに突っ込んだままの銃を思い出し、引き抜いてみた。囚われていた部屋から逃げる時に持ち出したものだ。銃身が太いくせに銃口はやたらと小さく、まるでSF映画に出てくるような、妙な形をしている。ひいき目にも、女性の護身用にしか見えな

い。
鎌首は依然、ふたりを狙っている。じつと立ち止まっ
ていてはやられる。

「その銃をどうした？」

シュウが攻撃をかいぐぐってハジメに駆け寄った。

「勝手に拝借した」

「それは、野宮博士の作った銃だぞ」

ハジメは博士の容貌を思い出した。

（あのでつぷりとふんぞりかえった奴の？）

目を近づける。銃把に、M a d e b y K . N O M
I Y Aと彫られている。

（オモチャじゃないだろうな）

ハジメは試しに空に向かって撃ってみた。ところが銃弾は出てこず、煙のように黒いものが発射されただけだ。それを見て、ハジメの口の中に苦い唾液が込み上げてきた。黒い煙には見覚えがあったのだ。

「俺を動けなくした銃か——」

正確には小型化したものだった。野宮が彼を倒した銃

はもつと大きな造りをしていた。

呆然とするハジメに鎌首が鋭く落ちてきた。ハジメはためらうことなく、野宮の銃を向けて撃った。

効果はてきめんだった。煙のような黒い光を浴びた鎌首は苦しげにもだえ始めた。そして突然電気が切れたように床に落下すると、そのままのびてしまった。

「使い方に注意しろ。その中に内蔵されてるプラズマをちよつとでも身体に浴びたら、あの世行きだぞ」

「言われなくても——」

ハジメは両手を添えると、怪物の膨らんだ部分から離れた、縁の部分に向けて光線を照射した。萌黄たちに当たってしまったては本末転倒だ。

ウオオーッ。

怪物の悲鳴が、雄叫びのように競技場に響いた。

ハジメは引き金を引き続ける。怪物はたまらず逃走し始めた。

怪物の下から、萌黄たちが転がり出てきた。

「ふたりは俺にまかせろ」

シュウが言うと、ハジメはジロリと鋭い視線を投げつけた。

「アンタ、迷彩服だろ。どっちの味方だ？」

シュウは一瞬目を泳がせたが、きっぱりと答えた。

「少なくとも、怪物に味方するつもりはない」

清香が喉を押さえながら激しく咽むせていた。その横で萌黄は口を開いたままピクリとも動かない。シュウは介抱すべく腰を落としたが、ハジメが動こうとしないので、何も言わずに、持っていた銃を遠くに放り投げた。

それでもハジメは、

「――彼女らに何かしたら、お前を砂に変えてやるからな」

そう言ってから踵きびすを返し、逃げていった怪物の後を追った。

シュウは清香の頬を手の甲で叩いた。彼女の目が開いたのを確かめてから、萌黄の上にかがみ込んだ。

「う……」

さすがのシュウも、Tシャツの袖から覗く萌黄の腕を見ると、ため息をつかずにはいられなかった。

「かわいそうに」

幸い、萌黄にも息があった。

むんの遺品であるTシャツとジーンズはあちこちが破れ、吹き出た脂汗が萌黄の全身をくまなく濡らしていた。

「萌黄さん」

肘をついて上体を起こした清香は、手を伸ばして萌黄の顔に張りついた髪をどけてやった。

「心配するな。彼女は生きてる。俺が運んで行ってやるよ」

そう言って、シユウは萌黄を両手で抱き上げた。

「運ぶって、どこへ？」

「真佐吉——いや、P A I が言ってたろ。天井から吊り下がったあの黒い立体が転送装置なんじゃないか。君たちリアルは、あれに乗って元の世界に帰ってほしい。そして、それを手伝うのが、俺の最後の仕事だ」

6

怪物は撃たれるごとに身体を引き攣らせ、ダメージを受けた身体をトカゲのごとく斬り捨てながら逃げ続けた。ハジメは空を飛びながらこれを追った。すでに怪物の大きさは、最初の四分の一ほどにまで縮んでいた。

ハジメの撃つへ小型プラズマ照射装置は、確実に怪物のパワーを奪い取っていた。その証拠に、逃げる怪物は、徐々に元の人間の姿に戻りつつあった。

「本当に真崎らしいな。——信じられん。奴がリアルだったとは」

そのうちに、光線の出力がガクンと落ちた。エネルギーが底をつきかけているらしい。舌打ちしてハジメは真崎に接近した。残ったエネルギーでとどめを刺さねば。と、その時——。

ズズズーン。脳みそが揺さぶられるほどの地震が競技

場を襲った。そのためハジメの指は狙いを定める前に引かれてしまい、光線は標的を大きく外してしまった。

「クソッ」

悔しがっている場合ではない。揺れは治まるどころか、広がりを見せ、彼の目には場内が二重三重にダブって映った。

何が起きているのか？

判らないまま、ハジメは上下の感覚をなくし、失速して客席の上に背中から墜落した。

エアクッションがなければ即死か大怪我というところだ。

すぐに起き上がり、体勢を立て直す。常に周囲の警戒を怠らない。そして人を信用しない。彼が不良少年としての生活や、少年院などで培った習性だ。

揺れる床の先が水に浸っている。彼の目は、まさに真崎の身体が水の中に消えようとしている一瞬を捉えた。

すぐに追いかけたかったが、とても立ち上がることができないほど、床の振動は凄まじかった。

滝の膨大な水量によって、穴の中の水位はすでにアリーナの周囲の壁をやすやすと越えていた。その様子は客席の後部にいたハジメからもよく見えた。

「どうしたってんだ——水が傾いてるぞ——いや、壁も何もかもだ」

滝の落水のおかげで現状を把握することができた。

W I B Aは明らかに傾いていた。壁と滝とのあいだに角度ができていたからだ。

もしや米軍の攻撃が予定より早まったのか！ と疑ったが、ズズズと引きずるような音は足の下から聞こえる。ということは――。

真崎の追跡をあきらめたハジメは、一跳躍で萌黄のところに戻った。

「オイ、この地震は――」

「おそらく滝のせいだ」シュウはすぐに答えた。「地下に流れ込んだ湖水が限界を超え、W I B Aの喫水線が上昇したんだ。おかげでW I B Aは沈降し始め、海底にぶつかって傾いたんだろう」

なるほどとハジメは納得した。

「それより、真――怪物はどうした？」

「水中に逃げた。ほとんど人間の大きさまで縮んだんで、ヤツにはもう何もできないだろう」

「逃がしたのか……」

シュウは舌打ちした。ハジメはむっとして眉を寄せると、シュウの腕の中にいる萌黄を顎で指し、

「どこへ連れてく気だ？」

「正二十面体とやらへ、な。あれがリアル世界と繋がる唯一の装置だ。さつきから齋藤のジイさんがひとりで踏

ん張ってる。お前も行って手伝ってやれ」

「命令すんな」

ハジメはガンを飛ばしたが、年季の入った分、眼光の鋭さはシュウのほうが上だ。フンと鼻を鳴らして顔を背ける。

「そして、早くこの世界から消えてなくなれ。後の始末は俺たちでやる」

傾いた穴からこぼれ出した水と、落ち続ける滝の水は、次は観客席を水面下に沈めていく。

場内はどこもズタズタだった。怪物によって押し倒され、潰された座席、崩れたり剥がれたりと無惨な壁。そして空中を漂う霧。

そんな惨憺たる場内から、ハジメやシュウのところに生き残った人々がぞくぞくと集まってきた。六道たちである。

「正二十面体に仕組まれた機械の操作については、少しは聞いている」六道が言った。「ただし、あくまでも真佐吉が当初計画した爆破用で、元の世界に戻す方法は判らんが」

「やってみてくれ。アンタに地球の未来が懸^かかってる」シュウが励ますように言うと、六道は困った顔で、

「たぶん、教えられたのとは反対にやればいいと思うんだけどな」

W I B Aが傾いたおかげで、逆に立体は壁のそばへと移動し、滝を避けて乗り移るには絶好の位置にあった。

六道が立体を構成する三角形のひとつに取りついた。ボタンを押すと蓋がスライドし、制御装置のようなものが現れた。

「さあ、リアルは順次、開いたカプセルの中に寝そべってくれ」

迷彩服を着たシュウの指示に、リアルたちは素直に従った。齋藤のひと言が効いているようだ。彼は気絶したままの萌黄の頭を優しく撫で、

「逃亡の合間にチラリと言うとったよ。シュウっちゅう人だけは信用してええってな」

シュウは何と答えていいか判らず、苦笑した。

傾いたW I B Aが、この後どうなるのか、誰にも判らない。それを考えるとグズグズしてはいられない。

「これだ！」

六道の声が人々の耳を打った。誰もが期待の目で彼を見た。

「オートモードの中に〈転送〉という項目がある。このコマンドを実行すれば、後は勝手に装置がやってくれるはずだ」

ようやく、と齋藤が拍手した。周囲もつられて手を叩いた。

六道は急いで準備に取りかかった。

「あ……清香……」

「……………」

呼びかけたのは雛田だった。清香は一拍の間があつてから振り向いた。彼女の目には、それまでにない色が含まれていた。

「その……つまり……」

「本当のお父さんなのね？」

ストレートに訊かれて、雛田はたじろいだ。WIBAに到着するまでは、どうやって告白すればいいのか、あらゆる状況を想定していたつもりだった。しかし、こうなってしまったて、あらためて彼は混乱していた。

「お父さんなんでしょ？」

清香の顔がぐんと近寄る。雛田は耐えきれず、ポケットから携帯を取り出し、カバ松を呼んだ。

ピンクの動物はにべもなく言った。

《この期に及んで取り乱すな。みつともないぞ》

「そ、そうは言ってもだな……」

《おい待て。ありや何だ？》

カバ松が短い前足で彼方を指さした。雛田と清香はそちらに顔を向けた。

正二十面体の向こう、何もないところで、奇妙にも大きな水しぶきが上がっていた。

しぶきはすぐに消え、元の渦巻く水面に戻った。上から何かが落ちてきたのか、はたまた疲れ目かと、雛田は目をこすりながら上空を見上げた。

カーテンのように取り囲むエンジェルフォールの壁は、いまだに衰えることなく湖水を注ぎ続けている。彼らがいる競技場が水没するまでには、あと数時間とかからないのではないか。

「どうした？」

シュウが緊張の面持ちで近づいてきた。気絶している萌黄を連れて、彼も正二十面体に移ってきたのだ。

狭く足場の悪い立体の上には、他にも清香、齋藤、伊里江、炎少年、六道がおり、ハジメが水の打ち寄せる客席側から、まさに飛び移ろうとしていた。

「いえ……目の錯覚でしょう。何もないのに水がしぶいたような気がして」

シュウは顔色を変えた。怒ったような視線を周囲に走らせる。雛田はあわてて、

「いや、気にしないでください。僕の見間違いでしょうから」

「そうとも限らん」

シュウの頭にあつたのはもちろん真崎のことだった。

怪物の姿になったのが、本人の意思によるものか、あるいは持てるパワーに自らの身体が耐えられなくなった結果なのかは判らない。ただ、あれほど盲目的にリアルを追いつけた彼のことだ。生きていればきつとまた襲ってくるだろう。死んだなどと楽観視するのは禁物だ。

水面には水草や死んだ魚など、さまざまなものが浮いている。そのあいだに、まだ新しい建築資材や潰れた段ボール箱などが混ざっていた。上の階から押し流されてきたのだろう。多数の漂流物に邪魔されて、水中をうかがうのは容易ではない。

「もしや、さっきのパン生地ですか？ アイツはハジメ君の光線を浴びて——」

雛田が不安を打ち消そうと強いて明るい声を立てた時だ。水がバシャツと大きく跳ねた。

立体からわずか五メートル。不自然な跳ねかただった。「伏せろ！」

シュウは両腕を広げて雛田と清香を押し倒した。ほぼ同時にヒュツと風を切る音が傍らかたわを通り過ぎ、カンツと骨組みを鳴らす音がした。

シュウは素早い動作で銃口を向けた。

しかし、その先にあつたのは、齋藤と六道の疲れた顔だけだった。シュウは戸惑った。

見逃した——？ いやそんなはずはない。

優れた動体視力はシュウの天分のひとつだ。その彼の目が捉えなかったということは、本当に気のせいかな。

今度は別の方角で水面がしぶいた。

シュウが反応して身体を起こすと、コンマ〇一秒の差で、顔のそばをつむじ風が通り過ぎ、薄く皮膚を切り裂いた。

やはり気のせいではなかった。つむじ風は風などではなかった。そこに心臓の脈打つ音さえ聞こえた。真崎の鼓動だった。

だが、狙われたのはシュウではなかった。

正二十面体を天井から吊るしていた太いチェーンが、バチンと弾けるように切れた。唯一の命綱ともいえるべきチェーンを失った立体は、ゆっくりと水面に落下した。

立体が着水する衝撃が、気絶していた萌黄のまぶたを開かせた。

（——ここは？）

幸運にも立体は沈まなかった。あらかじめ滝の水にさらされることを想定してか、中心の核の部分は防水設計の筐体に収納されており、図らずもそれが浮き袋の役割りを果たしたのだ。

「うわわわ！」

上半分で浮いた正二十面体は、水の上をゆつくりと転がった。萌黄はずり落ちる背中を止めるべく両手を伸ばそうとして、ようやく左腕のないことに気がついた。彼女は滑り台を滑り落ちるように、水中に放り込まれた。あぶくが萌黄を押し包む。酸素を求めて右手を掻いてもなかなか浮上できない。

パニックに陥りそうになった瞬間、ふと、底知れぬ冷たい感覚が萌黄の背中を撫でた。

真崎——奴がそばにいる！

水の中で薄目を開く。見上げる水面はキラキラと照明の明かりを映している。多少濁ってはいるが、水中の視界はそれほど悪くない。

（どこにいる？）

人間の姿も、パン生地の怪物も見えない。それでも彼女のアンテナは、邪悪な意思がそばにいることを告げていた。

四方に顔を巡らせる。やはり真崎の姿はどこにもない。萌黄はもがくのを止め、じっと気配をうかがった。腕がないせいでバランスが取りづらかったが、リアルパワーは使わなかった。使えば相手も萌黄の存在を嗅ぎつけるだろう。まだ気づいていなければの話だが。

（こちらにも気配を消そう。水に同化するみたいに）

同化？

萌黄はあらためて周囲を取り巻く“水”に注目した。

（いた）

驚いたことに、真崎はすぐ目の前にいた。

ハジメに手ひどくやられたパン生地のような身体を、さらに極限まで薄く広げていたのだ。あまりに広げ過ぎた身体はほとんど紙のようで、向こう側が透けて見えていた。まるで水に同化するように。

真崎は萌黄に触れそうな近距離で、さながらエイのように泳いでいた。泳ぎながら真崎はその薄っぺらい身体を蛇腹のように縮めた。その姿は、獲物を狙って伸びる前のカメレオンの舌を連想させた。

舌の先には、波に翻弄される正二十面体があった。

（あかん！）

萌黄はありったけのパワーを右手に込め、真崎に向かって突き出した。パワーは波動となって水を動かした。しかし真崎の動きはそれより速かった。伸びた蛇腹は立体の底部に命中し、その衝撃音は萌黄の耳を叩いた。立体が水面から消えた。空中に弾き飛ばされたのだ。同時にパワーの直撃を受けた真崎も、クシャクシャの紙となつて濁った水の向こうへと見えなくなった。

萌黄は急いで浮上した。息が限界だったのだ。

客席に打ち上げられた立体が、真っ先に目に付いた。

黒く細い骨組みは無惨にもひしゃげて横たわり、透明力

プセルも粉々に砕けて、すでに見る影もない。

「ああ……転送装置が……」

萌黄から全身の力が抜けた。

仰向けになって水の上に浮かんだ。ふいに笑いたい気分がしたのでアハハと笑ってみた。笑うとさらにおかしみが増大し、声を上げて爆笑した。

最後の転送装置が壊れた。

元の世界と繋がる道が消えてしまった。

あと少しやったのに。

やっぱ現実は、映画みたいにうまいこといかへんもんやなあ……。

右手を動かして、左腕の付け根をさすってみる。

左腕はもはや存在しない。これも現実や。

頭の中が霞がかかったようだ。これもたくさん血が流れたせい。現実。現実。

目の端に、自分の着ているTシャツが映った。むんだ。むんは——むんは——ホンマに死んだん？

笑顔はやがて涙顔になった。思わず拭^{ぬぐ}おうと伸ばした手は右腕だけ。左腕はむんといっしょにあの世に行ってしまった。

あれほど生気に満ちあふれたむんがいなくなるなんて。わたしなんかより、むんこそ生き続ける必要のある人なのに。

（最後は、そばにおらんでも、テレパシーで話ができるようになったのに……）

まあ、わたしもいずれ爆発してこの世界から消える。
このヴァーチャル世界で死ぬことになるんやねえ。アハ
ハハ――。

助けてえ。

誰かが悲鳴を上げていた。そう遠くではない。
時々声が途切れる。どうやら溺^{おぼ}れているらしい。

アホやな、泳げもせんに水に入るなんて。

ああ、立体から投げ出されたんか。気の毒に。

……にしても、聞き覚えのない声やな。どなた？

萌黄は大儀そうに顎を引き、うつろな目を声のほうに
向けた。

声の主は意外にも、目と鼻の先に浮かんでいた。しか
しそれが誰なのかを知った時、萌黄は目玉が飛び出すほ
ど驚いた。

頭の中の霞が一瞬にして吹き飛んだ。

8

萌黄は水を掻きながら、悲鳴のほうへ近づこうとした。
身体を動かすと腕の付け根がジンジンと痛む。水の冷た
さがかろうじてそれを抑えてくれた。

片手泳ぎでは思うように進まない。そのうちに悲鳴が波に飲まれたのか聞こえなくなった。萌黄はようやくパワーを使うことに頭が行き、絡み付く水に逆らわず、身にまとうイメージを思い浮かべた。

泳ぐのを止めた身体が水の上を滑り始めた。一直線に突き進み、声の主を救い上げると、そのまま水の鎧の中へと引き込んだ。

声の主は腕の中で震えていた。その顔は凍りついたように蒼白だったが、さっきは確かに唇のあいだからナマ声を上げていた。

「炎くん！——」

信じられなかった。確かに萌黄は彼が発した声を聞いたのだ。

少年の身体は氷のように冷えきっていた。萌黄は彼を抱え上げると、耳許で名前を呼んだ。

三度目にして閉じていたまぶたが重たげに開いた。まるで糊で固めた割れ目を引き剥がすかのように。

意外にも少年の目はくりくりと愛らしく、円らかな形をしていた。数年ぶりに明かりを受けたせいだろう、瞳はすぐにすぼまり、ぎこちなくまばたきを繰り返した。

「もえぎさん、おれ……」

たどたどしい声はスピーカーや携帯越しに聞いていたものとはまったく違った。

「大丈夫。じつとしてて」

萌黄はとっておきの餌を抱えたラッコのように少年を胸の上に乗せると、背中をサーフィンボードに見立てて、水の上を滑り始めた。

鼻の先にある少年の頭頂部に血がにじんでいた。顔を傾けると、首筋にも打ち身の痕がある。

「痛む？」

ささやくように問いかけると、

「すこしだけ。でもからだじゅうのしんけいがこんがらがって、からだのどこがどうなってるのかよくわからないんだ」

少年は持ち上げた指を動かそうとしたが、フワフワと震えるばかりで思うように動かせないようだ。

「ちえーんがきれたとだれかがさげんだ。そしたらみずのおとがした。そのあとしばらくしてごすんとぶいおとがはしって……めがさめたらみずのうえにいた。おれ、じぶんのめでみてる。じぶんのくちでしゃべれてる」

冷たい水が萌黄の正気を取り戻させた。少年が三年に渡る植物状態から奇跡の復活を果たしたのは、冷たい水のせいだろうか。それとも頭や首をどこかに打ちつけたせいかな、それとも――

「りあるばわーのおかげかな？」

「その全部かもね」

「ぜんぶ？」

背中がゴツンと壁に当たった。と同時に伸びてきた腕が、彼女を水から引き上げてくれた。雛田だった。

「この子をお願い」

萌黄は炎少年を雛田に託した。

「なんだ、おっさんか」

少年が前置きなしに投げた言葉に、雛田はウワツと叫んで尻餅をついた。あわてて清香が少年を受け止める。

「みんな無事か？」

ハジメが客席の向こうから駆け寄ってきた。すぐ後ろにシュウが続く。さらにその後方には、伊里江と齋藤が横たわっているのが見えた。全員頭のてっぺんから足の爪先まで、ぐっしよりと濡れている。立体から振り落とされ、ここまで泳ぎ着いたのだ。

炎少年の突然の復活には、皆が驚きを隠せないでいた。少年は自分に注目が集まっていることには頓着せず、くんくんと鼻を鳴らしていた。

「くさいな。よごれたみずのにおいやら、こげたにおいやら」

焦げた臭いは、ハジメに撃たれた真崎が千切り捨てていった身体から立ちのぼる煙のせいだ。萌黄が気を失っているあいだのことをシュウが説明して聞かせた。

萌黄も水中で見たことを伝えた。立体を攻撃したのは

真崎で、薄い紙に姿を変えた彼はいまだにこちらを狙っている可能性についても。

「ハジメさん、来てくれてうれしい」

萌黄が素直に礼を言くと、いつもクールなハジメが柄にもなく顔を赤らめた。それでも萌黄の左腕に気づくと顔を強張らせた。

観客席の後ろ、そそり立つ壁の真下に、もはや正多面体ではなくなった黒いFRPの塊かたまりがあつた。かがみ込んでいた六道が立ち上がって、両腕で×印を作つた。

「ご覧のとおり、ただの瓦礫がれきになつちまつた」

それを聞いて、落胆の影が皆の上に覆いかぶさつた。

「ウソ……わたしたち、元の世界に帰れないの？」清香が抑揚のない声でつぶやいた。「この世界で自爆しちゃうの？」

「そうだ。それもあと二日でな」

冷徹な声でシュウが答える。

「いま、午後四時」雛田が腕時計を見つめる。「米軍がWIBAを攻撃すると予告した明日の正午まで、残り二十時間だぞ」

「ほっほっほ。短いようで長いな。長いようで短い」

齋藤老人の笑い声にも力がなかった。正二十面体を守るためにパワーを使い続けていたのだ。ぐっしよりと濡れた全身は一回り小さくなつたように見えた。

がつくりと肩を落とし、あるいは膝をつく面々をよそに、シュウだけは辺りの警戒を怠らない。真崎に対抗する武器もないのに、目だけで滝の向こうを掃海している。萌黄のパソコンは水の底に沈んだ。

持っていた携帯も、服を失った時にどこかに落としてしまった。自分の携帯ではなかったが、ギドラが転送したモジがいたのに。

この時、初めて尻の辺りの異物感に気づいた。取り出すと、むんの携帯だった。

そや、これはむんのジーンズやったやないか。裾を折り曲げ、無理矢理たくし上げているが。

「……やあ、萌黄さん」

水滴の落ちる髪をかき上げながら、伊里江が近寄ってきた。萌黄はむんの携帯を再びポケットにしまった。

「どない？ 具合は」

「……まるで重い風邪をひいた気分ですよ。……あなたも大変な目に遭いましたね」

「もうええねん」萌黄は伊里江の横に寝転がった。「リアル世界に帰る手だてもなくなつたし——」

ひと呼吸の間があつて、伊里江が言った。

「……逃げるんです」

「え？」

「……もうここには用はありません。危険な怪物もいる

ことですし、急ぎ、W I B Aを脱出しましょう。後のことはそれから考えればいいんです」

「考えるったって、どうしようもないよ。——第一、米軍は衛星を使うか何かして、W I B Aを見張ってるはずや。わたしらがこのこ上がって行ったら、その瞬間に核ミサイルでも打ち込まれるんと違う？」

「だろーな」頭上からシュウの声が降ってきた。

「あかんやん。それに——湖の中を逃げたとしても、どこへ逃げるの？ 逃げた先に米兵がいてへんていう保証はあらへんよ。向こうかって必死なんやから」

「しかし、いつまでもここににいるわけにはいかんぞ」

シュウが頭を転じた。見るとすでに湖水は傾斜のある観客席の三分の二までを水没させていた。

「調べた限りでは、残念ながら逃げ道はない。あるとすれば——」

天井を見上げる。滝の流入口であるスリットが遙か天井に見えた。シュウが降りてくる時にはくぐり抜ける余裕があったが、今や水量は倍加し、隙間はなくなっていた。

無理か。シュウは吐き捨てた。

「……………」

「何だって？」

「もうええですよ」萌黄は目を閉じながらうわごとのよ

うに口を動かした。「ここにおつたら自動的に溺死できますから……。リアル全員が死んだら、爆発は起きへんのでしょ？ それやったらこれで解決や。シュウさんも『よくぞ所期の目的を完遂した』って、総理からお褒めの言葉をもらえるよ……」

俺だって地上に戻ることはできない。シュウはそう言いたかったが、萌黄の言い分ももつともだと思った。

ここにはヴァーチャル世界に迷い込んだリアルが全員揃っている。彼らが時の満ちるのを待たずにここで命を落とせば、真佐吉も彼の遺言を守ろうとしたP A Iも滅び去った今、問題はすべて解消する。

したがって爆発は起こらない。リアル世界ともども助かるのだ。そしてそれこそがリアルキラーズの最終目的ではないか。リアルを全て抹殺する、それが自分に課せられた使命ではないか。

すでに燃え尽きている伊里江。重傷の身体をリアルパワーでかろうじて支えている萌黄。雛田の膝で泣くばかりの清香。精も根も尽き果てたような齋藤老人。奇跡のような復活劇を見せたが満足に動くには程遠い炎少年。元気なのは小田切ハジメだけだ。

もうひとりいた。真崎。

今の彼に人間の心などひとかけらも残っていないのかもしれない。まあ、どちらでもいいことだ。奴もここで

いっしょにくたばってくれれば……本当にくたばるだろうか？ あの怪物が――。

ふと我に返ると、ハジメが萌黄に対して強い口調でいい募っている。

「――死にたい？ フザけんよ。死ぬのはいつだってできるじゃないか。しかもアンタはエネルギーを発散させる技を知ってんだろ？ だったら生き延びることだって可能だ」

「もうええねん」

「ええことなんかない！ みんな死ねばいい？ へっ、ご挨拶だね。俺はイヤだ。まだ死にたくなんかないよ。これからエネルギーを発散させる方法を修得して、ずっとこの世界で生きてやる」

「そしたら生きてるあいだ、ずーっと命を狙われるんやで」

「上等だ、受けて立ってやる。言ってなかったが、俺は犯罪者だ。刑務所をリアルパワーで脱獄してるんだ。いまさらまともな生活なんかできるもんか。それならいっそ、スリル満点の逃亡生活を送りたいもんだね」

「この世界に生きてる限り、リアルは世界の人々にとっては迷惑な存在なんよ。いてないほうがええんよ」

「なんで他の見ず知らずの奴らのことなんか考えてやる必要がある！ 総理を始めとする政府の連中は俺たちリ

アルをハナっから殺すつもりで、こいつら迷彩服を」とシュウを指さして、「差し向けたんだぞ。助けようなんて考えもせず！　よしっ、俺は決めた。ここを脱出したら、その足で国会に乗り込んでやる。そして総理やら笹倉とかいう防衛庁長官らを痛い目にあわせてやる。連中のど真ん中で爆死してやつてもいい」

ハジメは眉を寄せた顔をツンと上げ、ぼんやりとした表情を浮かべたままの萌黄を見おろすと、

「萌黄さん。アンタが死ぬのはアンタの勝手だ。俺も勝手にさせてもらう」

そう言うのと、くると背中を向け、清香や齋藤のいるほうへと歩いていった。

見送りながら、萌黄は独り言をつぶやいた。

「呆れられてしもた……。みんなそうや。わたしが教室で目眩めまいを起こすたびにしゃんとしろって怒鳴りつけた中学の先生やら、思い切って心療内科に受診したことを打ち明けたとき、『世間体の悪い』て言うたお母さんみたいに……。やつぱりわたしは、ここぞという肝心なところでアカン人間なんやな。リアルなんかを選んで神様のいたずらを恨むわ」

ふっとため息をついた時、声が聞こえてきた。

「アカンなんてことあらへん。ようがんばったよ」

まぎれもない、むんの声だった。萌黄はうれしくなり、

顔を輝かせた。

「ああ……靈魂がまだ残ってたんやね。これもリアルパ
ワーのおかげ？　最後にまたお話できてうれしいよお」

涙があふれてくる。やはりむんとの結びつきは特別
のだと実感した。むんの声はあくまでも優しく、エコー
がかって頭の中に響いた。

へ萌黄。死のうなんて思ったら、それこそアカン。わた
しを悲しませんといて」

「そんな……。むんかて死んでるやん。わたしも仲間入
りさせてよ。フッフ」

萌黄は自分の言葉に笑ってしまい、恍惚とした表情で
楽しげに頭を左右に振った。

しかし、続くむんの言葉が萌黄の呼吸を止めた。

へ何言うてんのん。わたしは死んでへん。生きてるよ」

9

萌黄は言葉に詰まった。何か言い返さないと。そう
思って唇を開いた時だった。

ギギギギギ、ミシミシミシ。

耳の奥を締めつけるような不快音が、全方向サラウン
ドで鳴り始めた。

へ萌黄は——ガガガ……」

むんの声にノイズが重なった。そしてぷつりと途切れ
てしまった。

萌黄はハツとして目を開いた。

ギギギという音はなお続いている。

しかし萌黄には現実感がなかった。今までのむんとの
会話は夢だったのか？ それとも、まどろみの中の萌黄
の一人芝居……？

ガクンと場内が揺れた。萌黄は支える腕もないまま倒
れ、隣りにいた伊里江を巻き込んで、ふたりはゴロゴロ
と転がった。

「ご、ごめん」

壊れた座席にぶつかり、彼らはかろうじて水中への転
落を免れた。

「……イタタ」

伊里江は起き上がることもできないほど、憔悴した顔
を萌黄に向けた。萌黄はつい思い浮かんだ質問を口にし
た。

「ねえ、むんの声が聞こえた？」

「……むんさん？ なぜ——」

伊里江の反応にやはり夢だったかと、萌黄は首を振つ
て肩を落とした。

「……それより」伊里江は動かない身体を必死に立て直
そうとした。「ここは危険です。一刻も早く脱出しなけ

れば」

座席の向こうから、男たちの叫ぶ声が聞こえてくる。今の揺れで水の中に滑り落ちた仲間をすくいあげようとしているのだ。

萌黄は現実感の伴わない目で、その様子を見守っていた。そばで、ここは長くは保たないと力説する伊里江の声も、どこか遠くのささやきにしか思えなかった。

ハジメが鋭い一瞥を浴びせて、萌黄の横をすり抜けていく。シュウや雛田らもその後が続く。

傾きを増した観客席は歩きづらそうだ。それでも彼らは男たちを救うために、水辺へ降りて行こうとしていた。

（偉いなあ）

他人事のようにシュウらの背中を見送る。すると、小さな影が萌黄の前に立ちはだかった。

「もえぎさんよー」炎少年は舌足らずな口を突き出しながら話しかけてきた。「なんか、かつこわりーぜ。そんなすがた、みせてくれんなよ」

「炎くん」

「かめらごしにみてたときの、もえぎさんのかつやくはかつこよかったぞ。せいぎのみかたってかんじだった。

おれ……はじめて、あこがれたんだよな、あんたに——。しょうねんのゆめをかんたんにやぶるなよな」

炎少年は目にいっぱい涙をためていた。驚いた萌黄

はまじまじと少年を見返した。

「おれ、このせかいでしぬわけにいかないんだ。もとのせかいにもどらなきゃいけないんだ。それにはあんたのちからがいるんだ」

「残酷なようやけど、無理よ。戻る方法がなくなっただんやから」

しかし少年は聞きたくないと言わんばかりに首を振り、両手について萌黄の顔を覗き込んできた。萌黄は少年の涙顔に耐えきれず、膝の間に顔を埋めた。

すると少年は意外な言葉を口にした。

「むんさんはいつてたよ」

「——えっ」

「じじいから——しょーぐんってよばれてたじいさんから、しぬまぎわにきいたって。おれたちがリアルにえらばれたのは、ぐうぜんじゃないって。それなりのやくわりがあるはずだって」

「偶然やない……」

あの五十嵐老人がそんなことを？　　いったい何を根拠に。

「おれをおぶって、ここまでおりてくるとちゅう、むんさんがはなしてくれた。あんたにもいわなくちゃ、そういつてたから、もしきいてなかったら、おしえないといけないとおもって」

それだけ言うと、炎少年は崩れるように床に座り込んだ。歩くのもしゃべるのも、よみがえったばかりの彼にとってでは重労働なのだ。

萌黄は丸まった少年の、年齢にしては小さな身体を見おろした。彼もむんの背中におぶられたのか。自分と同じだ。

手許に目を落とす。古傷があつた。そうだ、わたしはおぶられでもしないと、ひとりで保健室にすら行けない子なのだ。他人のお荷物になるばかりなのだ。

「……違うよ。そんなことはない」

伊里江が話しかけてきた。いつの間にか思いを声に出していたようだ。

「……あなたには人一倍、問題処理能力があるんですよ。自分自身、それを認めていないだけです」

「やめてよ、お世辞なんか。伊里江さんらしいわ」

「……聞いてくれ、萌黄さん」伊里江は珍しく気色ばんだ。「……よもや忘れたとは言わせませんよ。あなたは私が粹を尽くして築き上げたネット城・アルカトラスを、ものの見事に陥落させたじゃありませんか」

「それはゲームの上の話やん」

伊里江は息をひとつつくと、

「……もう何日になりますか。いっしよに行動するようになって」

「え……………」

「……最初こそ、むんさんや揣摩さんの陰に隠れていましたが、萌黄さんはその時々において、逃げる私たちに進むべき道をほのめかしてくれましたよ。……なかには、リアルキラーズの待つ自宅にパソコンを取りに帰ったり、夜中にたったひとりでコテージを抜け出したりと、危険なこともたびたびやってくれましたが」

「わがままやからね」

「……逆に、そうやって萌黄さんは、何度となく自らピンチを切り開いてきたのです。端的な表現をすれば……そんなときの萌黄さんって、キレてるんですね」

「……………」

「……褒めてるんです。誤解なきよう」

「ううん、判る気がする」萌黄は首を振った。「いつもそうやねん。わたしってタメにタメこんで、最後に爆発するタイプやから」

伊里江はハハハと薄く笑ってから真顔に戻り、

「……いいですか。兄は——正確にはPAIですが、彼は私たちを巻き込んだこの事態を、ゲームと称してはばかりませんでした。その結果、最後の砦ともいうべきWIBAにたどり着いたのです。いわば難攻不落の城。そして状況は最悪です。萌黄さん——ゲームはまだ続いているのですよ」

「ゲーム……」

伊里江は力強く頷いた。

「……そうです。全宇宙を巻き込んだ、史上最大にして空前絶後のゲームです」

ピチャツ。床に置いていた萌黄の指に冷たいものが触れた。あわてて引つ込めた指先から、水滴がぽたりと落ちた。

水はいつの間にか、萌黄や伊里江らのところにまで達していた。

滝は依然として湖水を注ぎ続けている。WIBAがかなり傾^{かし}いだため、落下地点は大きくズレて、壊れた観客席の上をはじいている。

見えている床はもう残り少ない。仲間を水中から引き上げた男たちも、無情に押し寄せる水の進撃に、なすすべもなく立ち尽くしていた。

連れ込まれた人たちの生き残りも、リアルたちを合わせると、総勢五十人。

絶体絶命である。

萌黄は背にしていた壁に手を触れた。ざらつく表面は留置場を思わせるような冷たさを放っている。つなぎ目はあるが、叩いた感じは非常に堅い。

立ち上がって、手の平を壁面にぴたりと付けてみた。そして気を集中させる。

壁と腕が一体になるイメージを思い浮かべる。

伊里江や炎少年は、萌黄のやろうとしていることを理解したのだろう。黙って萌黄の背中を見つめている。

手の平がボワツと熱くなった。

頃合いと思い、ありったけのパワーを込めた右腕で壁を強く押した。

壁が光を放ったように見えた。手の平の周囲がぐにやりとへこむのを感じた。

ああっ、おおっ。歓声が上がる。男たちも固唾を飲んで注目しているのだ。

壁の向こうがどうなっているのか、萌黄は知らない。もしも海だったら――。そんな不安がよぎったが、それでも今より悪くはならない。すべては一か八かだった。光がどんどん広がっていく。だが――。

壁から受ける反撥は予想以上に大きく、期待したほどの変化が現れない。萌黄は焦りを感じ始めた。

――せめて壁一枚でも剥がせれば。

そんな目論見だったのだが、壁はわずかにくぼんだだけだ。

（もう限界）

その時、横から伸びた手が萌黄の腕をつかんだ。

清香だった。彼女はもう一方の手を壁の上の萌黄の手に重ねた。途端にパワーが倍加した。ぐりぐりとふたり

の手が壁にめり込んで行く。

それでも拳が入る程度にくぼませるのが精一杯だった。

「頑丈すぎるっ」

精根尽きた萌黄と清香は、離れた手を床について倒れた。

（まるで鳥籠とりかごや。この空間からは、逃げたくても逃げられへんのや）

「歯がゆいなあ。それでもリアルかあ？」

炎少年が冷たい目で見おろした。

「おそらくは、水圧に十分耐えられる造りなんだ」

シュウの底う声が近づいてきた。とはいえ彼にも焦りの色は隠せない。萌黄は自分が役に立たなかったことに恐縮すると、「ほら」とシュウは手を差し出した。携帯が握られていた。

「君のдар。さっき落とした」

「そうです。……すいません」

「あっ」

炎少年が叫んだ。目が遠くで焦点を結んでいる。

戦慄が背中を走った。

滝と滝のあいだにある数メートルの隙間を急いで振り返る。水面から天井へと滑らせた目が、空中にある奇妙な光景を捉えた。

何もないところから水がポタポタと垂れている。ほんのわずかな量だったが、まぎれもなくそれは――

「真崎や！」

萌黄が指さして叫んだのと、水の垂れた辺りが虫眼鏡のように歪むのが同時だった。

透明の怪物が、恐ろしいスピードで滝のあいだをくぐり抜けてきた。

逃げろと叫ぶ暇もない。ヒュンという音とともに、怪物の薄い身体が刃物のように萌黄に襲いかかった。

ダウンッ。

萌黄と清香は間一髪で左右に逃げた。

萌黄は後ろ一回転で床を蹴ると、壁に突き刺さった真崎の身体に躍りかかった。

右腕に気をためる。そのまま真崎に対してパンチを浴びせた。

ゴスッ。

真崎の横腹(?)に穴が空いた。萌黄の拳はいとも簡単に怪物の薄い身体を貫いたのだ。おそらくはリアルパワーの威力で。

ぐおおおおおつ。

真崎は咆哮し、身をくねらせながら水辺へと下がっていった。受けたダメージは小さくないようだ。

萌黄は追いかけてようとして、前に出した足を止めた。相手の意思が読み取ったのだ。深追いすると、あの紙のような身体で巻き付くつもりなのだと。

追ってこないと知り、真崎はスピードを上げた。水の中にその大きく広い身体を没していく。萌黄のエア爆弾を恐れているのだろう。

（真崎は透明なのを利用して、また同じ戦法で仕掛けてくるはず。今のはたまたま気づいたからよかったものの――）

萌黄は炎少年に顔を向けた。

（でもこのままだと、いずれ観客席は水に飲み込まれてしまう。そうなったら真崎のしたい放題や！　かと言って、どうすれば……）

逡巡しているうちに、真崎の姿は完全に水中に消えてしまった。

「大丈夫か？」

シュウが水面を睨みながら駆け寄ってきた。萌黄は床に屈み込んで、真崎が叩き割った痕に手を突っ込んでいる。

「深い」

思った以上に、足の下は何重もの厚い装甲に覆われて

いることが判った。

（これは無理やな）

裂け目を壁面へとたどる。

「ん？」

萌黄は何かを発見し、そろそろと壁に近づいた。

「これは……」

シュウが萌黄の指さした箇所顔に顔を近づける。

「それがシステムへの接続ソケットだ。さっきアリーナで繋げたのと同じヤツだ。ここにもあったのか」

「じゃあ、これでまたW I B Aを動かすことが——」

「それがそうはいかん。逃げる最中にパソコンがクラッシュしたらしくて」言いながら背中のリュックからパソコンを取り出し、起動ボタンを押す。「やはりダメだ。ウンともスンとも言わん！」

腹立たしげにボディを叩く。その手から黒いコードが落ちた。パソコンと壁ソケットを繋ぐコネクタである。

萌黄は顔を輝かせた。

「シュウさん！ 変換アダプタ、持ってる？」

そう言つて、萌黄はシュウが答える前にリュックを奪うと、ごめんと叫んで中身を床に撒き散らした。

「これやつ」

萌黄の手が一個のアダプタを取り上げた。

「アダプタなんて、どうするつもりだ。君だって自分の

パソコンはなくしたんだろ？」

萌黄はコードをソケットに差し込むと、その反対側に手に持ったアダプタを差し込んだ。

「うまくいかどうか判らへんけど、コレ」

ポケットから取り出したのは、シュウが先ほど返した携帯だった。萌黄はその基部を開き、アダプタと接続させた。

「モジ！」

すかさずP A Iの名を呼ぶ。

《なんでっかー？》

画面の左端に尻尾がチラリと現れた。

「マジメにきなさい、時間がないねん！」

《あっそー》

ごろりと二頭身ゴジラが転がり出た。背びれを下に、地面の上でゆらゆら揺れている。

「モジ、お仕事やで。今すぐW I B Aに侵入して！」

《フーン、で、何をしろと？》

「後は侵入できてから指示する。急いで！」

《もおー、人使い、荒いなあー》

大きな口を開けて文句を言ったが、動きは速かった。スツと姿が消えたかと思うと、数秒後に再び現れ、

《簡単に入れたがな。こんなアホでも侵入できるで》
「判ってる。要はシステムの内部にまで入れるかどうか

や」

《そやから、行けるって》

「ホンマに？」

萌黄は念を押すように尋ねた。モジが嘘をつかないことを知りながら。

《カンペキよ》

背びれが力強く震えた。

「よっしゃ！ モジ、ゴーや！」萌黄は携帯の画面をエンジンジェルフオールに向けた。「あそこの蓋を今すぐ閉めて！」

《あいよお》

二頭身ゴジラは短い足でジャンプすると、またもや画面の外に消えた。

「なるほど、真崎を水の中に閉じ込めようという魂胆だな！」

「そうです。それしかないと思って」

「しかし、君のP A Iにそんなことが？」

「見損なわないでください」萌黄は少しだけ笑顔を見せて、「モジは市販のP A Iとは別物です。一からプログラミングして、高い知能を持たせてあります。きっとやってくれるでしょう」

「スゴいな……いや、君がだが」

離れたところにいる男たちは、そんな萌黄の考えも知

らず、手に手に拾った物で壁を叩き始めた。床はもう残りわずかだ。彼らの焦りを象徴するように、壁はガンガンと不規則な金属音を立てる。もちろん立ち塞がる壁はビクともしない。

「清香さん、リアル みんなを集めて」

「判った」

清香も腰を上げた。萌黄の目は携帯画面と滝のあいだを行き来した。いつまた真崎の攻撃があるやもしれない。心の中では、急げ急げと念じていた。

ゴウン。

反応は意外にも早く帰ってきた。その音は盛大に、場内に響き渡った。

男たちがいよいよ終わりだと勘違いして悲鳴を上げた。齋藤、ハジメ、そして雛田までを引き連れ、戻ってきた清香は開口一番、やったねと叫んだ。

ゴウンゴウンと車輪が転がるような音。水でよく見えないが、まさしくアリーナの蓋が閉まる音だ。水に浸って故障の懸念もあったが、ちゃんと動いたようだ。

「油断しないで」萌黄は注意を促した。「アイツはきつと出てこようとする。その時は――」

ブモオオオオオオ。

水しぶきが花火のように跳ね上がった。真崎だ！

「みんな、力を合わせて水の中に押し込めて！」

「了解だ！」

バネのようにハジメが空中高く飛んだ。萌黄と清香は地上から気を放ち、エア爆弾を見舞った。

ドンッ。

常人には見えなかったが、かつて真崎だった怪物は、空中で紙屑のように折れ曲がると、リアルたちの作った空気の球に押されて水面に落下した。

大きな波が寄せてきた。皆、飲まれまいと、手近なものにしがみつく。

萌黄は一足飛びに波を越え、上空から水中を覗き込んだ。周囲から伸びつつある牙のように尖った装甲板。それらがアリーナ中央で合流すれば、真崎をその下に押し込めることができる。当面の危機は回避できる！

ハジメが滑るように萌黄の前に出てきて、

「怪我人が出る幕じゃないよ。休んでな」

「そうはいかへん。わたしの立てた作戦なんやから！」

「つまらん意地、張るなよ」

「あんたこそ」

ふたりは目を皿のようにして真崎の姿を求めた。しかし、その姿はどこにもない。いや見えないだけかもしれないが。

装甲板が閉じるまで、残すところ三分の一。かなりのスピードで動いているはずだが、あまりに巨大なため、

恐ろしく緩慢な動きに見えてしまう。

あと四分の一。

五分の一。

すでに観客席の大半を飲み込んだ水面と、その下の装甲板の蓋とのあいだは、約二メートル。

（もしも、めいっぱいに広げた身体を、そこにひそませていたとしたら……）

不安が急激に膨らんだ。

崩黄はたまらず行動を起こした。右手を振って、エア爆弾を眼下の水面に落としたのだ。

ドンッ——ザザッと水柱が上がる。

考えはハジメにも通じた。彼は身体を回転させると、崩黄以上に威力のあるエア爆弾を立て続けに打ち込んだ。激しく水面が沸き立つ。

「いないな」

鋭い視線を走らせながら、ハジメが言った。

閉鎖まで、あと少し——。

その時だった。

装甲板の牙のあいだから、猛烈な勢いで細く長い物体が伸びてきた。警戒していた崩黄だったが、体勢を崩してかわすのが精一杯だった。

もちろん真崎である。

（くそっ、やるしかないか！）

萌黄は瞬時に決断した。秘策を実行するのだ。

真崎は蓋が閉じる直前に脱出するつもりだったのだ。

その真崎の身体を捉まえ、水底まで引きずり込む。それが萌黄の作戦だった。いわば捨て身の一策。エアスーツに身を固めても、装甲板が閉じてしまえば終わりだ。生きては出られないだろう。

萌黄は勢いをつけると、真崎の伸びた身体に手を伸ばした。

しかし、彼女の手はハジメによって、はたかれた。

「それは俺の役目だ！」

ハジメは両手を広げて、真崎に飛びついた――。

いや、そう思った時、彼は横合いから出てきた手に頬を殴られていた。意表を突かれたハジメは、あらぬ方向へと飛んでいく。

「死ぬなら、老人が先やがな！」

齋藤だったのだ。

彼は真崎に両手両足でしがみつくと、牙のあいだに、真つ逆さまに落ちていった。

「何が老人が先だ！ 古くさい映画みたいなセリフ、吐きやがって！」

ハジメは体勢を整えもせず、すぐに齋藤の後を追った。萌黄もハジメに続いて急降下する。この時点で真崎の身体の一部は、まだ水中に没し切ってはいなかった。サナダムシのように細長く伸びた身体は、齋藤に引きずり込まれながらも、そうはさせじと必死でもがいていたのだ。

萌黄はその一端をつかもうと右手を伸ばした。ところが、どこに目があるのか、敵はたちまち臨戦態勢をとった。身体の一部が膨らんだかと思うと、見覚えのある円盤状になり、本体を離脱して彼女に向かってきた。

周囲に生えたノコギリ刃がTシャツを裂いた。萌黄は何とか攻撃をかわした。そして後ろに回り込むと、狙い定めてエア爆弾を見舞い、場内の果てに吹き飛ばした。

目を戻す。すでにふたりの姿は真崎とともに水中に消えて去っていた。

大変なことになった。全身が総毛立つ。

「モジッ！ 蓋を止めて！」

携帯のところまで戻っている余裕はない。萌黄はありったけの声で叫んだ。

モジの声が、ギドラの使っていたスピーカーから聞こえてきた。

《アカン、緊急停止装置が故障しとるう》

蓋は無情にも閉まり続ける。萌黄にはなすすべもない。

その時だ。装甲板の向かい合う中心にブクブクと水泡が浮かんでくると、続いて、大きく水を蹴散らしながら、ハジメが飛び出してきた。両腕に齋藤を抱きかかえて。

直後、ガコンツと空気を震わせて、アリーナの蓋の閉鎖が完了した。

真崎を閉じ込める作戦は成功したのだ。

「スゴい！」

萌黄はふたりの行動力に心から感心し、感謝しながら、急いで彼らのそばへと舞い降りていった。

(えっ)

齋藤の様子がどこことなくおかしかった。

目を閉じ、両手をだらりと垂らして、ハジメの肩にもたれかかっている。その姿はどこか普通でないものを予感させた。

「……………」

三人は皆のいる中に、静かに着地した。

ハジメは老人の介抱を清香らにまかせると、ぷいと背を向けた。

「おじいさん」

萌黄の声に齋藤は薄く目を開いた。

「……こりゃあ、お嬢さんがた……なんや迷惑をかけたみたいやな」

「ううん。おかげで真崎を封印することができました」

「ほっほっほ。そりゃあ良かったわ……こんな老体でも少しは役に立ったみたいやな」

「少しどころやないよ。ねえ、ハジメさん」

ハジメは黙ってアリーナのほうを見ている。

齋藤の顔にかかった水を、萌黄が手の甲で拭うと、老人はゆるめた頬を彼女に向け、

「シャレやないけど、年寄りの冷や水やったな。ワイの命運もここまでのようや」

誰もが息を飲んだ。齋藤の顔には死相が浮かんでいた。「八十年の生涯。その最後の最後でこんなオモロイ体験をさせてもらうて、冥土の土産としては上出来や。ははは……ほんでも」老人は眉をひそめた。「ワイの行くあの世は、リアルの天国やろか、それともヴァーチャルのやろかいな？」

冗談とも本気ともつかない言葉を漏らすと、最後に、「ハジメよ……ありがとう」

そう言つて目を閉じ、二度と開くことはなかった。

ゴーン。

ゴーン。

老人を送る鐘の音が^ねが^{こだま}した。

だがそれは鐘などではなく、アリーナを蓋した装甲板の立てる音だった。水の下で真崎が暴れているのだ。

ゴーン、ゴゴーン。音は執拗に続く。

《萌黄いゝ。コイツ、どないするゝ?》

モジに促されて、萌黄は立ち上がった。

「真崎はまだ生きてるんやね」

《見せよか?》

天井から下ろされたままのスクリーンにスイッチが入った。モジは競技場のコントロールを、完全に掌握したらしい。

水中カメラの映像だった。ライトが灯されており、真崎のひらひらとした姿が、何度も蓋の裏側に体当たりしている様子を捉えていた。

「しぶといな。まだ生きてやがる」

シュウが憎々しげに言った。

《どないしよか》

「――始末できる?」

萌黄が暗い声で訊ねた。

《できると思うよ。電気を使えば――》

それを聞いて、萌黄は無表情で断を下した。

「やって」

《了解。みんな、水から離れといてや》

スクリーンが明るくなった。火花が走ったように見えた瞬間、ビリリと映像が乱れた。

場内の明かりがふっと暗くなったが、すぐに元の明るさが戻った。

だがスクリーンの映像はまったく異なる様相を呈していた。

そこにはもう真崎の姿はなかった。ただ無数の紙の切れ端のようなものが漂っているだけだった。

高電圧によって、真崎はついにその息の根を止められたのだった。

シュウはひとり、元上司の霊に対して黙禱を捧げた。怪物は滅びた。

しかし危地を脱したわけではない。

「どつかにわたしたちの逃げ道はないのっ？」

萌黄が大声で問いかけると、

《ちよっと待ってや》とモジは答え、すぐ《お待ちせ》と今度はスクリーンに戻ってきた。緑色の頭から、CGの汗をたらしている。

「どう？」

《ないわ》

あまりにすぎない返事だった。

「なかったらアカンのよ。わたしら、溺死するしかないやん！」

《そう言われても》

「設計データは閲覧できないか？」シュウだった。「壁の薄い箇所を調べてみてくれ」

モジは何も答えない。

「ダメですよ。P A Iだから、わたしの声にしか反応しません——モジ、データを調べて、壁の薄い部分がないかどうか、チェックして」

《休む間もないなあ。ほな、待っててや》

これ以上待てん。男たちは口々にわめいた。いつの間にか床はなくなっていた。齋藤老人がゆらゆらと水の上を流れて行くがどうしようもない。萌黄は足首まで浸かったまま、モジがいい返事を持つてくることを期待して待った。

《ただいま》

たつぷり三十秒は待ったろうか。モジの声がした時、皆のあいだに歓声が上がった。

「で、で？」

萌黄が急かす。しかしモジはフーツと鼻息をつき、《残念。データ自体、存在してへんかったわ。数日前に消されたみたい》

ギドラだ。W I B Aの完成を期して、不要なデータを削除したのだろう。

一斉にああというため息が漏れる。期待させた手前、萌黄は肩身をせまくした。

そんな男たちに対して唇を尖らせたのは雛田だった。「アンタら、ここの建設を手伝ったんだろ？ 誰か知ってるんじゃないのか？」

男たちはは困った顔をして、互いを見合った。六道が代表して手を挙げると、

「そう責めないでくれ。俺たちが知ってるのはアリーナ横の出入口だけなんだ。それ以外は見たこともない」
彼らが出てきた所だ。今やそこは蓋の下、水の下である。

水かさはどんどん上昇する。それが人々の気持ちを追い込んでいく。中には、蓋をもう一度開いて、出入口まで泳ごうと提案する者もいた。だが「たどりついても、ずっと先まで水浸しさ」と言われては引つ込むしかなかった。

《ん……なんや？》

モジが妙な声を発した。

「どないしたん？」と萌黄。

《いや、誰かが壁を叩いとるぞ。しかも外側から》

「外側から——」

全員が耳をすました。滝の音が邪魔だったが、萌黄のリアル耳がかすかに聞こえる「ガン、ガン」という音をキャッチした。

不規則なそれは、まさに人間が叩いているようなリズムだった。

「そっち！」

萌黄は駆け出した。他の者たちも追従した。

水が足にまとわりつく。W I B Aが揺れるせいと、滝のせいで、水面が常に波立っているためだ。

転けては起き、転けては起きで、ようやく彼らは叩かれていた壁の前に到着した。

「聞こえるっ」

「確かに聞こえるぞ！」

「間違いない。壁の向こうに誰かいるんだ！」

「そいつはどうやって入ったんだ？」

「別の入口があるんだろ」

「どこにある？」

「中の奴に聞いてみるよ」

男たちはめいめい勝手に壁を叩き始めた。おーいと呼びかける者、ここから出してくれと叫ぶ者とさまざまだった。

この辺りは水深が腰まで達している。泳げない者はなおさら必死の形相だった。

だがこれほど混乱しては、壁の向こうの音がかき消されてしまう。シュウは空に向けて銃を撃つしかなかった。

「静かにしろっ」

すると、それに呼応するかのようにな、どこかでカシャリと音がした。そして驚く彼らの見ている前で、突然、壁が上昇し始めたではないか。

「きゃっ」「うわっ、水だ」

(誰?)

萌黄はその声に聞き覚えがあった。

足が見えた。迷彩服だ。

さらに壁が上がる。

人影は四人。そして、その中にいるのは――。

「久保田さん!」

12

久保田は細めた目を魚のように丸くした。あまりの驚きに声も出ないのだ。

萌黄にも言葉はなかった。駆け寄った彼女は、体当たりするように久保田の腹に抱きついた。

壁の内側へとなだれ込んだ男たちの歓声が周囲に充満する。奥に上階へ通じる階段を発見したからだ。

「助かったあーっ!」

「地上へ出られるぞっ!」

抱き合うふたりを突き飛ばしながら、彼らは我先にと横をすり抜けていく。久保田は突如現れた男たちの大群にも驚き、あわてて萌黄を抱え上げると、部屋の隅に急いで移動した。

「待てよ、あわてんな」

押し止めようとする声が怒濤の足音、いや水音にかき消される。

萌黄はハツとした。その声は揣摩太郎ではないか。顔を向けると、その隣りには柳瀬までいる！

階段に殺到した者たちは、ひたすら助かりたい一心で、せまい階段の上で押し合いへし合いしている。

久保田がようやく萌黄に声をかけた。

「どうなってるんだ？ この連中は何者だ？ この水は一体……そうだ、真佐吉には会ったのかい？」

萌黄は唾をぐつと飲み込み、気持ちを鎮めてから口を開いた。柳瀬に対して何やら指示を与えた揣摩も駆け寄ってくる。

久保田が萌黄から手を離れた。壁際から和久井がじつと冷たい視線を送っていた。

「真佐吉さんには会えました。けど、彼はすでに死亡していました」

萌黄は、久保田らと別れてからの出来事をかいつまんで語った。そのひとつひとつが久保田と揣摩をひどく驚かせた。

中でも仰天させたのは、むんの死だった。

「あのむんさんが……」

揣摩は唇を噛んで絶句した。久保田も萌黄の着ているTシャツに気づき、ウウとうめくような声を漏らした。

と、その目が袖に止まった。

「萌黄さん、その手はどうした……」

全員の目が萌黄の左肩に注がれる。萌黄は右手で、ない腕の付け根を袖の上から押さえた。

「真崎との戦いで受けた、名誉の負傷だ」

後ろから入ってきたシュウが代わりに答えた。

痛いほどの間があった。

久保田は萌黄の肩に手を置き、いたわりの眼差しで問いかけた。

「痛く——ないのか？」

「うん……少しヒリつくけど、リアルパワーでどうにか庇ってる」

「——そうだ、転送装置」久保田は眼差しをぐっと上げて、「君たちは真佐吉の転送装置で、元の世界に戻るんじゃないかったのか？」

萌黄は俯いたまま、首を横に振った。

「装置は壊されてしもて」

「……」

シュウが間に立った。

「彼は見覚えのある隊員だが」と揣摩を顎で指し、「君は確か、萌黄さんの友達じゃないのか？」と久保田に問いかけた。

「ああ、俺は隊員じゃないよ。アンタのお仲間に衣装を

借りた」

久保田は萌黄のつむじに視線を落としたまま、平然と言いつ返す。

「何だと？」

不穏な空気に、萌黄はシュウの腕をとった。

「そんなことを言い合ってる時やないよ」とたしなめると、改めて久保田を見上げ、「どうやってここまで来れたの？」

久保田は説明した。地上で偶然、揣摩らと合流し、這い出してきた真佐吉の手下を倒して、排気筒から侵入したこと。侵入経路は完全な裏ルートで、真佐吉の妨害にも遭うことなく、ここまで無事に降りてこれたこと。しかし最下層までたどりついたものの、壁に阻まれて行き場を失ったこと。その時、壁の向こう側から滝の音とともに人の声が聞こえたので、どこかに突破口はないかと探しているうちに――

「和久井さんが、部屋の隅にあつた開閉ボタンを発見してくれたんだ」

全員が、離れたところに立っていた迷彩服の女性を見た。しかし注目されるのに不慣れな和久井助手はプイと顔を背けた。

「なあ、いつまでグズグズしてんだよ」

突然の甲高い声。その声は、階段に足を掛けた子供が

発したものだ。炎少年だった。

「え、あ、君は確か車椅子の——」

久保田がつつかえるような声を出すと、

「いちいち驚いてると、ホラ、水に吞まれちゃうぜ」

少年の指摘どおり、今や水位は膝に達しようとしている。

「それもリアルパワーか？」

「そんなとこだろ。さあて、お先に行くぞ」

少年はさらりと言い、すでに見えなくなった男たちを追って階段を昇り始めた。

「この扉をもう一度閉じましょう」

雛田が提案した。呼応するように和久井が開閉ボタンを押したが、

「動きません。水に浸ったせいかも」

と抑揚のない言葉を返した。

シュウがパチンと手を叩いて、一歩足を踏み出した。

「よし。ともあれ君たち別働隊のおかげで我々は活路を見い出せた。感謝する」と久保田らに敬礼し、「みんな、炎君に続こう」

全員が動き出した。

しかし萌黄だけは、元来たほうに戻ろうとした。

「どうしたんだ？」と久保田。

「まだモジが——わたしのPAIが残ってんねん」

萌黄は水を掻き分けて壁のところまで取って返すと、完全に水没した場内を見渡した。もちろん滝はなくなるどころか、かえって勢いを増している。

水面をこちらへと飛んでくる人影がひとつ。

ハジメだった。

「何してたん？」

ハジメはそばに着水すると、黙って手の平を広げた。

ひとつかみの白髪の本がそこにあつた。

「齋藤ジイさんのだ。——身体は沈めた」

萌黄は目を伏せて頷いた。

遺髪をポケットに振じ込んだハジメを見送ると、萌黄は入れ違いに宙に舞い上がった。

歩けば数分を要する距離を、わずか数秒で飛び越えた。モジをW I B Aに送り込むため、壁のソケットに携帯を差し込んだ場所だ。

携帯が水面下に没していることはすでに覚悟していた。それでも接続時にリアルパワーでエアカバーをかぶせていたので、十中八九、大丈夫だと考えていた。

ところが到着すると、予想外の事態が待ち受けていた。ソケットのあつた辺りの壁が激しく破壊されていたのだ。四角いボードには亀裂が走り、あるいは剥がれ落ちて、一部は焦げたように黒ずんでいた。

「あああ——」

これではとても携帯どころではない。萌黄は全身から力が抜けていった。

原因はまたしても真崎だった。

水に飛び込んだ齋藤老人を救おうとした時、真崎が萌黄に対して放ったベージュ色の丸ノコ円盤。萌黄はそれをエア爆弾で撃退したが、あろうことか円盤は携帯の上に落下していたのだ……。

波間にギザギザに尖った歯が見える。

萌黄はポケットをジーンズの上から押さえた。そこにはむんの遺品である彼女の携帯があつた。しかし接続ソケットがなければ、アンテナの立たない場内で、モジを連れ戻すことはできない。

《もえぎいゝ》

か細い声が主人の名を呼んだ。萌黄は両目を強く閉じて、絞り出すような声で答えた。

「ゴメン……連れてってあげられへん」

目からこぼれた涙が水面に落ちていく。

《しゃーないがな。早よ逃げや》

PAIは彼女を責めるどころか、早く退散しろと促した。

「許してくれるん？」

《許すも許さんもないやろ。不可抗力なんやから》

「……………」

そう言われても、萌黄は素直に立ち去ることができなかった。コンピュータプログラムとはいえ、いっしょに闘ってくれた盟友なのだ。そんな彼を残していくなんて。誰かが背中をトンと押した。振り向くと、ハジメの半開きの目がそこにあつた。

「行くぞ」

彼は強引に萌黄の肘をつかんで引つ張った。

萌黄は「さよなら」とつぶやくしかなかった。

《元気でああ》

ふたりが飛び去ると、場内が幾分暗くなった。モジが逃げる彼らのために、省エネモードに切り換えたのかもしれない。

水かさはますます増えていく。すでに接続コネクタのあつた壁も、破壊の痕とともに見えなくなっていた。

だから、ゴトリと丸ノコが動いたことに、モジは少しも気づかなかつた。

13

「全然ダメ！ あの人たち、いくら止めても、てんで聞こうとしないのヨ。腹が立ったから、二、三人投げ飛ばしてやったワ」

柳瀬は荒々しく階段を降りてくると、息を整えながら報告した。

ここは最下層から二階分ほど昇ったところだ。

揣摩と久保田は困った顔をして互いに顔を見合わせた。「急ぐとマズいことでもあるのか？」

シュウが地下脱出組を代表して訊ねた。その詰問調に久保田はやや気分を害したような顔をして、「トラップがあるんだよ。監視ロボットとでもいうのか、ラジコンカーみたいなのが走り回ってるエリアが、このずっと上にな」

「危ないじゃない！」

清香が押さえて叫んだ。萌黄も頷いた。

「しかたがないさ。この世界の掟おきてだ」

揣摩が吐き捨てるように言う。

「掟？」

「そう。砂状化現象が日常のこの世界では、あわてたり、油断したり、取り乱したりすることが、即、命にかかわるんだ。ヴァーチャル世界が誕生して二週間近くが経つ。ずっと生きてたいのなら、そろそろ自覚すべきだね」

「ずっとつて……わたしたちがいる限り、ここは明後日になったら爆発しちゃうのよ」

そうなのだ。爆発して粉々になるのだ。萌黄はTシャツの裾をぎゅっとつまんだ。

柊の言葉を思い出す。彼は、ずっとエネルギーを発散していれば、この世界でも生き続けることができると言った。萌黄はその技を身につけることができた。彼の計画は、あるいは可能かも知れない。だが清香やハジメや炎少年、そして伊里江はどうなる？ リアルの数は減ってしまったが、四人でもその威力は桁外れのものとなる。

「……散らばるのです」

久保田の背におぶられた伊里江が言った。彼はすでに自力では歩けないまでに体力を失っていた。

「……リアルたちは互いに距離を取り合うのです……爆発力はお互いの距離に反比例します。互いに遠く離れるほど干渉力は低くなり、個々の爆発を通常レベルにまで落とすことができます」

「北海道が消えたくらいじゃ、ただの通常レベルですってか？」

揣摩は揶揄^{やゆ}するように笑うと、階段の手すりを蹴った。カンと金属音が辺りに響く。

「……兄が他界した今となつては、再びこのような事態が起こることはもうありません。リアルたちが自爆しさえすれば……めでたく問題は解決です」

「メデタイのは、テメエのドタマだ」

炎少年だった。萌黄はビクツと肩を縮めた。

少年は久保田の前にまわると、その小さな手で背中
の伊里江を指さした。

「脳ミソ腐ってんじゃないのか？　なんで俺たちがそ
んなに物わかりよく自爆しなけりゃならないんだ。まだ時
間はあるだろ。助かる方法を考えるのが立派な大人の役
目ってもんだろが。自爆したけりゃひとりでやれ！」

拍手が起こった。雛田だった。

「エライ！　クソガキも言うじゃないか」

「茶化すなよ、オッサン」

「茶化してなんかいないさ。元々俺はボケ担当だ。ただ
純粹に応援したい気持ちになっただけだ」

萌黄も心の中で拍手した。そのとおりだ、まだあきら
めてはいけない。

だが伊里江は暗い声で反論した。

「……助かる方法などありません。それとも萌黄さんの
ように、体内に溜めたエネルギーを発散できますか？」

「うう——練習すれば、そのくらい」

「……清香さんも、ハジメさんも、陰で特訓していたの
ではありませんか？」

無言。

「……それに、タイムリミットは、もう目の前ですよ。
悠長なことをしては、皆が遠く散らばる時間さえ
失ってしまいます。空を飛んでいったとしても、地球の

裏側までは、すぐにはたどり着けません。少なくとも私には飛ぶだけの体力は残っていません。歩くのがやつとの君だって、そうではありませんか？」

「その必要はない」今度はハジメが発言した。「遠くまで出かけなくても、このまま地上に上がっていけばいい。それで『俺たちリアルは生きて、まだここにいるぞ』とアピールすればいい。親切な米軍が、すぐに核ミサイルを撃ち込んでくれるさ」

バカっと言って清香がハジメに迫った。

「本気で言ってるの？ そんなことをしたら、他の人たちが巻き添えになるじゃない！ それにあなたは、たとえひとりになっても生き延びるって、言ってなかったかしら？」

「言ったさ。俺はただ、死にたい連中はこうすりゃ楽だぞって提案してやっただけ——」

パンッ。清香はハジメの頬を叩いた。

「フザけないでよ！ わたしたちはこれだけ人数がいるのよ。リアルもヴァーチャルも含めて、みんな仲間よ。団結して真面目に考えれば、きっといいアイデアが出てくるわ。それでもバカなことを言いたいなら、最後の瞬間まで我慢していてくれない!？」

かなりの剣幕だ。雛田が待て待てと取りなすように割って入った。

みんなイライラが極限に達しているのだ。

当てにしていた転送装置は破壊され、元の世界に戻る道は完全に断たれた。世間からは「見つけ次第、殺せ」と指名手配犯、いやそれ以上の扱いを受け、米軍には攻撃予告までされてしまった。

かつて歴史上、これほど忌み嫌われた存在があるだろうか。まるで中世の魔女狩りだ。それも比較にならないほど大きなスケールで。

（魔女か……）

軽々と空を飛び、銃弾を跳ね返し、怪我をしてもすぐに治すことができる。まさに魔女だ。左腕を失ったというのに傷口はアツという間に塞がり、こんなに平気な顔をしている。気持ち的には平気ではないけれど。

そんな化け物じみたリアルが、この世界に安息の場所など見つけることができるのだろうか？

溜まったエネルギーを定期的に発散しながら、無人島かジャングルの奥地で、誰にも知られずにひっそりと暮らす。

（全然リアリティ、あらへん）

そんな世捨て人みたいな人生。どんな価値がある？

なんとか、ヴァーチャルの人々と共存する道はないものだろうか。いろんな意味で、そのほうがはるかに現実的だ、と萌黄は思った。

仲間たちを見る。

階段を昇る足取りはどれも重い。

ここを抜け出せても、問題を先送りするだけで何ひとつ解決しないし、新たな障害が待ち受けていることを知っているからだ。

階段がやがて尽きると、そこからは廊下を歩いた。薄暗い蛍光灯がある以外は灰色の壁が延々と続いている。WIBAが傾いたせいで、わずかに登り坂になっているが、歩きにくいほどではなかった。

角をふたつ折れ、階段をひとつ昇ると、頭上を太いダクトの走る廊下に出た。さらに進んだところで、前方から柳瀬が駆け戻ってきた。

「連中、やつと思い知ったわヨ」

彼は悔し気にこぼした。

到着したのは狭い部屋だった。揣摩がバッファゾーンと呼んだ部屋の床には、先に行った男たちが疲れた顔で倒れていた。それでも萌黄たちが入っていくと、取り囲むようにそばに寄ってきた。

その数に萌黄はアレッと思った。わずかに十数人しかいなかったのだ。

（他の人は警備ロボットに――）

彼らは口々に訴えるようなことはせず、六道を前に押し出してしゃべらせた。まるで彼が代表とでもいうよう

に。

薄笑いを浮かべた六道はぺこりと頭を下げると、上目遣いで萌黄たちににじり寄り、

「あの、これから先には行けないんです。ラジコンカーみたいなのが追いかけてきて、スタンガン攻撃を仕掛けてくるんです。何人かはそれでやられちゃいました」

後ろの男たちが判で押したように何度も頷く。

要するに、リアルパワーで警備ロボットを撃退してほしいというのだ。そのためにここでリアルの到着を待っていたのだ。

（勝手な話や）

萌黄は幻滅した。

しかし——ひよつとすると、これこそが〈共存〉の唯一の形態かもしれない。

萌黄の脳裏にそんな考えが浮かんだが、すぐに眉をひそめて拭い去った。考えた自分がイヤになった。

「行くぞ」

動いたのはハジメと炎少年だった。少年は煮え切らない萌黄に見切りをつけたのか、階段を昇り始めてからは、ずっとハジメにべったりとくっついていてる。

少年はハジメに従うようにトコトコと前に出たが、その肩を久保田がつかんだ。

「何すんだよ」

「やめとけ」

有無を言わさぬ久保田の声だった。少年は不満そうに口を尖らせたが、素直に足を止めた。

男たちは後ずさり、スツと道をあけた。ハジメは彼らなど眼中にないかのように突き進む。

問題のフロアへは、壁に垂直に取り付けられた梯子を昇る。ハジメはさっさと昇り始めたが、途中でくるつと男たちに視線を向けると、

「ついてこいよ。カッコいいところ、見せてやる」

そう言つて、頭上の蓋を軽々と押し上げると、その先に姿を消した。

六道たちはおっかなびつくりで開いた蓋を見上げている。

その時だった。ゴンと金属同士のぶつかる音がした。さらにもう一度。そしてハジメの笑い声。

「早く上がってこいよ！ コイツら、全然大したことないぞ！」

たちまち男たちはワツと梯子に殺到した。萌黄たちも後に続く。

マンホールの上はうだるように暑かった。萌黄は片腕で器用に昇り切ると、目の前の光景を見て、愕然とした。数人の男たちが倒れている。先を急ぐあまり、警備口ボットにやられたのだ。早くも手足の砂状化が始まつて

いる。

周囲の景色は、さながらミニチュアの工場だ。短い煙突からは終始煙が噴出し、暑さで空気がユラユラと揺らいている。

四角い物体が空中に舞い上がった。と、そのまま萌黄の前に落下して、ぐしゃりと壊れた。外れた車輪が煙突にぶつかって転がっていく。

警備ロボットだった。

萌黄はハジメを探した。彼ならばロボット群を潰滅させるくらい、朝飯前だろう。それでも萌黄には彼の真意が判らなかった。あれほどヴァーチャルに対して嫌悪感を抱いていた彼が、どうして味方に――。

煙の向こうから当人が現れた。頭の上に二階建てバスのような警備ロボットを持ち上げている。だらりと伸びたマジックハンドはすでに機能停止したことを表していた。

ハジメはそれを六道らの前に叩き付けると、片足で踏みつけながら高らかに勝ち鬨どきを上げた。

「どうだ！　こんなモンが束になったって、俺に敵うわけがない。よく見ておけ！」

ひしゃげた二階建てバスはふわりと浮くと、そのまま、煙を吐くミニチュア工場の煙突に突っ込んだ。黒い粉塵が激しく舞い上がる。

男たちは驚喜し、惜しめない拍手を送った。するとハジメはにこりともせず、おもむろに腕を上げると、

「上に通じる梯子はあっちだ。みんな、行け！」

と後方を指さした。男たちは歓声とともに走っていく。

「どうだ、カッコ良かったろ？」

萌黄はまじまじとハジメを見つめた。

「判らないか？ この世界で生きていくなら、このくらのデモンストレーションは必要だということだ」

14

デモンストレーション。

ハジメの言葉は萌黄に不快な記憶をよみがえらせた。

終拓巳。彼は、ふたりのリアルパワーを合わせれば、

この世界を支配することだってできると驚くべき野心を語り、萌黄を強引に口説こうとした。

そして、ハジメ。彼は男たちに甚大な被害を与えた警備ロボットを、圧倒的なパワーでことごとく破壊してみせた。

持てる力を誇示することで、自らの立場を有利に運ぼうとする。それは終が思い描いていた未来へと通じるのではないか。

「らしくない」

「あ？」

立ち去りかけたハジメが、半身だけ振り向いた。蒸し暑い空気の中で、その目は氷のように冷たかった。

「だってそうやん。絶対に元の世界に帰ったるって言うたのはハジメさんやで。くじけそうになったわたしを厳しく励ましてくれたりして、あれこそハジメさんらしいと思ってたのに……。なんで急に考えが変わったん？」

「……………」

「さっきのセリフも、とってつけたみたいやった。ホンマに本心から言うてるようには思えへんかった」

ハジメは眉をわずかに曇らせると、そんな表情を読み取られまいとするように背中を向けた。しかし萌黄はハジメの指がジーンズのポケットの上に触れるのを見逃さなかった。

「おじいさん——」

ハジメの足が止まった。

「齋藤のおじいさんが亡くなったからやね？」

自分ではなく、齋藤老人をリアルの世界に返してやろう。彼はそう思っていたのだ。

「関係ない」

立ち昇る煙のあいだに、恐ろしく長い梯子がはるか上まで伸びている。男たちは何かに追いかけるように必死で昇っていく。その先にはのしかかるように黒く煤

けた天井があつた。

ハジメは暗い空へと飛び上がると、アツという間に小さくなった。

凶星だったようだ。

ハジメには、会ったときから齋藤にだけは心を開いている空気を感じた。最初は肉親なのかと思っていたが、そうではなく、京都に来る途中で偶然に出会ったのだという。

ふたりは祖父と孫ほど年が離れていたにもかかわらず、よほど馬が合ったのだろう、他の人間とはほとんど言葉を交わさないハジメが、なぜかいつも齋藤のそばにいた。そう言えば、彼は自分を犯罪者だと言った。刑務所かどこかから逃げてきたとも言っていた。

そんなハジメにとって、元の世界に帰ることは何のメリットもない。おそらく最初から帰るつもりはなかったのではないか。

しかし問題が残っている。最大の問題が。

エネルギー発散の方法。

ハジメは会得したのだろうか？

「萌黄さん、こつちよー」

清香の通る声が響いた。ミニチュアの街並のように並ぶ機械の陰から萌黄を呼んでいる。

考えるのは後にしよう。そう思って歩き出した萌黄の

耳が、かさりという音を捉えた。

騒々しく音を立て続ける機械の中で、それは布を引きずるような、別の種類の音だった。

萌黄は身構え、音の方向を探った。

機械群や壊れた警備ロボットが、暑い空気の中でユラユラと揺れている。

外れた車軸が落ちていた。迷彩服の切れ端が引つかかっており、熱気が吹き付けるたびにはためいている。久保田が語った、ここを通過する時に和久井助手がロボットの目を欺くために着せかけた上着のようだ。今の音はおそらくそれだろう。

「萌黄さん、どうしたー」

今度は雛田だ。萌黄は急いでその場を離れ、仲間の後を追った。

萌黄たちのエアクッションによる手助けもあって、ヴァーチャルたちは短時間で長い梯子を昇り切ることができた。煙と湯気の充満する空間を抜け、常温のフロアにたどり着いたヴァーチャルたちの顔には、それでも深い疲労が刻まれていた。

「地上まであとのくらい？」

萌黄が訊ねると、揣摩は顔にこびりついた汗とほこりを袖で拭い、

「三階分ほどだ。この廊下を少し行くと小さくて狭い階段がある。それを昇ると出口の排気筒がある」

そこまで行けば、空が見えるという。

「今ならさしずめ星空だろう。まだ薄明かりが残ってるかな」

雛田が腕時計を萌黄に示した。

午後七時十分。

「ここからが問題だな」揣摩が難しい顔をした。「きつと上では、いろんな奴が待ち構えてる」

清香は顔を強張らせ、自分の両腕を抱いた。

廊下は床ひとつ隔てた下の空間に比べて、クーラーでも効かせたように涼しかった。萌黄は火照った顔から熱が引いていくのを感じながら、ここまで逃げ延びてきた面々を眺めた。

生存しているリアルは、萌黄、清香、ハジメ、炎少年、そして伊里江を含めてたったの五人。それでも世界にとつては十分な脅威だろう。服装はボロボロになりながらも、床に寝そべった伊里江を除き、他の者は今のところ元気だ。

逆に、ヴァーチャルたち。彼らが疲労の頂点に達しているのは覆うべくもなかった。アリーナ下の穴に半数が飲み込まれ、流入した海水に溺れ、それでもここまで生き延びられたのは、わずかに十数人。その中には六道も

雛田もいた。血氣盛んな若者ほど、警備ロボットの格好の餌食になったようだ。

死屍累々、とまでは行かなくても、塵ひとつない無彩色の廊下に、汗と煙にまみれた身体を横たえた男たちの姿は、まるでボロ雑巾さながらだった。黒ずんだ顔はどれも、この先一步も歩けないと主張していた。

「ノコノコ出ていったら、米軍の格好の餌食だな」

炎少年が大人びた表情で言う、清香は腕を解き、

「でも約束の期限は、明日の正午でしょう？」

ハジメがバカかよと返した。

「アメリカがそんな約束、守るわけないだろ」

そう考えるのが妥当だ。今でも暗視カメラでWIBAを遠巻きに見ているのではないか。いやそれより怖いのは……

「もしも今、米軍がここに押し寄せてきたら」

言った萌黄は自分の言葉にぞつとした。炎少年がおびえた目で彼女を見上げる。

「——あり得る」

背後で大儀そうな声が立ち上がった。シュウはオイと手を振って、迷彩服の揣摩と柳瀬を呼んだ。

「斥候^{せっこう}に出かける。こんな状況でヤンキーどもに攻め込まれたら抵抗しようもないからな」

「大丈夫ですって」揣摩が沈滞した空気を吹き飛ばすよ

うに笑った。「ここは宝井社長しか知らない秘密のルー
トだから……」

ふいに揣摩の声が凍りついた。全員が訝^{いぶか}しげに彼を見、
その視線を追って廊下の先へと首を巡らした。

黒い人影がひとつ、ちょうど曲がり角から現れたところ
だった。

萌黄はその男を知っていた。

いや、日本人なら誰もがその人物を知っていた。

15

「あれ、総理じゃないのか」

問うまでもない。

蛍光灯の光がスキンヘッドに照り映える。鼻の下と顎
にはスーツの色に合わせたような黒い髭。

歴代総理大臣の中でも飛び抜けて個性的なルックスの
山寺鋭一は、自分に注目が集まっていると知るや、ゆっ
くりとした足音を響かせながら、萌黄たちのほうへと近
づいてきた。

「CGだったりして……」

揣摩が言うのも無理はなかった。伊里江やむんと学園
前のモデルハウスに潜んでいた時、揣摩の携帯で見たC
Gの総理に服装までそっくりだったからだ。

「皆さん、こんばんは。山寺です」

バリトンの豊かな声に、萌黄や雛田は思わず頭を下げていた。

「お嬢さん」総理は一番前にいた清香に話しかけた。

「ひよつとして君は、あの有名なアルパ奏者の――」

「影松清香……です」

「そうそう、清香さん。君のCDはよく聴いてますよ」

「あ、どうも」

清香はしどろもどろで礼を述べた。

「あなたもリアルなんですネ？」

「は、はい」

「他のリアルの皆さんもお揃いですか」

「ええ、ここには全員――」

「バカッ、素直に答えんな！」

ハジメが怒鳴った。その声に萌黄は我に返った。その通りだ。政府は敵のはずなのに。

「失礼した」総理は軽くお辞儀すると、「唐突に現れ、驚かせてしまったようだね。申し訳ない」

山寺は萌黄がテレビで観たままの、悠揚^{ゆうよう}迫らない物腰と笑顔を向けた。しかしハジメはそんな空気に吞まれるかとはばかりに憤慨をあらわにし、山寺ににじり寄った。

「我慢できずに総理自ら、リアル狩りに出向いてきたのか？」

しかし山寺はハジメから視線を外さずに首を横に振ると、一語一語諭すように口にした。

「安心してほしい。私はね、君たちを助けに来たんだ」
助ける？ 総理大臣がわざわざ足を運んで？

さらに言い募ろうとするハジメを山寺は押しとどめ、
「言いたいことは判る。リアルクリアーズを組織したのは私。そして笹倉防衛庁長官のリアル狩り発言を黙認したのも私。君たちリアルが政府を恨むのも当然だ。だがね、聞いてほしい。それもこれも伊里江真佐吉というマッドサイエンティストが我々に刷り込んだ恐怖のなせるワザだったんだよ」

山寺はまなざしには気迫がこもっていた。これまでに何万人もの国民を魅了してきた眼だ。

「北海道があんな形で消された。それでも『テロに屈せず』をモットーにしてきた我々政府は最後まで真佐吉の勝手な要求を拒否した。その結果、君たちは無慈悲にもリアルとしてこの世界に送り込まれ、我々はヴァーチャルとして誕生させられてしまった。どちらも同じ被害者なんだよ。そして――」

山寺は大仰に両手を広げた。

「我々には国民を守る義務がある。ヴァーチャルがいくらリアルのコピーであるといっても、ひとりひとりは尊い命を持っている。そうでしょう？」

前に出た山寺は、雛田の両手をつかみ、その顔を覗き込んだ。雛田は恐慌を来したように髪を逆立てると、そうですそうだと何度も頷き返した。横では清香が涙ぐんでいる。

「ありがとう」

総理は雛田の肩を叩くと、再び一同の顔を見渡した。ハジメだけは、ずっとそっぽを向いている。

「とは言え、リアルのかたがたも同じ我が国民であることには違いない。偽らざる本心を言わせてもらえば、彼ら彼女らも助けてあげたい！——幸いにも悪の根源、伊里江真佐吉は亡くなったことだし」

「どうしてそれを？」

シュウが初めて口を開いた。山寺はシュウの汚れた迷彩服を眩しげに見つめて、

「君たちリアルキラーズが突入した直後、待機させていた陸自の精鋭を増援部隊として送り込んだんだ。彼らは最深部の湖水の注ぎ口までしかたどり着けなかったが、真佐吉の声はよく聞こえた。私も中継で聴き取ることができたんだ。まさかP A Iが真佐吉になり変わっていたとはなあ。今でも信じられん」

腕を組んで浚面を浮かべた山寺は、いつの間にか萌黄たちの中心に立っていた。萌黄はいつか見たテレビ映像を思い出した。有名人の若い頃を特集した番組で、デザ

イナ―時代の山寺が、ファッションショーの会場でファンの若者たちに囲まれ、喜々としてブランド・コンセプトを語りかけていた。

まずは相手の懷に飛び込む。

尻が軽い、過度なパフォーマンスと陰口を叩かれたその姿勢は、選挙運動の際も、政治家になってからも変わらなかった。

「この通路の存在は、誰からお聞きに？」

シュウが幾分和らげた口調で訊ねると、

「このW I B Aの社長、宝井さんがわざわざ訪ねてきて教えてくれたんだ」

なるほどと萌黄は納得した。しかしそんなことより気になることがある。萌黄は思い切って声を出した。

「総理、わたしたちリアルを助けてくださるといっても、どうやって？」

すると山寺は「おお」と歓声を上げて、萌黄を驚かせた。

「お嬢さん。君はあの光嶋博士の娘さんだね？」

「は、はい」

総理は萌黄の右手をとった。

「お父さんに感謝しないといけないよ。君たちを救う方法を発見したのは誰だろう、博士なんだ」

萌黄には何が何やら判らなかった。

「つい昨日のことだ。京都工大のエネ研で、研究の陣頭指揮をしていた博士は、ついにリアルのエネルギー拡散法を完成させたのだ」

「何だって！」

全員が叫んでいた。

「ウソじゃないぞ。本当だ。元の世界に帰ることができなくなった君たちは、これでこの世界で生きていくことができるんだ。堂々とこのヴァーチャル世界で暮らせるんだよ」

雛田が膝をついた。シュウも頭に手を当てて総理の言葉に反芻している。ハジメさえ寄せていた眉を開いていた。

山寺は萌黄に顔を戻した。

「君は本当に素晴らしいお父さんを持った。国民を代表して敬意を表したい。……ん？ 君、その腕は？」

萌黄の左肩に置こうとした山寺の手が止まった。

「これは――」

「名誉の負傷です」シュウが代わりに答えた。「彼女は皆を守るために怪物と闘い、腕を失ったのです」

「そんな……まさか」

山寺は絶句すると、いきなり萌黄を抱きすくめた。

「さぞや苦しかったろう。つらかったらうね」

萌黄は身体から力が抜けていくのを感じた。山寺総理

が謝罪の言葉を述べたのだ。リアルの自分を受け入れてくれたのだ。ほんの少しだが、これまでの苦難の日々が報われた気持ちがあった。

元の世界に帰れない残念さは号泣したいほどだったが、この世界に居続ける上での大きな障害が、たった今、取り除かれたのだ。なんと父親によって。

これが運命なのか……。きつとそうなのだろう。

萌黄は目を閉じた。

つんと鼻先を軽い刺激臭が通過した。

パツとまぶたを開く。すぐそばに山寺のスキンヘッドの頭があった。ヘヤトニツクのにおいでもなさそうだ。

〈……もえぎ〉

その時だった。

またしても、むんの声が聞こえた気がした。

（靈魂の声が……成仏でけへんの？）

萌黄の神経が周囲の空間をまさぐった。

すると、いきなり彼女の心の中に、とてつもなく巨大な違和感が舞い降りてきた。

何かが違う。何かが――。

薄く黒い幕が、音もなく天井から降りてきた。もちろん

んそんなものが実際に現れたわけではない。萌黄の感じ
た違和感が、何らかの作用で彼女の目にそんな形で投影
されているのだ。なぜ確信を持って言えるのかというと、
周囲にいる誰ひとり、不審な声を挙げる者がいなかった
からだ。

すぐ目と鼻の先で壁に背中を付けて立っているシュウ。
その脇にしゃがみ込んでいる清香と雛田。これから向か
う予定の階段側で成り行きをじっと見つめている久保田、
揣摩、柳瀬、和久井助手。床に寝かされた伊里江とその
横に尻についてじっとこちらを睨んでいる炎少年。ハジ
メの姿は陰に入っていて見えない。陰を作っているのは、
萌黄の肩に両腕をまわした山寺総理。

（むんの声を聞いたのは、自分だけ――）

やはり気のせいなのか。その割には、二度も聞いたむ
んの声は驚くほどクリアだった。

霊魂でも幽霊でも、何でもいい。肝心なのは、むんの
声には、何かを伝えようとする切迫したものがあること
だった。

（どうということなんやろ……）

全神経を耳に集中させる。聴き取れるものなら、声の
意図を知りたい。聞こえるくる理由を知りたい！

頭の中が冴え冴えとしてきた。集中が高まっている証
拠だ。たとえばかすかな声でも聞き漏らすまい。そう決心

するまでには、総理が抱きついて十秒と経っていなかった。

『あきらめるしかないのね。元の世界に戻れないのは、確定的なのね』

これは清香のつぶやきだ。重なるようにして今度は雛田の声が、

『この子が戻れないのを、僕は喜んでいいのか、悲しむべきなのか』

ン？ 萌黄は眉を寄せた。雛田の言葉は、独り言にしては口に出すものではないように思えたからだ。すぐそばに清香がいるというのに。

『どう言ってやればいいんだろう。この世界で一緒に暮らそう。そんなふうに言える自信が僕にあればなあ』

アツと叫びそうになった。

萌黄が聞いているのは、彼らの会話ではない。思考だ。考えていることが伝わってきているのだ。

疑う余地はない。

リアル耳は、今やその能力を遥かに超え、広げたアンテナは相手の心の中をもまさぐっていたのだ。

動揺する気持ちを飲み込んで、他のリアルたちの顔色をうかがう。しかし、どの顔にも特に変わったところは見られない。心を覗いているのは萌黄だけらしい。

頭の冴えがますます深まっていく。彼女はまるで巨大

なホールにいる気分がした。何百メートルも向こうで針が落ちた音まで聞こえそうなほど、頭の中は洞窟の中の清水のように澄み渡っていた。

『こんな裏返った国で、俺ら、生きていけるのかよ』
炎少年の思考だ。声色は当人のままなので、聞き間違えようがない。

『フン、願ったりかなったりだ。精一杯、政府を利用させてもらうぜ』

これはハジメ。あくまでも野望を実現させるつもりでいる。

『わたし、萌黄さんよりは美人だと思うけど……』
和久井助手だった。

（アカンやん、こんな盗み聞きでしかあらへん！）
人に向けるべきではないと、あわててアンテナの向きを変えた時だった。

『シール——』

傾いたアンテナが言葉の断片をひっかけた。山寺総理だった。

（シール？）

状況に不似合いな響きに、行き過ぎたアンテナをひるがえした。

『——よし、これでいい』

再び、山寺の思考を捕捉した。

『あと数人に貼り付けければ……』

山寺は確かにそう言っていた。いや考えていた。

(シール……って、貼るシールのこと?)

こんな時に総理は一体何を――。

そこまで思った時、萌黄の背中に電流が走った。

先刻から感じていた違和感――不可思議な黒い幕。それをたどってみると、山寺総理の上で最も色合いが濃くなっている。違和感の発信源は総理だ。

「今後は安心して政府を信頼してくれていい」

山寺はようやく萌黄から身体を離れた。その仕草はまるで萌黄から早く遠ざかりたいかのようにもうかがえた。
(シール……貼る……どこへ……?)

山寺の背広の背中を見送る。彼は次に炎少年と伊里江に近づいていた。親しげに両腕を伸ばしながら。

『残るは、このふたりか』

また山寺の心の声が飛んできた。同時に彼の醸し出す闇のような黒さがさらに濃さを増した。

『彼らは我々とは異人種だ。いや、この世界では人間とは呼べない存在だ。だから彼らが消えることに罪悪感など感じる必要は全くない』

山寺の語りかける言葉と、彼の心の声との間に横たわる落差。それは、つまり……

――嘘！

山寺総理は〈嘘〉をついている！

彼を取り巻く黒い霧のようなものの正体は、それだ！
萌黄は自分の確信を信じた。

しかし——待て。

山寺の嘘はどれだ？ まさかすべてが？

そして「シール」とは？

見つめる山寺の背中が二、三度揺れた。彼は伊里江と
炎少年の肩を気安げに叩いていた。

瞬時、萌黄の目が手の下に吸い込まれた。炎少年の着
るTシャツの袖。見覚えのないシミがそこにあつた。半
径五ミリほどの円形で、シミと呼ぶには薄い色をしてお
り、わずかに膨らんでいる。

すぐに伊里江のほうに目を転じ、彼の袖を見つめる。

山寺が叩いた辺り。

あつた。円形のシミ。

山寺が叩く振りをしながら貼り付けたというのか。萌
黄は急いで自分のTシャツに目を落とす。ない。背中か。
右手をまわしてまさぐってみる。

「どうしたの？」

萌黄の様子を不審に思ったらしく、清香が訊ねた。萌
黄は答えずにまさぐり続ける。

——あつた。やっぱり。

右手でTシャツの背中を前に引っ張る。目を寄せると、

それは確かに丸く小さなシールだった。指先で触れると、表面はざらざらとしている。これでは照明にも光らないし、よほど注意して見ないと、貼られていることには気づかないだろう。

萌黄は爪の先で剥がそうと試みた。

「待て」

制止したのはシュウだった。どきつと心臓が鳴った。

彼はつかつかと萌黄に近寄ると、彼女のつまんでいるTシャツの裾に屈み込んだ。手は伸ばさずに、視線をシールに注ぐ。

その顔が息を飲むのが判った。

「いつからこれが？」

シュウの声には切迫した調子がこもっていた。シールと萌黄の顔を怒ったような顔で交互に見つめる。

萌黄は答えるより先に訊ねた。

「何なん、これ」

「爆弾だ。シール爆弾といわれるものだ」

（ば、爆弾！）

戦慄が背中を駆け上った。

シュウは傭兵だ。見立てに間違いはあるまい。

萌黄は逃げるように身体を離れたが、シュウは裾をつかんだまま離さない。

「いつからあつたんだ？」

いらついた声がトーンを上げ、聞きつけた全員がこちらを向いた。山寺総理も引き攣ひきつった首をねじ曲げてシュウを凝視したが、その手許に目をやるとたちまち顔を硬直させた。

『バカな！ 絶対にバレないと――』

「総理なのか？」

シュウの声がかぶさった。いつの間にか萌黄と山寺はにらめっこ状態だった。気づかれないほうがおかしい。

シュウが山寺に向き直るのと、山寺が立ち上がるのが同時だった。

「あー、それでは諸君、私は先に行つて地上班に君たちの無事を知らせておくので」

それだけ言つて、山寺はそそくさと踵きびすを返した。

「総理、お待ちください」

シュウの呼びかけにも応じない。カツカツと靴音を響かせて、逃げるように廊下を歩いていく。

『目的は達した。これ以上の長居は無用だ。さもないと爆発の巻き添えを食つてしまう』

山寺が撒き散らすように心の声を落としていく。それは萌黄を激しく混乱させた。この状況にどう対処しているのか判断できない。

「逃がすな！」

シュウが叫んだ。しかし他の者たちは山寺の術中には

まったのか、ぽかんとするばかりである。

萌黄はシュウの声に即座に反応し、上げた右手を振り下ろした。

たちまち廊下に風が起こった。山寺はワツと叫んで転倒した。その両足に見えない空気の紐が絡み付く。

「オイ、助けてくれーっ」

山寺が絞り出すような悲鳴を前方に投げかけると、廊下の曲がり角から黒服に身を包んだふたりの男が現れた。どちらも日本人のようだが、日本人離れした体格をしている。そのわりには動きが敏捷だった。総理を警護するSPだろう。

だが、なぜ彼らを残して、山寺ひとりで萌黄たちに近づいたのか？

（そうか、わたしらを油断させるためやったんや。パフォーマー総理のやりそうなことや！）

萌黄は唇を噛んだ。

「みんな、伏せろ！」

シュウが前に出て叫んだ。銃を構えている。

SPは当然総理を奪還しようと攻撃を仕掛けてくる。

萌黄はそう考え、急いでエアシールドを張るべく、気持ちを集中させた。

ところがSPたちに、そんな素振りは見られず、ひとりが持っていたレシーバーのようなものを口許に持って

いき、早口の英語で何ごとかしやべった。

（なんで英語？）

リアル耳はそれを捉えたが、英会話は苦手だ。意味までは判らない。

しかし広げたままのアンテナはしつかりと捉えた。S
Pの心の声を。

『総理はリアルに捕まりました。想定オプシヨンの2です。——了解、このまま帰投します』

驚いたことに、ふたりのSPは助けを求める山寺を残し、平然と曲がり角の向こうに姿を消した。

17

廊下は一時、しんと静まり返った。

SPに置いてきぼりをくった山寺総理は、エアロープにがんじがらめにされた身体を動かすことも忘れ、惚けたように廊下の彼方に目をやっていた。

萌黄もシュウも、ハジメや清香らも、誰もが意外な展開についていけず、その場に立ち尽くしている。

そんな彼らのあいだを縫って、炎少年が萌黄の横にやって来た。

「なあ、何が起こったんだ？ 今の連中は誰？」

疑問に思うのも当然だ。たったいま眼前に展開した出

来事を、曲がりなりにも把握しているのは、心の声を聴き取ることできた萌黄だけだろう。その萌黄にもSPが逃げた理由は見当がつかない。

「あのね……」

萌黄は説明しようとして口をつぐんだ。人の心が読める話はすべきでないと思ったからだ。そんな能力を身につけたことが知られたら、いくらリアル同士でも気味悪がられるかもしれない。

炎少年は、言葉を切った萌黄を怪訝そうに見上げた。そんな彼を突き飛ばすように、太い手が伸びてきた。

「すぐに着ているものを脱げ！」

シュウだ。萌黄の両袖をつかんで真上に引っ張り上げようとする。反射的に萌黄は悲鳴を上げた。

「コラ、あんたナニしてんだ！」

驚いた久保田が飛んできた。シュウは片足を上げて、近づく腹を蹴飛ばした。久保田はたまらず床に転がった。「説明は後だ。他のリアルたち、お前らも脱げ。急がないと爆発する！」

爆発という言葉は、たちまち皆を騒然とさせた。

萌黄は右手だけを使つて、むんの忘れ形見のTシャツを上半身から剥ぎ取った。下は汚れのしみ込んだブラジャーだけである。

「シュウさん、どうなったら爆発するの？」

「こいつは対象物に貼り付くと、すぐに風化し始める。その過程で摩擦熱が高まり、数分ないし十分ほどで爆発する。その規模は、たったひとつで半径十メートルにいる人間を確実に殺傷できる」

シュウが早口で述べ立てる。

萌黄は炎少年に飛びつくと、彼のシャツを力づくで脱がせた。ハジメもあわてて脱いだ。ある程度事態が飲み込めたらしい。萌黄はそれもひたたく。動けない伊里江は腕を上げるのも困難で、シュウは取り出したナイフで伊里江のTシャツを縦に切り裂いた。

清香だけが残った。彼女は頑強に抵抗した。

「シールの爆弾？ 小さいんでしょ？ そこだけ切り取ればいいじゃない」

「そんな悠長なことはしてられん。それに切り抜こうとして、手許が狂って爆弾に触れてみる。摩擦でアツという間にドカンだ」

シュウは目を怒らせて清香に迫る。知らない者が見ればまるで変態行為だ。雛田がやめろと叫びながら清香の前に出たが、シュウは片手一本で雛田を廊下の隅に放り投げた。

「清香さん、お願い。時間がないねん」

萌黄が懇願した。清香はそれを見ると、しぶしぶTシャツを脱いだ。ヴァーチャルの男たちが途端にどよめ

いた。彼らは事態を全く把握していない。清香はもちろんブラをしていたが。

萌黄は最後の一枚を清香から回収すると、震える手で床の上に投げ出した。

（もう何分経った？）

緊張に頭がカツとなる。萌黄は集めたTシャツを強力なエアシールドでくるんでしまおうと考えていた。こんな狭い廊下で爆風を回避するにはそれしかない。

集中力を高める。

じっと床の上を睨み、大きな球体をイメージする。

風もない廊下で、空気がうねり始めた。

そのとき、一枚のTシャツの袖に貼られたシールから立ちのぼる煙を見たような気がした。

——時間がない。

脈が速まる。心臓のほうが先に破裂してしまいそうだ。冷や汗が臉を伝い落ち、集中が削がれる。力の焦点がぼやける。頭の奥に痛みが走る。

——疲れてるんや。もう何時間、緊張し続けてんのか。球体がぐにやりとひしゃげた。

（くそっ、うまいこといかへん）

リアルといえど食事も睡眠も必要だ。それらをここ数日というもの、著しく欠いている。萌黄はうすうす勘づいていた。この半日、手足に負った傷が治りにくくなっ

ていることに。

（お腹空いた……横になってぐっすり眠りたい……）

すると、こんな時にもかかわらず睡魔が襲ってきた。

身体がぐらりと傾いた。片腕がないとバランスがうまくとれない。思わず力んで足を踏ん張る。

その足が床に落ちた汗で滑った。

（しもたっ）

天井が視野いっぱいに広がった。肩が床にぶつかる衝撃に備えて縮まる。

どすん。萌黄の両肩を柔らかい手が受け止めた。清香だった。

「手伝うわ」

萌黄を支える腕から、リアルパワーが心地よく伝わってくる。すると続いて左右から同じセリフがステレオで聞こえてきた。

「俺も」

ハジメと炎少年。ふたりとも萌黄の肩に手を置いた。

（何、これ？ ス——スゴい！）

萌黄の身体に三人のリアルパワーが流れ込んでくる。

ひとりのパワーが小さな滝だとすると、四人の力が合わさったそれは、まるで大河の奔流だった。

身体を立て直し、再び気持ちを集中させる。

気がつくと球体は最前とは違い、分厚い空気の鎧をま

とつていた。さすがに四人分のパワーが重なると圧巻である。透明なはずなのに、丸い輪郭が見えるようだった。ふいに球体の中が白く濁り、大きさが倍ほどに膨らんだ。同時にズンという音がして床や壁が激しく揺れた。

シール爆弾がついに爆発したのだ。

（あんなちつこいものが……）

少し前までどつしりとのしかかっていた睡魔や疲労が、すっかり雲散霧消していた。それも三人のパワーのおかげかもしれない。萌黄は感謝の目で清香たちを見つめた。

「いったい全体、何がどうなったんだい？」

自分の上着を清香に着せかけながら、雛田は誰にともなくつぶやいた。

廊下にはまだ爆発の余韻が残っている。粉々になったTシャツの破片がいくつも宙を舞っていた。

「総理の罠です」答えたのは萌黄だった。「味方のような顔でわたしらを油断させて、こっそり爆弾を貼り付けたんですよ」

「てめーっ」

ハジメは怒りに駆られ、床に倒れたままの山寺の腹を蹴り上げた。ぐふつと声にならない声を出して山寺は真っ赤な砂を吐いた。

「どういうこと？」清香が萌黄に顔を寄せる。「まさか、総理が言ってたことって、全部ウソ？」

萌黄が頷く。

「そんな……どうしてそう言い切れるの？」

萌黄は返答できなかった。心を読み取ったとは言えなかった。

知らずにシュウが助け舟を出した。

「当人に訊いてみればいいさ。まあ訊かなくても、シール爆弾を使ってリアルを一気に抹殺しようとしたんだ。全てウソだったと自ら証明してるようなもんだと俺は思うがね」

清香は息を飲んだ。納得したらしい。

「天下の宰相がたったひとり徒手空拳で乗り込んできた。それだけでも相手のガードを下げさせるには十分だ。その上、思わず信じたくなるような、すがりたくなるような甘言を並べていった。リアルたちがありもしない未来に目を遠くしたところで、用意してきたシール爆弾を服の上からそつと貼り付けた。まさか総理自身がそんなことをするとは誰も想像しまい。首尾は上々、総理は無事に帰還する筋書きだった——ところが、総理も政府もリアルを見くびり過ぎていた。リアルの勘を、リアルの視力を」

炎少年が萌黄の前に立って、彼女を眩しげに見上げた。『やっぱ、萌黄さんって、俺らとは格が違うな。ちえつ、俺が子供じゃなけりゃ、カノジョにしてやんのに』

萌黄は苦笑しそうになるのを必死にこらえた。

「いわゆる、策士策に溺れる、か」

ハジメは右足で山寺の背中を踏みつけた。山寺はすでに観念したらしく、腹這いになったまま、じっとこちらを見ている。

「何だよ」

山寺は床に付けた顎を斜めにして、一同の顔をざっと眺め渡し、その口を開いた。

「言われたとおりだ。私は君たちを騙した。私の言ったことはすべてでたらめだ」

「じゃあ、リアルがこの世界で生きていける方法つても」

「真っ赤なウソだよ」

萌黄は目を閉じた。改めて断言されると、胸にずしりと来る。

とことと炎少年が山寺に駆け寄った。頭もとに座り込む。

「アンタ、ホンモノか？」

山寺はまばたきした。

「ホンモノだったらおかしいよ。アンタのしたことは、日頃からアンタが口を酸っぱくして嫌ってるテロリストそのものじゃないか」

萌黄はアツと思った。そのとおりだ。

「……しかたがなかったんだ。国民を守るためには。並の人間ではないお前たちが相手とあつては、他に選択できる方法は思いつかなかった」

「都合のいい考えだね。そういうのを二枚舌っていうんじゃないかったっけ」

少年の言葉とは思えない。山寺は煩悶するように眉間に皺を寄せると、額を床にこすりつけて俯いた。

「総理、SPたちはいやにあつさり引き上げていきましたな」炎少年の後ろからシュウが言った。「奴ら、救いを求めるあなたを助けようとしなかった。あなたにとつては明らかに想定外だったようだが――。どうやらあのSPたち、アメリカに鼻薬を嗅がされましたな。それとも元々アメリカが送り込んだスパイだったのかな？」

『……そうなのか。私はアメリカ大統領の口車にまんまと乗せられ、操られただけなのか』

山寺の心の叫びが、齒を軋ませる音と一緒に聞こえてきた。萌黄は聞いているのがつらくなった。

「シール爆弾も、本来は日本にないものだ」シュウは山寺の上体を起こし、身体検査をしながら言葉を続ける。

「現在の状況は、総理にとつては想定外でも、米軍には何十と想定されたオプシヨンのひとつでしような」

シュウが手を挙げた。その手には小型マイクが握られ

ていた。これまでの会話は全て筒抜けだったのか。

リアルがここに勢揃いしていることも、当然……。

いやそれより、萌黄の緊張の糸を。パチンとはじいた言葉があった。シュウの会話の中のひとこと。オプシヨン。あのSPは確かにそう言った。

山寺はまだハジメのパワーで床に押しつけられている。萌黄は腕のない左肩を右手で押さえながら、山寺の前に膝を折った。

「ねえ、〈想定オプシヨンの2〉って何？」

それまで小刻みに震えていた山寺の肩が止まった。山寺は絶句していた。それでも思いはダイレクトに伝わってきた。

『なぜそれを？ 〈想定オプシヨンの2〉だと？ それは

—— 標的へのピンポイント爆撃じゃないか！ 』

18

標的、ピンポイント、爆撃。

山寺が頭の中に並べた単語は、どこか遠くの国の紛争を伝えるニュースを思い起こさせた。

ピンポイント……ピンポイント……

無意識に声に出していたらしい。山寺が目を大きく見開き、恐怖とも嫌悪ともつかない表情を浮かべた。

「お前っ——人の心が読——」

そう言いかけるのを遮って、萌黄は右手で相手のネクタイの根元をつかみ、手荒く引っ張ると、

「標的ってここ？　ここには一般人もよおけいてるんやで！　アンタもおるし」

すると山寺は思考だけで返答する。

『オプシヨンの2はそういうことだ。本来なら私の作戦が失敗し、それでも無事帰還した場合の選択だったはず。私が戻らなければ発動されない——はずだ。なのに、この娘は、なぜ』

「SPがレシーバーに向けてしゃべってたんよ」

『——そうなのか？　するとやはりそうか……米軍はリアルが集結している今こそ絶好の時と爆撃を開始するつもりなのだ』

今やて!?　萌黄は叫びそうになった。

それを押しとどめたのは、萌黄のアンテナを通じて流れ込んできた映像だった。山寺の回想だ。

大勢の白衣の男女に囲まれている。背後には精密機器やコンピュータ、そして丸みを帯びた壁。

その場所には見覚えがあつた。

京都工大のエネ研地下室。

山上、山中、山下が最前列にいる。背中の腰の辺りで手を組み、妙に反り返って笑みを浮かべている。

〈野宮くんが亡くなる直前に開発した技術が実を結んだ。これで彼の魂も浮かばれるだろう〉

視線が右に動いた。目を拭う老人が立っていた。むしろがた筵漚教授だ。今のは教授の声だったのだ。

〈だが、使用には細心の注意を……〉

教授が言い募るのに、隣りの男が口をはさんだ。

〈大丈夫ですよ、教授。米軍もこうして約束してくれたんですから〉

ダルマのような体型の背広の男が、酒焼けした赤ら顔をほころばせている。父親の会社、伊椎製作所の副社長だ。さらにその右隣には――

（お父さん！）

痩せぎすの身体を折り曲げるようにして面を伏せているのは、父の光嶋博士だった。

副社長は手を伸ばして、背の高い博士の肩を叩きながら、

〈これで君はもう一度、ノーベル賞をもらえるかもな。

今度は平和賞かな。ワハハハハ〉

〈私はただ野宮君を手伝っただけですから〉

〈卑下など無用。我が社の一員が世界を救った。それでいいじゃないか。君と野宮君が共同開発した、リアルを退治する兵器。これを積んだ米戦闘機が空母に待機中。あとは総理の御決断待ち……と、こういうわけです

な？」

萌黄は脳天を金槌で殴られた気がした。

（退治——お父さんが——わたしを——）

まるで害虫駆除の相談でもしているかのように。

「あくまでも私の単身潜入工作が失敗したらの話です。

そうですね」

山寺の声がそう言つて、隣りを向いた。軍服を着た青い目の白人が彼に白い歯を見せた。

「もちろんです。そして我々は陰ながら、総理の安全をお守りします」

彼は流暢な日本語でそう言った。総理の視線が再び光嶋博士に向く。

「博士。あなたには感謝しています。よくぞ兵器開発にご尽力下さいました。リアルの中にはあなたのお子様もおられるというのに」

「いえ、この世界を守るためには、しかたがありません」

博士はそう言い切ると、白人が手を伸ばして博士の手を強く握った。

「あなたの志は無駄にはしませんよ」

アッハッハと副社長が耳障りな高笑いを重ねる。

「ぜひ大統領にもお伝え下さい。これは貸しです。大きな貸しですぞ、と」

いつそアンテナを折ってしまいたかった。

世界中のみんながリアルを排除したがつている。

一時は仲間とさえ思った人々も。

そして、肉親さえも。

いつしか萌黄はうなだれていた。

清香や炎少年が声をかけたが、彼女の本物の耳にはひと言も届かなかった。

山寺の回想が場面転換した。

濃紺のワンピースを着た女性と、空色のドレスを着た中学生くらいの女の子が現れた。どこかの室内だ。

へふたりとも、待っていてくれ。きつと成功させて戻るからな」

そうだ、このふたりは山寺の妻子だ。

「お父様、リアルなんかやつつけちゃって」

女の子は、はしゃぐように叫んだ。

ああ……。

萌黄は自分の目が潤むを感じた。

これがみんなの声だ。そして国民のナマの声なのだ。

早く消えてなくなれ。死んでくれ。

そう思っている。願っている。誰もが。

ハジメが提案したような、地球のどこかで生きていくなど無理な話だ。ヴァーチャルたちは決してリアルが同じ世界に存在することを許したりはしない。

すーっと深呼吸をした。

萌黄は頭を振って、現実に戻った。そして山寺に問いかけた。

「着弾はいつですか？」

総理はやはり答えず、思考した。

『もう、じきだ。リアルたちに逃げる時間など与えないために……これも読まれているのか？』

山寺自身、自分も攻撃の巻き添えで命を落とすことを覚悟していた。その思いが明確に伝わってきた。

立派なものだと萌黄は思った。総理は最後の最後で腹をくくったのだ。それで世界が救われるのならと。

使命のために死ぬつもりなのだ。いや家族のためかもしれない。

（お父さんは、どんなことを考えて、私を滅ぼす兵器を作ったんやろか。心の中で、娘ひとりと、何十億人というヴァーチャルの命を天秤^{てんびん}にかけたんやろか）

清香が萌黄の肩を激しく揺らした。

「ねえ、萌黄さん。どうしたのよ？」

萌黄は黙っている。このままミサイルが落ちてきて、全員がここで死ねば、すべては解決。

世界の総人口って、七十億？ 八十億？ ふたつの世界を合わせて百五十億人くらいか。それだけの命が助かるならVIPでもないわたしらの命なんて軽いもんや。

「あ？」

炎少年が突然天井を見上げ、指先を突き上げた。

「どうした……ン？」

ハジメも鋭い目を天井に向けた。

「何かが近づいてくる」

少年も、自らのアンテナで飛翔体を捉えたらしい。

「おおかた、総理の救出部隊がやってきたんじゃないのか」

ハジメは言ったが、山寺の心の声はそれを否定した。

『あり得ない。いよいよ最期の時が来たのだ』

——最期。

一年にも二年にも感じたこの十二日間、萌黄は逃げるだけ逃げた。そして真佐吉に挑むべく、危険を省みず、その中枢へと飛び込んでいった。

それらの努力はすべて無駄だった。何の意味もなかった。ただいたずらに事態を混乱させただけだった……。

頭上に重しを乗せたような重圧感が迫ってきた。

ピンポイント爆撃は、予定どおり決行されたのだ。

わたしの人生はここで終わる。

そして世界は平和な日々を続けていく。

萌黄は冷静に〈その時〉を迎えようと無心になった。

考えることも、悩むこともやめた。

解き放たれた心は、リアルパワーによるアンテナさえ

広がるのを抑えはしなかった。

だから、山寺の心に影を落とす小さな雲が、その先端に引つかからなければ、萌黄の物語はここで終わっていたことだろう。

19

『唯一、気がかりなのは――』

山寺総理を取り巻いていた黒い霧はすでない。が、好天の大地に一点の影を落とすように、輪郭のくつきりとしたその雲は、山寺の不安の強さを物語っていた。

『――伊椎製作所の連中だ』

思いがけない固有名詞が出てきた。とはいえ、つい先ほど山寺が回想したエネ研でのワンシーンには、副社長が登場していた。

『彼らは真佐吉の研究の後追いで得た成果を独占するつもりだ。おまけにそれを鋭く嗅ぎつけたアメリカは、すべてを自分たちのほうに取り込もうとしている……。危険だ。このままでは第二、第三の真佐吉が出現する』

ドクン。

萌黄の心臓が大きく波打った。

波動は全身の端々へと伝わっていく。

顔を上げる。いや、上げなくても周囲の状況はほぼ完

全につかんでいた。

全身が目になったような気がした。左右、前後、上下、すべてが彼女には見えた。そしてはるか空から飛来するミサイルの姿も。

萌黄は叫んだ。吠えたと言ったほうが近い。危機はもうそこまで来ている。説明している余裕はなかった。しかし、リアル同士ならパワーを使って意思を伝える自信が、今の彼女にはあった。

ハジメ、清香、炎少年が丸くした目を萌黄に向けた。壁を背に力なく座っていた伊里江でさえ、顔に緊張感をみなぎらせた。

通じたのだ。ひと言も話さずに。

萌黄は伊里江のそばに駆け寄った。他の三人も同時にそうした。差し出した手を互いに握り合い、動けない伊里江を含めて、輪になった。

壁や天井が激しく振動したのは、その直後だった。

明かりが消え、悲鳴が交錯した。

眉に込めた力をゆっくりと抜く。

そつと薄目を開く。

辺りは真っ暗だった。どちらが上か下かも判らない。

あの瞬間、萌黄は、仲間たち全員を飲み込める大きな空気球、エアボールをイメージした。五人のリアルパ

ワーを結集したので、ほんのまたばき一回の時間でそれは完成した。

しかし万全かどうか確認する余裕もなく、ミサイルは頭上に落ちた。それでも手は離さなかった。萌黄の右手は清香の左手を握っていた。

萌黄は右手を動かしてみる。手の中に清香の手のひらの感触があった。

「清香さん、清香さん」

呼びかけると、ウンと元気な声がすぐそばの闇の中から聞こえてきた。

「ここにいるよ。大丈夫だった？」

「平気。ずいぶん弾んだみたいやったけど」

エアボールが有効に作用した証拠だ。イヤというほど目が回ったが、おかげで打ち身ひとつしていない。

離れたところで、鉄骨が倒れる音がした。するとそれが合図のように、あちこちで身じろぎする音やうめく声、呼び合う声がした。

「……香、清香」

「あ、おじさま。ここよ。無事？」

「なんとか……手足は付いてるよ」

「久保田さーん、揣摩さーん」

萌黄が大声で呼ぶと、後方からふたりのウォーツスと言う声が聞こえた。やはり無事のようにだ。

シュツと音がしてライターの火が灯る。揣摩だった。ぼんやりとした明かりが床や壁に反射する。

「見ろよ、あっちこっちにヒビが入ってる。廊下もさつきより傾いてるぞ」

揣摩が立ち上がるとうとしたので、萌黄は注意した。

「まだ動かないで。エアボールは消えてないんよ」

「何だい、エアボールって？」

萌黄は説明した。揣摩は二の句が継げないほど驚いた。

「ありがとう」久保田が萌黄のそばに這ってきた。「助けられたんだな」

「お互い様ですよ」萌黄が応えた。

ハジメも炎少年も集まってきた。彼らにはへ攻撃は終わっていない。まだリアルパワーを切らないようにとテレパシーで伝えている。そうだ、これはまさにテレパシーだ。

萌黄はさらに伝言を空中に放った。

（米軍はリアルパワーを無効にする兵器を持ってるんやて。きつとまた攻撃してくると思うわ）

考えは一瞬のうちに他の四人に伝わる。まるでメールでも送るように。

『今度はテレパシーか。どうやったらそんなに、自分の能力を開発できるんだ？』

炎少年だ。そんなこと、萌黄にも判らない。

「また、あの黒い光線銃か！ 今度来たら、撃つ前に仕留めてやるよ」

ハジメが口を尖らせた。

萌黄は周囲に声をかけた。

「みなさん、無事ですかー？ 無事だったら返事してくださーい」

ワタシここよーと柳瀬が返した。

ここですと和久井の感情の乏しい声がした。

無事だと短くシュウが応えた。

平気ですーつと雛田がギャグっぽく叫んだ。

「総理は？」

すると和久井が、横におられますと知らせた。

「ただ、気絶してるようです」

「起こしてください！ 敵がどう攻めてくるのか、知りたい」

山寺は唯一の情報源だ。彼の思考から敵の計画をへ読み取るゝ必要があった。

久保田が暗い中を山寺に近寄り、その頬を手で張った。山寺は軽くなる。しかしその思考は混濁していて、萌黄のアンテナには何も引つかからなかった。

揣摩が言ったように、廊下はほんのわずかだが、出口のある階段方面から、地下からの脱出口のある奥に向けて緩やかな傾きがあった。WIBA全体がそうだったの

か、自分たちのいる辺りだけそうなのかは不明だが、攻撃の規模は決して小さくなかったらしい。

エアボールがなければどうなっていたか。想像するのも恐ろしい。萌黄は改めて肌の粟立つ思いがした。

「あ、あ、あ」

柳瀬が廊下の奥で蚊の泣くような悲鳴を上げた。尻餅をついた彼の手にもライターの火があり、そのゆらめく光が奥のほうを照らしている。

萌黄もアッと叫んで棒立ちになった。後ろから覗き込んだ清香も息を飲んでいた。

廊下の隅。折り重なって倒れている男たち。命からがら、共に地下から脱出してきた人々。

そこはエアボールの外だった。萌黄はパワーを拡散し、エアの外に飛び出した。だがすぐに足を止めた。

誰ひとり、生きてはいなかった。

彼らをエアボールの中に取り込めなかったのは明らかだ。もしかしたら、エアボール自体が彼らを廊下の端に弾き飛ばしたのかもしれない。廊下の隅だったために、ミサイルの衝撃で破壊された壁材や柱などが彼らを直撃して――。

萌黄は無言で近き、仰向きに倒れている六道の手首をとった。生きていてほしいというはかない望みで脈をとろうとしたのだが、六道の腕はずるっと手首から千切れ

て床に落ちた。砂状化は無慈悲なほど早く進行していた。
（人並みはずれたパワーを持ったことに、うぬぼれていた？）

思いが去来したが、すぐに打ち消した。今さら考えてもしょうがない。

ハジメがクソツと喚いて、壁を拳で殴りつけた。

「俺は許さないぞ！ この世界のヴァーチャルを全て滅ぼしてやる！」

その時だった。反対の階段側から、カラン、コロンと硬い物が転がり落ちる音がした。

真っ先にハジメが反応した。彼は駆け出した。

「今度は手榴弾か？ ガス攻撃か？ 俺たちにそんなものが通用かよ！」

止める間もなかった。ハジメはエアシールドを盾にして、廊下の曲がり角まで突進した。

その足許に転がり出たのは、ソフトボールの球ほどの大きさの黒い球体だった。数にして三個。

「こんだけか？ 舐められたもんだな」

ハジメは苦笑すると、直径一メートルほどのエアボールをすかさずイメージし、黒い球体を丸ごと包み込んだ。爆発することを見越しての冷静で適切な処置だった。萌黄でもそうしただろう。

ハジメはその上でエアボールに強い外圧をかけた。球

体をエアボールごと押しつぶす気だ。

その時、球体が動いた。萌黄は彼の目に映ったものをアンテナを中継して見た。黒い球体の表面には無数の穴が開いていた。

「みんな、伏せて！」

萌黄は怒鳴った。そして六道の遺骸の影に倒れ込んだ。球体は光を発した。

光は八方へと伸びた。

エアボールはあくまでも空気の塊であり、光を阻むことはできなかった。

黒い球体は爆弾などではなく、リアルを無力化する光線を発する機械だったのだ。

萌黄たちは知る由もなかったが、球体は米軍が発射したミサイルの中に搭載されていたもので、落下着弾と共にこれらを吐き出した。球体はそのままWIBAへと侵入し、生体センサーによって萌黄たちの居場所を探知し、接近した。

そして、リアルに接触した球体は、本来の能力をフルに発揮した。表面に開いた穴からレンズを通して拡散した光は、忌まわしいほど黒い色を帯びていた。

「ア……ガ……ガ……」

とともに光を浴びたハジメは、身体を激しく震わせて、その場にどうつと倒れた。

萌黄の声に清香や炎少年らは素早く動き、ヴァーチャルの影に隠れて難を逃れた。黒い光はヴァーチャルには全くの無害だった。

ハジメを倒した三つの黒球は、しばらく辺りの様子を見かねてうかがっていたが、獲物を求めてボーリングの球のように、廊下をゴロゴロと転がり始めた。

驚いたことに、黒球は障害物に突き当たると、開いた穴から、しなやかで細長い足を出し、進行方向を変えたり、器用に後ろから踏ん張って、障害物を乗り越えたりした。

照射される黒い光線は、廊下や壁を間断なくなぞっていく。萌黄は六道の遺体の陰を静かに回り込んだ。黒球のセンサーは耳を持っている可能性を考えただからだ。

（何かで光を遮ることができたら）

しかし元々、間仕切りも什器もない廊下である。剥がれた壁が数枚落ちていただけで、どれもひどく歪んでいる。

雛田は、清香が下着の上に着ていた自分の上着を受け取ると、黒球の上に広げて被せようとしたが、その足を鞭のように伸ばして、上着を軽く振り払った。まるで凶

暴な爬虫類を思わせる動作に、萌黄は戦慄を覚えた。

念のために、圧縮した空気をぶつけてみた。黒球はそれ自体の重みと、タコのような足を床に突き刺して平然と耐えてみせた。

「どうしよう、萌黄さん」

雛田の背に隠れた清香が泣くような声で言った。

（そう言われても――）

胃がキュンと痛んだ。

自分なんか頼らんという！ そう叫びたかった。

萌黄は目を逸らし、肩越しに後方を見やった。柳瀬のライターの花火が左右に揺れ、それに合わせて壁が暗くなったり明るくなったりしている。

（あれは？）

ライターの火の向こうに、ドアの把手のようなものがきらめいた。

（部屋がある――どこかに通じてるかも！）

W I B Aの地下を男たちに追われて逃げていた時、あちこちの部屋はよく別の部屋や廊下へとつながっていた。あるいはあの扉の向こうにも逃げ道があるかもしれない。シュウがそばに寄ってきた。

「階段を誰か降りてくる」

言われてハッとした。確かに足音のようなものが聞こえる。いま米兵が来たらヴァーチャルたちも危ない。

「あそこに部屋があります。どこかにつながってるかもしれません」

萌黄は指さした。

シュウはすかさず立ち上がり、扉に向かって駆けていった。黒球がぴくりと反応する。やはりこいつらは耳だけでなく目も持っている。それでも前進スピードは極めて遅い。廊下に落ちた障害物をひとつひとつ乗り越えていくためだ。

仲間たちの現在位置を階段側から見ると、倒されたハジメ、黒球群、距離を置いて、雛田と清香と気絶している山寺、久保田と和久井、揣摩と炎少年、伊里江、萌黄、柳瀬、そしてシュウ。

萌黄は首を回して、使えそうな物を探し、当たりをつけた。

『みんな聴いて！』再びテレパシーを送る。『合図したら、廊下の奥の部屋までダッシュすんのよ！』

「黒い光は？」清香がすかさず問いかける。「あと、ハジメさんは？」

『まかせて！』

階段を下りる足音が消えた。フロアまで下り切ったようだ。時間がない。

もう一度、扉に目を転じる。柳瀬から受け取ったライターで扉の中を覗いていたシュウが「ダメだ」と首を

振った。

「この部屋は完全に行き止まりになってる」

萌黄は首を振って叫んだ。

「他に逃げ道はあらへんねんで！」

扉の向こうに、ここに這い上がってきた脱出口がある。またあの熱帯のような蒸し暑い場所に逃げる気はしない。それに今その脱出口は、男たちの半ば砂になった遺体に埋もれていたのだ。

萌黄は視線を前に戻した。黒い光はかなり接近していた。

と、その向こうにふたつの人影が現れた。暗くてもリアル・アイにはかろうじて見えた。米兵だ！ ちょうど曲がり角のところに。

しかし、皆に知らせようと張り上げかけた声が、喉元で凍りついた。

異形の兵士だった。人間には違いなかったが、薄手の宇宙服のようなものの中に入っている。

「マズい、パワードスーツだぞ！」

シュウの声に「あれが？」と萌黄が思う暇もなく、ふたつの人影はモーターの回転音を上げて近づいてきた。その動作は意外なほど軽快だった。

シュウの銃が火を噴いた。特殊な装甲は鈍い音を立てて銃弾を跳ね返した。

数年前、米軍に試験導入されたパワードスーツ。暗褐色のそれは、鍛え上げられた人間の能力を最大限に引き出す目的で開発された。とはいえ実物は予想以上の威力を発揮した。パワーも戦闘能力も生の人間の十倍。内蔵のコンピュータによつて状況を瞬時に分析し、いくつもの戦闘パターンを呈示する。一昔、二昔前にはSF小説やアニメではおなじみだったものが、現実に登場したのだ。

米軍は、黒球攻撃だけでは安心できず、リアル抹殺に完璧を期すため、できることを総動員させようという作戦なのだろう。萌黄は素人頭でそう考えた。

だが、実にマズい。これでは後ろの部屋まで移動できない。

ふたつのパワードスーツが、肩に取り付けられた銃の筒先こちらに向けた。

萌黄は右手の指を力いっぱいに広げると、急いで床に叩きつけた。

頭の中で、水面の波立つイメージを浮かべる。

ぐらり。たちまち床が波打った。

波は廊下の上を伝搬した。進むに連れて波の高さが大きくなり、三つの黒球が跳ね飛んだ。

床が上下に動くなど、想像できる者はいない。パワードスーツの米兵は意表を突かれ、ものの見事に転倒した。

萌黄は第二のイメージを宙に放った。壁際に落ちていた歪んだ壁パネルがふわりと飛ぶ。堅い壁パネルは見えない力によってさらに歪み、醜い袋状になって黒球に襲いかかった。

黒球は逃げようとしたが、パネルはそれより速く落下し、三つの球をすべて包み込まれてしまった。

廊下から黒い光が消えた。

「今のうちや！ みんな部屋まで駆けて！」

合図に全員が動いた。

萌黄はハジメを空気の担架に乗せ、空中を滑らせた。

伊里江は久保田が肩に担いだ。しかし、揣摩と雛田が山寺総理を引きずってきたのには驚かされた。

「人質だよ」

見送った萌黄は、階段側で米兵が起き上がるのを感じて、すぐにまた床を波立たせた。彼らはおそらく暗視カメラを付けている。こんな暗がりでもよく見えるだろう。ライターの火が走り去った廊下は、また一面の闇となっていた。これでは黒い光が復活しても気づかない。

パネルの中で黒球が暴れている。出てくるのにそう時間不要はいはずだ。

全員が扉にたどり着いたのをきっかけに、萌黄も腰を上げた。

「急げっ」

シュウがライターを持った手を、部屋の入口でぐるぐると回している。萌黄は火の下に向かってダイブした。

扉が閉じる直前、再び黒い光が廊下に差すのを見た。

「ギリギリセーフ！」

扉の向こうから、黒球の転がる音と、英語で何ごとか叫ぶ声が聞こえた。

揣摩たちが、手近にあつた事務机を扉の前に移動させ、二段に重ねた。パワードスーツの前には無力と判つていてもやらずにはいられなかったのだ。

「全員、いるか？」

シュウが点呼を取る。生存者で落伍者はいなかった。

横たわったハジメは、身体を縮こまらせ、ひくひくと顔面や手足の先を痙攣させていた。清香がその手を握ってパワーを送り込んでいる。

「どう、効きそう？」

萌黄の問いに、清香は判らないと首を振った。

部屋は典型的なオフィスだった。まだ真新しい事務机にツールが並んでいる。壁際には何も入っていない書庫が部屋のそこに並んでいる。何よりも重要なことは、どこにも別の部屋につながる扉はないということだった。

シュウや久保田らが壁を両手で叩いた。しかしピタピタと反響のない音がするばかりで、壁の向こうに別の空

間があるようには到底思えなかった。

天井を見上げる。小さな排気口が数カ所に配されている。とても大人の通れるような大きさではない。

（映画みたいに、あそこから逃げられたら）

思わず腰を上げようとした時、ハジメがぴくりと動いた。

「……しく……じったぜ」

口から泡を吹きながら、ハジメは悔しさとふがいなさに涙を流していた。

（これ以上は無理かも）

弱気が胸に広がっていく。するとそれをあざ笑うかのように、扉がドンツと強く叩かれた。

パワードスーツがすぐそこまで迫っていた。

「みんな、机の陰に隠れて！」

そう言うと、萌黄は一番扉に近い机のそばにしゃがみ込んだ。

扉が破られれば、あの黒い光が真っ先に差し込むはずだ。少しでも浴びればお終いである。

一瞬の勝負だ。せめて相撃ちを狙ってやる。

そう決めて、机の橋に手をかけた時、萌黄は突然、目眩を感じた。

（えっ、こんな時に持病が――）

あわてて伸ばした手が、机の角をつかみ損ねた。

転倒を避けようと萌黄はスツールの背もたれに手をついた。ところがスツールそのものが床を滑り出した。

「わわわ」

「ひゃひゃひゃ」

雛田や柳瀬も突然のことに声を裏返らせた。彼らの横をラックやシュレッダーが滑っていく。

（目眩やない！ でも――）

リアルパワーが自分の目眩を現実世界に呼び出したのか。荒唐無稽な発想が頭に浮かんだ。この世界では何が起きても不思議ではない。

だが、そうではないようだった。

扉の向こうで米兵が地上本部と連絡を取り合っていた。英語だが、兵士の心を通じて意図が読み取れた。

『何が起きたんだ！ —— W I B A が？ 傾き始めただとオ？』

耳を疑った。

W I B A は「揺れない」「沈まない」がトレードマークではなかったのか！

まるで遊園地のビックリハウスだった。

キャスターの付いたものに続いて、机や書棚が横滑り

を始めた。

ところが部屋はまだ傾き続けている。まるでダンブが積み荷を残らず振るい落としてしまおうとするかのよう

に。
床はやがて立っていられない角度に達した。萌黄は清香と炎少年に呼びかけ、再度、エアボールで仲間たちを包み込んだ。壁がギシギシとイヤな音を立てている。このままでは部屋自体が潰れかねない。それを心配したのだ。

すでに事務机やスツールは、部屋の一方に積み上げられた状態になっていた。皆は壁が崩れてくるのを恐れて、エアボールの中で身を寄せ合った。

ギシギシ、バリバリ、ドーンと、外からは物騒な音が際限なく聞こえてくる。部屋の明かりがライターの火だけというのも、さらに恐怖をかき立てた。

アー—ツと長い悲鳴が扉越しに聞こえた。米兵たちが廊下を滑り落ちたのだ。続けて、雪崩のように廊下をはじく音が通り過ぎ、ズシンと床が震えた。

萌黄は右手で顔を覆った。

それからどれほどの時間が経過したか。

周囲がようやく静けさを取り戻した頃、床の傾きは優に三十度を超えていた。

「俺、様子見てくる。ライター貸して」

炎少年がエアボールを飛び出した。小さな身体がスルスルと床を登っていく。

気をつけてと萌黄が言うと、

「子供扱いすんなよ」

とにべもない返事をよこした。

ドアノブに手をかけ、回し、手前に引く。廊下は依然として暗い。ライターの火がついた。少年は胸から上を廊下に突き出して明かりを左右上下に振った。

萌黄は目を閉じて、炎少年の視覚にダイブした。

弱々しい火に照らされた下方は、廊下の突き当たりだった。今は瓦礫の山と化していた。少年は上を見上げ、また底に目を落とした。米兵の姿も黒球の影も形もない。傾いた廊下を落ちてきたさまざまな物に飲み込まれたことは明らかだった。

(助かった……)

萌黄はエアボールの軟らかな底にへたり込んだ。当面の危機は去った。理由は判らないが、まさにグッドタイミングでWIBAが傾いてくれたのだ。奇跡としか言いようがない。

「大丈夫だ。奴らはいない」

炎少年が頭上から元気に報告すると、清香は顔を輝かせて、

「急いで逃げよう」

と言った。ハジメもどうか身体を起こせるまでに回復していた。

反対に、ヴァーチャルたちの疲れはピークに達していた。どの顔にも『ゆつくり休みたい』と書いてあった。

「米軍だつて今なら混乱してるんじゃないか？ ダーツと飛び出せば、きっと振り切れるよ」

炎少年の言葉に萌黄は頷いた。

「まあ、いつまでもこんな所にいるわけにはいかないが……」

シュウも同意しながら、仲間たちを振り返った。

山寺総理は今の騒ぎで目を覚ましていた。ハジメはよろよろと立てるまでに復活していたが、土気色の顔をした伊里江だけは、しゃべるのさえつらそうだった。

久保田たちは斜めになった床に背を着けて、ぐったりとしている。

この一行で、再び脱出に挑む。

（まるで頂上のない山を登ってるみたいや）

萌黄の素直な感想だった。

「私も連れて行くのか？」

シュウが山寺に手を差し出していた。

「ここにいと危険ですよ」

「放っておいてくれ、私は行かない」

「わがまま言いなさんな」久保田がズイと出た。「総理

には我々の人質となっていたたく」

「人質だと？」

「そうだ」揣摩も顔を精一杯気張らせる。「まさか米軍も、日本のトップに対してミサイルを打ち込んだりはしないだろう」

すると山寺は髭の下の口をかすかに歪めた。

「何を笑う！」

揣摩が気色ばむ。山寺はややあつて口を開いた。

「いや、甘いなと思ってな。本気でそう考えているのか？ さつきも見ただろう、SPらが私を残して去っていったのを。米軍の意思は、リアル殲滅が何より最優先だ。そのためにはVIPだろうが誰だろうが無関係だ。私を盾にしても、連中は迷わず私を蜂の巣にするだろう」

「そ——それでも、地上にはマスコミもたくさん集まってるはずだ。そいつらの前でそんなことができるか？」

「試してみればいい」

「……………」

揣摩と山寺はにらみ合ったまま、黙り込んだ。

「ちよつと、ええかな？」

口をはさんだのは萌黄だった。

「判ってるよ、急げって言うんだろ」

揣摩が手を振ってみせる。

「違うねん。総理のこと。——出口まで一緒に行ったら、後は放してあげよう」

「放すって、釈放するってことか？」

「うん」

「総理の命は俺たちが助けた。だから攻撃するな、なんて相手が考えてくれるとでも思ってるのか？」

「そやない」 萌黄は強く否定した。「総理を人質にしたら——わたしらもテロリストと同じレベルに堕ちてしまいうから……」

揣摩の顔がみるみる真っ赤になった。

「俺は！ ……俺は、死にたくないんだ！ それだけなんだ！」

揣摩は斜めになった床に腰を下ろした。

「大丈夫。わたしらが絶対に守ってあげるから」

「絶対なんて軽々しく言うなよな。地下から一緒に上がってきた男たちはどうなった？」

萌黄のまぶたに六道の顔が浮かぶ。返す言葉がなかった。

「俺はヴァーチャルだ。萌黄さんが殴っただけでも死にじまうかもしれない。そんなひ弱な生き物なんだ」

誰も口をはさまない。皆が揣摩の思いに耳を傾けている。

「だから——さ」 揣摩は少し表情を和らげて、「助かる

方策があれば、たとえ細くてもそれにすがりたいわけよ。でも……判ったよ。総理は人質にしない。いや、人質扱いはしない。それでいいんだろ？」

そう言つて背中を向けた。

萌黄は自分の無神経さに腹が立つた。大声で泣きたくなつた。

自分はやっぱりリアルだ。ヴァーチャルの立場になつて、ヴァーチャルの気持ちを理解することなど、本当にはできないのだろう。ここはリアルがいるべき場所では〈絶対〉にないのだ……。

《ワッ、なんだよ、お前！》

突然、素っ頓狂な声が張りつめた空気を割った。

全く聞き覚えのない声だった。

雛田があたふたと尻ポケットから携帯を取り出した。液晶画面を広げながら、部屋の奥へと移動していく。皆は、ああ携帯かという顔をした。

「なんでこんな時に騒ぐんだよ。丸聞こえじゃないか」

雛田が画面に小声で吠えると、ピンクのカバが大きな口をパクパクと動かした。確か、カバ松という名前が付けられていた。しかし人語がしゃべれたとは。

《ウイルスだ！ この変なのが、いきなり侵入してきやがつて》

《もえぎ……》

皆の顔をハッとさせた。萌黄はハッとするとどころか、腰を抜かすほど驚いていた。

声の主は明らかに、モジだった。

気づくと萌黄は雛田の手から携帯をもぎ取っていた。

3D画面には、迷惑そうな表情で縮こまっているカバをよそに、モジが緑色のゴツゴツした身体をうれしげに震わせていた。

《おひさやのお》

「アンタ……」言葉が喉に詰まってなかなか出てこない。

「ど、どうして？」

《ビックリした？ こっちもやで。原因はW I B Aが傾いたせいや。おかげで最下層が電波の届く範囲まで持ち上がってくれてな。ほんでチャンスやー思てダッシュで飛び出してきたんや。そしたら運良くここにジャンプできたってわけや》

モジは得意げに宙返りした。

《俺は運が悪いぜ》

カバ松が横でぼつりとぼやいた。

22

萌黄は湧き上がる涙越しにモジを見た。まさかまた会えるとは想像もしていなかったからだ。

《エンジェル・フオールを作った時に、湖水が結構よけいなところに流れ込んでたらしいわ。おかげでWIBAはかなり不安定になって湖上を漂ってたみたいやね。その上、局所的に大きな衝撃を受けたおかげで、浅瀬に乗り上げてしもた、そういうことらしいわ》

「地下の一番深いところにいてた割には、事態がよう飲み込めてるんやね」

《モニター装置があつたからなあ。ほんでも、衝撃の理由が米軍のミサイルやったとは思ひもせなんだ。米軍は自分で自分の墓穴を掘りよつたんやな》

普通、P A Iが他の携帯に移動することはできない。モジにそれができたのは、メモリの中に消え残っていたギドラの断片を掻き集め、組み合わせたからだという。いわば無人島から脱出するのに、木を伐つてイカダを作ったようなものだ。

「萌黄さん、行くぞ」シュウが催促した。

「待って」萌黄は手を挙げた。そして引き締めた表情になると、「なあ、モジ。アンタが見てたモニターには、どんな情報が映つとつたん？」

《そら、いろいろやで》

「米軍の配備状況とか」

《地上は無理。最下層以外を管理してたP A Iは、全部初期化されてしもたやんか。そやからギドラも上の階

には移動でけへんかったやろ?》

萌黄は肩を落とした。すると目の前にスツと手が伸びてきた。

「初期化をおこなったのは、この私だ」シュウはにやりと笑うと、「P A I にかけてセキュリティを解除するパスワード、それが知りたいんじゃないのか?」

「お、お願いします」

萌黄は携帯をシュウに渡した。シュウはキーを英文字モードに切り替え、タタタと三十個ほどの文字を打ち込んだ。

「どうぞ」

萌黄は受け取ると、

「モジ、これで他の階に侵入してきて。それでW I B A のまわりを探ってみて」

《息つく暇もないの》

言いつつ、語尾が消えるのと同時にモジの姿も消えた。「うまくいけばいいのだが」

萌黄は頷いた。その頃には全員が萌黄を取り囲んで、成り行きを見守っていた。

《ただいま》

わずか数十秒後、モジは帰ってきた。

「どうやった?」

モジは威張るように胸を突き出すと、

《W I B Aの全カメラをチェックしてみたで。三分の二は問題なく作動しよったわ。ほいで敵の様子やけど、だいたい判ったで。敵さんは、かなり混乱してるみたいやけど》

萌黄は満足して微笑んだ。やはり自慢のP A Iだけのことはある。

「わたしら、これからW I B Aを脱出するねん。きっちりサポートしてな」

《ほー、こら、オモロなってきたな》

「アホ！」

萌黄と清香が協力して作ったエアボールが、仲間たちを乗せ、斜めになった廊下をぐんぐん上昇していく。

午後九時――。

ついに彼らは、地上へとつながる排気筒の横に出た。

とはいえ排気筒もそこを登る梯子も、先のミサイル攻撃によつて激しく破壊され、見る影もなく変形していた。

モジの報告によると、現在、W I B Aの周囲には、何一つ動くものの姿はないとのことだった。

「いよいよ、核攻撃か」

ハジメは言うど、手のひらをぎゅっと握った。

萌黄が先頭に立って瓦礫の上を這い上がり、地上に顔を出してみた。辺りの様子をそつとうかがう。

外は真昼のように明るかった。おびただしい数の投光器が強烈な光を投げかけている。崩れたビルや剥き出しになった鉄骨がいびつな陰影を作っている。それが映画やニュースで見たどこかの戦場を思い出させた。

しかしそんな風景も、ついさっきの驚きに比べれば、物の数ではなかった。

短いあいだに萌黄は二度仰天されられたのだ。

ひとつ目は、モジとカバ松によつて。

モジは、例のパワードスーツの米兵が、本部と連絡を取り合ったレシーバーがまだ活着していると言うのだ。そして最前から着信する声が「生きていたら、急ぎ退却しろ。核ミサイルが発射されることになった」と訴え続けているらしい。おそらく生体反応を示す装置が故障して、本部には米兵の生死が確認できないのだろうとシユウは言った。

すると、それまで黙っていたピンクのカバ松が、アツと驚く提案をしてのけたのだ。

《俺が代返しようか？》

代返。つまり、亡くなった米兵に成り済まし、代わりに応答しようというのだ。

言われて皆は判断に窮した。ところが雛田は彼らの態度を勘違いしたようで、おずおずと進み出ると、

「可能だと思います。実はコイツ、カゲの生前に何度か

彼に成り済まして仕事を手伝ったことがあるらしいんです。実際、僕だって騙されたことがあるくらいですから」

そりゃあ、ますますオモロそ〜と喜んだのは、モジだった。カバ松の声をレシーバーに転送するのは簡単だし、マイクを通じてだから、声の違いは気づかれないとまで断言した。

《——現在——W I B Aより撤退中——現状はどうなってる》

『生きていたか！ 急げ。核ミサイルの発射が決定された。できるなら、一刻も早くそこを離れろ』

本部の人間は、カバ松を米兵と思ってくれたようだ。

《——止めることは——できないのか？》

通信状況の悪さまで巧みに演じている。萌黄は気づいていた。カバ松の声や話し振りは、あの影松豊に生き写しだった。カバ松が最初に声を発した時、清香が驚愕の表情を浮かべたのを萌黄は見逃さなかった。

『……無理だ。決断は既に下されたのだ』

相手は無念そうに言った。米兵は彼の友達だったのかもしれない。

《——着弾の予定時刻は？》

『日本時間で、午後九時五分だ！』

ぞつとした。時刻はその時点で八時五十五分。いくら

エアボールでも、仲間全員を乗せれば逃げれば、当然動きは鈍くなる。とても安全圏外まで運ぶのは困難だ。

「となると、俺の作戦に耳を貸すしかないな」

ハジメは暗い目を光らせ、自ら考えた作戦を披瀝した。それはさらに皆を仰天させるような内容だった。

その作戦とは……。

——萌黄は雛田から預かった携帯をかざして、現在時間をハジメに示した。

九時一分。

悪魔の槍が天から降ってくるまで、あと四分。

「いよいよね」

清香が両手を萌黄の肩に乗せた。脇には炎少年もいる。伊里江を除く四人のリアルがそろい踏みだ。

「そんなじゃ、行きますか」

まるで遊びにでも行くようにハジメが言うと、それを合図に四人は地面を蹴り、空高く舞い上がった。

ハジメのぶち上げた作戦とは、リアルパワーでミサイルを受け止めようという、とてつもないものだった。

そんなことが果たして可能なのか。リアルパワーにそれほど威力があるのか、萌黄には判断できなかった。もちろんハジメも勝算なんてないと言い放った。

「敵に一泡吹かせられれば、それでいいのさ」

萌黄にはとてもそんな風には考えられなかった。核ミサイルが自分を狙って飛来する。そんな経験を一生のうちにするなんて、誰が思いつくだろう。

数分後にはそれが現実になる。するとどうなるのか。

W I B Aは粉々になって消滅するだろう。琵琶湖の水は蒸発してしまうのか？ 放射能で汚染されて、関西の人は水飢饉に陥るのか？ それとも関西全域が吹っ飛んでしまうのか？

いずれにせよ、相当の死者が出るはずだ。

萌黄がハジメの作戦に乗ったのは、それが理由だった。ヒロインになりたいわけじゃないし、本当は今すぐ逃げ出したい。それでも……。

筵潟教授の奥さん、和歌山加太の旅館の女将さん、その他、この世界で触れ合った人々の顔を思い出すと、ミサイルに立ち向かうのが、自分の使命のような気がしてくるのだ――。

W I B Aが遙か下で小さくなった。

月の光に照らされて、湖水が遠くできらめいている。

さらに高度を上げると、琵琶湖の形が眺められた。地図帳で見たのとは正反対の形をしているが。

「そろそろだよな」

炎少年が萌黄を見上げた。つないだ手がひどく汗ばんでいた。

キューイン。

突然だった。

頭の中から足の爪先へと鋭い痛みが走った。

ついに来た！

目視ではまだ捉えられない。あくまで萌黄の直感だった。

緊張は全員にすぐ伝わった。

（チャンスは一度だけ！）

四人は一斉に宙返りすると、地面に向かって落下し始めた。

23

右も左も真っ暗なのに、ミサイルが接近してくるのが肌に焼き付くような感触をともなって伝わってきた。

雷のように空気を切り裂き、猛スピードで飛来する最終兵器。

（そんなものを受け止めるやなんてムチャクチャやわ）
萌黄は苦笑すると、すぐにその口許を引き締めた。

落下速度をさらに上げる。風切り音で耳が痛い。

ハジメと清香が離れていった。炎少年もつないでいた手を解いた。彼にとっては初めての飛行だった。それでも一生懸命にリアルパワーを発しながら、萌黄たちに遅

れまいと懸命に泳いでいる。

核ミサイルは、四人が作る輪の中に、徐行運転の電車のように緩い速度で舞い降りてきた。

いま、おそらく一秒が数百倍に引き延ばされているはずだ。萌黄は胸に銃弾を浴びた時のことを思い出した。核ミサイル。巨大な銃弾。それがW I B A目がけて真っ逆さまに落ちていく。

四人の張ったエアクッションがミサイルの先端を包み込んだ。萌黄の身体がぐいつと引っ張られる。明らかに力負けしている。落下を食い止めるには百人分のリアルパワーが必要だ。

野球のボールを受け止めるようにはいかない。それは最初から承知していた。萌黄はエアクッションを渾身の力で手前に引っ張った。離れたところで炎少年も同じことを試みていた。陰になって見えないが、ハジメと清香は自分たちと逆に、クッションを力いっぱい押しているはずだ。

『方向を変えればいいんだ』

ハジメは雑作もないという口振りでそう言った。それならできるかもしれないと思ったからこそ萌黄は賛成した。ミサイルの侵入角度を、ほんの少し傾けるだけでいい。そうすればW I B Aには命中しない。

『もし起爆装置にタイマーや高度が設定されていたら、

まったく意味ないけどな』

不安と緊張がいやが上にも高まる。それに連れてパワーが下がっていく。萌黄はあわててパワーコントロールに神経を集中した。不安や緊張はパワーの大敵なのだ。湖面が迫ってくる。WIBAはどこ？

目を走らせる。

あった！ この距離だとごつごつした岩にしか見えな
いが、進行方向からは、わずかにズレている。

成功だ！

それでも気を抜くことなくさらにパワーを注ぎ込む。
今やミサイルはカーブを描きつつあった。

命中するのか？ 逸れるのか？

残された者たちは、排気筒の縁に両手を支えながら、
ずっと空に視線を注いでいた。

「来た！」

シュウが叫ぶのと、ミサイルが落下するのが、ほぼ同
時だった。

さざ波の一つひとつまで、はつきり見える——頭の隅
でそう思った瞬間、衝撃と共に、萌黄の周囲が湖水で満
ち満ちた。

気泡が月の光を星屑のように乱反射させた。

ミサイルはW I B Aを外れたが、依然として水中を突き進んでいる。タイマーも高度も設定されていなかったらしいが、このまま湖底や岸壁に激突すれば、やはり爆発は起こるだろう。それがどのくらいの規模なのか、どれくらいの被害を出すのか、萌黄には見当もつかなかった。

引き攣るような悲鳴がアンテナにかかった。顔を左に向けると、そこにいた炎少年の姿がない。流されたのだ。(清香さん、お願い、炎君を！ それからW I B Aのみんなを！)

了解と応える声が萌黄の脳内に響き、清香が離れていくのが判った。清香のパワーは、着水直後に比べ、がくんと落ちていた。恐怖がパワーの出口を塞いでしまったらしい。

そうだ。こんなこと、普通は怖がって当然だ。

(わたしはコワないんやろか)

頬を水が打った。集中力に隙ができたせいだ。萌黄は頭の中から邪念を振り払った。そしてハジメのいるほうへと、ミサイルの上を移動し始めた。

ハジメはセミのようにミサイルの曲面にしがみついていた。彼の集中力も底を尽きかけていた。

「もう一度——空中へ」

ハジメは轟音の中、唇を大げさに動かして、自分の考

えを伝えようとした。しかし萌黄は彼の思考を直接読むことができる。彼女はハジメの意図を瞬時にして、しかも完全に理解した。

右手指でOKの印を示す。

ふたりはリアルパワーの有効範囲を、弾頭全体から下側へと移動させ、さらに焦点を胴体の一点に集中させた。ミサイルは再び上昇を始めた。

ザツという音と共に、周囲から水が消えた。するとすぐ目の前に白くそびえ立つものが立ち塞がった。間一髪で萌黄はパワーを操り、ミサイルの衝突を回避した。

振り返ってみると、それは海岸べりに建てられたホテルかマンションらしかった。ほっと胸を撫で下ろす。

ミサイルはどんどん空を駆け上っていく。

下界を見下ろすと琵琶湖大橋が横たわっていた。点々と灯されたライトが飛ぶように遠ざかっていく。

「南のほうに出たみたいやね！」

萌黄が叫ぶと、ハジメは疲れた顔を向けた。

「少しだけ左に！ 名古屋港は南東だからな」

「違う違う。この世界では南東は右やで」

「そうだった」

パワーを調節し、弾頭の向きを右へと修正する。

眼下を黒々とした山並みが次々と過ぎていった。

ハジメの計画。それは、撃った本人にミサイルを返そ

うというものだった。W I B Aでカバ松が米兵から聞き出したところによれば、発射したイージス艦は名古屋港の沖合いに停泊中だという。

それでは報復攻撃になつてしまう。萌黄は異を唱えかけたが、ハジメの考えを百パーセント読み取った後、賛成するしかないと判断した。

（最初の一撃が我々によつて妨害されたと知ったら、敵は必ず二発目、三発目を撃ってくる。ヴァーチャルたちを救うには、おおもとのイージス艦を沈黙させるしかない）

萌黄はしばし考えた後、これ以上ない真剣な顔をハジメに向けた。

「なあ、お願いなんやけど」

街明かりが見えた。萌黄は頭の中で日本地図をひっくり返した。間違いない、名古屋だ。

ふたりは沖合いの明かりをリアル・アイで探索した。燃料が切れたらしく、すでにミサイルの推進力は失われており、慣性とリアルパワーによつてここまで運ばれていた。

「あれじゃないか？」

ハジメが指さした。まだ遙か遠くだが、目を凝らすと、暗い中に横たわる船に混じつて、船体に米兵から聞いた

名前の書かれた船があった。

「おっと、迎撃してくるぞ」

イージス艦の前甲板にある砲塔がこちらを向いた。続いてドンと発砲音。しかしリアルパワーの敵ではない。攻撃を跳ね返してミサイルは突き進む。

萌黄のアンテナを通して、イージス艦の混乱する様子が伝わってきた。まさかりアルが核ミサイルを手土産に訪問してくるとは想像もしていなかったろうから。

「いいか？」ハジメがたずねる。

「ええよ」萌黄は答えた。

核ミサイルは、まっしぐらにイージス艦に向かって突入した。

24

萌黄は念を押すように、ハジメの目をじっと見つめた。ハジメの心中には不満の火がくすぶっていた。彼は最初、ミサイルをイージス艦にぶつけ、周囲に停泊している米海軍の艦船もろとも核の餌食にするつもりでいた。

萌黄はそれに対して、「お願い」という言葉で反対の意思をぶつけた。米艦船がいる海域は、名古屋にあまりにも近すぎる。核爆発を起こせば、一般市民も巻き添えにするのではないか？

ハジメがヴァーチャルの命を軽んじている傾向は、少し前から勘づいていた。どうせ二週間前に複製された存在じゃないか。そんな考えが彼の中にはあったのだ。それでも一抹の罪悪感は抱いていたのだろう。萌黄が強く目で訴えると、しぶしぶ了承した。

ミサイルは爆発させない、と。

ハジメは尖らせていた唇を丸め、眉を寄せると、新たなパワーを弾頭の先端に集中させた。萌黄も続いて自分のパワーをハジメのものと合体させた。

先端に今までにはなかった空気の渦が発生した。渦は先導するように、ミサイルをイージス艦へと一直線に連れていく。ふたりのパワーを吸収した渦。『エアドリル』。萌黄は心の中で緊急命名した。

着弾の衝撃波がふたりを襲った。

ミサイルは見事イージス艦に、銚^{もり}のように突き刺さっていた。爆発しなかったのは、エアドリルというキャップと、ミサイル全体を包んだエアクッションのおかげだ。萌黄とハジメは、激突の直前にミサイルを離れていた。イージス艦がしだいに傾いていく。あちこちで煙や火が上がって、乗組員たちが次々と海に飛び込んでいた。考えうる最小限度の被害か。そうであってほしい。

「なんとかうまくいったね——」

萌黄はハジメを振り向いたが、言葉を途中で途切らせ

た。ハジメは空中で静止したまま、奇態なポーズをとっていた。

別の艦艇が浴びせる探照灯の光に浮き上がったそれは……。

（雛田さんの〈電話ですー〉やん！）

ハジメはぐるんと身体を回転させた。すると今まで風いでいた海面が突如として沸騰したように揺れ始めた。そして波は自然には起こりえない規模のうねりとなって、周囲にいた米艦船を片っ端から飲み込んだ。

（——やっぱりハジメさんは、リアルパワーを発散する方法を会得してたんか！）

彼は今それを地震ではなく、海に大波を起こすために使ったのだ。

まるで風呂に浮かべたオモチャの船のように、空母も巡洋艦も一隻また一隻と転覆していく。

萌黄はただ呆然と眺めているしかなかった。

（これがリアルのか？）

（奴らは悪魔だ！）

（俺たちは奴らに滅ぼされるんだ！）

恐慌を来した米兵たちの思考が、萌黄の脳内で炸裂した。耳を押さえても、男たちの声が怒号となって、後から後から聞こえてくる。

萌黄は身体を倒し、ハジメのそばに滑り降りると、彼

の胴体にしがみついた。

「おい、間違えるなよ、俺は味方だ！」

「もうお終い！ 帰るよ」

萌黄は叫んだつもりだったが、渴いた喉が発したのはかすれた声だけだった。

下界には一面の暗闇が広がっている。海面ではない。そこは三重県と滋賀県の県境にある山々が南北に連なっていたのだった。

疲労と空腹と睡魔が萌黄の身体を重くしていた。重いのはそれだけではない。彼女の背中にはハジメがいた。

ハジメは米軍との戦闘で精根尽き果てたのか、海岸にたどり着いた頃、意識を失ってしまった。しかたなく萌黄は自分より大きな彼をおぶってここまで逃げてきた。

幸い、追っ手の姿はなかった。それが安堵感を生んだのだろう、川沿いにキャンプ場を発見した時、萌黄はフラフラと高度を下げて接近した。樹々を縫って低空を飛んでいると、バンガローやロッジが目に見えび込んできた。（もう限界。ちよつと休憩させて）

転ぶように一軒の軒先に着地した。どうにか玄関口にたどり着き、チャイムを何度か鳴らしたが返事はない。ドアノブを回すと施錠されている。

ハジメを半ば引きずりながら、横手に回ってみた。ア

ルミサッシのガラス越しに畳が見えた。萌黄はサッシに手を触れ、パワーで回転錠を動かした。サッシが開くやいなや、靴を脱ぐのもどかしく、そのまま畳の上に倒れ込んだ。

（清香さんらはどうしたやろ。みんなも無事に逃げられたかな……）

不安と気がかりに、閉じかけたまぶたがゆるると持ち上がった。しかし睡魔に抗することは難しく、まばたきするつもりで閉じた目を、再度開くことはできなかった。

光が差している。

見上げた空は、一面の雲に覆われていた。そこにわずかな隙間があつて、白く強烈な光が地面に向かって伸びていた。

白壁の斜塔。萌黄は光に対して、そんな印象を抱いた。よく見ると光はゆるやかに動いていた。理由はすぐに判った。雲が移動しているせいだ。

たれ込めた雲にできた切れ目はそこだけだった。萌黄は土手を駆け下りた。地面がぬかるんで何度も足を取られた。

近づくのにたつぷりと時間を要したが、光は消えることなく、萌黄の到着を気長に待っていた。

手を差し出す。光はそうされるのを待っていたように、温もりで両手の平を包み込む。萌黄は息を飲んだ。失ったはずの左腕がそこにはあった。右腕と並んで天から降り注ぐ陽光を浴び、地面にくっきりと二本の影を作っていた。

前に進み出てみる。つむじや肩がほつこりと温くなる。陽光にはにおいがあつた。懐かしいにおいだった。目を空に向ける。光の源をまともに見上げた。それでも眩しくはなかった。耳を澄ませると、遙か天上から何か聞こえてきた。

（萌黄）

（萌黄さん）

自分の名前だった。誰かが呼んでいるのだ。目を細めてみるが、声の主は確認できない。

（もくえくぎく）

これは判った。モジだ。

あそこまで飛んでみようか。

萌黄は腰を屈めた。

その時だった。多少ぬかるんでいた地面が、萌黄の両足を引きずり込んだのだ。

と同時に、光が急速にすばまり、数秒と経たないうちに、斜塔は跡形もなく消えてしまった。見上げた空は墨を塗ったように黒くなっていた。

ぬかるみはいつの間にか膝まで達していた。もがいてもつかまるものすらない。萌黄は両腕を振り回した。助けてと大声で叫んだ。

「寝ぼけるなよ、おい！」

頭上で乱暴な声が言った。

萌黄は目を覚ました。目の前にグレイのTシャツを着た男が、萌黄にのしかかろうとしていた。彼女はめったやたらに手を振り回し、相手の肩や頭を殴りつけた。

「俺だ、俺だつてばよ！」

ハジメだった。ようやく気づいて振り上げた手を下ろした萌黄に、ハジメは何か柔らかいものを投げつけた。

「それ着ろよ」

モスグリーンの無地のTシャツだった。萌黄は自分が上半身ブラ一枚でいたことをやっと思ひ出した。

急いで首を突っ込む。サイズはピッタリだ。感謝の目を向けると、ハジメはサッシ戸を開いて靴を履き、地面へと降りていた。上向いた顔は空をじっと見つめている。萌黄も戸に手をかけて、同じ方向に目をやった。

「きれいだな」

山稜から太陽が顔を出す直前。これから始まる一日への期待と不安。そんなものが渾然一体となって作り上げた風景のようだ。

でも何を期待するといふのか。こんな世界の中で。

ハジメがしゃがみ込み、落ちていた一枚の葉をつまんだ。

「こつちの世界に来てから気づいたんだけど……俺って、意外と自然が好きみたい」

「ん……」

ハジメは葉っぱを顔の上にかざした。

「これもヴァーチャルなんだな。左右が逆になってもこの世界ではきちんと光合成やってるんだな」

朝の冷たい風が頬を撫でる。葉っぱがハジメの手を離れて飛んでいった。

「齋藤のジイさんに初めて会ったのは、京都のお寺の庭だった。もう一面むせ返るような緑だよ。ジイさん、その中に、ぽつんと仙人気取りで座ってやがった」

ハジメの手が尻ポケットから、髪の毛の束をつかみ出した。齋藤老人の遺髪だ。中央でぎゅつと結ばれている。「ジイさん、言っただ。この世界は『ジャメ・ヴユ』だって」

「ジャメ……ヴユ」

「『デジャ・ヴユ』ってあるだろ。その反対語で、見慣れた物なのに、ある日突然、あれっ違うぞって思うことだって」

「このヴァーチャル世界が『ジャメ・ヴユ』……」

「フランス語らしいぜ。なんで外人はこんな舌を噛みそうな言葉を好き好んで使うんだろ。やっぱ肉ばっか食ってるせいかな。自分の舌との区別がつかなくなって——ンン、何だ？」

ハジメは山稜を背にして立ち上がった。視線は西を向いている。

「アレ、何だと思う？」

萌黄も靴を引っ掛けて外へ出た。

ハジメは木々の間を指さしている。

指の遥か先では、空の上から一条の光が差していた。

「あっちは京都だろ」

萌黄は光の筋をたどった。しかし光源となるものが見当たらない。太陽はまだ山の向こうだ。そして快晴の上空には雲ひとつない。光は空の一点から突然現れ、真っ直ぐに光の塔となって降り注いでいた。

（塔——！）

「これと同じ光景、夢の中で見たわ」

ハジメが振り向く。目を大きく見開いている。

「たくさんの人の呼ぶ声も聞こえた。すごく切実な気持ちのこもった声で……」

萌黄の胸は騒いだ。清香らのことが気になった。すぐに目を閉じて、アンテナを翼のように広げてみた。

（清香さん！ 清香さん！）

心の中で、大声で呼びかける。

すると返事はすぐにあった。

(……萌黄さん！ どこ？)

(三重と滋賀のあいだにある山の中。米軍をやっつけて、ここまで逃げてきた。そっちは？)

(ごめんなさい。捕まってしまったの)

背中を戦慄が走った。清香が続ける。

(あれから炎君とみんなのところに戻ったの。すぐに全員を連れてWIBAを離れたわ。エアボールに入って水中をね。いったんはうまく逃げられたと思ったんだけど、眠っているあいだに囲まれてしまつて……)

彼女も疲労困憊だったはずだ。萌黄は同情した。

(今どんな状況ですか？)

(わたしと炎君は例の黒い光線を浴びせられて、まったく動けなくされたわ)

やられた。おそらく敵はあらゆるケースを想定して、

琵琶湖の周囲を警戒していたに違いない。

(身動きできへんねんね)

(うん、トレーラーに投げ入れられて、床に寝そべってる)

どうするつもりなんだろう。萌黄は咳き込むように訊ねた。

(トレーラーがどこに向かつてるか、判りますか？)

（全然。……でもね、運転手に見覚えがあつたの。京都工大で見た、山上って人だった）

25

山上。亡き野宮助教授に山中、山下らといっしょくたにされていた研究員だ。やはり――

「やつぱりエネ研か……」

「エネ研だと？」

萌黄の独り言をハジメが聞き咎めた。^{とが}萌黄は頷いて、テレパシーで交わした清香の話を伝えた。十六歳の青年は烈火のごとく怒りを爆発させた。

「奴らは俺たちリアルを研究材料としか考えてないんだろう。ふざけやがって！」

拳がうなりを上げて、そばにあつた大木に襲いかかった。大木は殴られた部分から小枝のようにぼきりと折れた。

「行こう！ 助けに」

ハジメは急かすと、早くも宙に浮いていた。萌黄はその後が続くと、思い出したように声をかけた。

「Tシャツ、ありがとうね」

「盗んだんだぞ」

「そっか」

「降りろ」

命令されて幌付きの輸送車を降りた雛田は、離れたところに停車したトレーラーに駆け寄ろうとした。彼の両手は背中で手錠をかけられていた。

「どこへ行く」

雛田の前に大柄の男が立ち塞がった。米兵だ。ここま
で雛田たちを運んだ車輛も明らかに米軍のものだった。

「どこって、娘のところだ」

「君たちには歩き回る自由はない」

そう言うのと、肩に下げた銃口を雛田の肩口に向けた。

日本語が流暢なだけに不気味である。手を挙げて引き下がるしかない。

輸送車から続いてシュウや久保田らが降りてきた。

「またここに戻ってきたか」

彼らが護送されたのは京都工大だった。ヴァーチャルたちを乗せた輸送車は通常の駐車場に止まったが、堅固そうなトレーラーだけは、ずっと奥に見えるエネ研に横付けされた。トレーラーには清香、炎少年、伊里江の三名が乗せられていた。

「リアルを早いとこ処分するつもりだな」

「処分なんて言うなよ」

雛田がシュウに食ってかかった。

「すまん」

「……清香は殺させん。俺が命に代えても助けてやる」
雛田はシュウの襟をつかんだまま、顔をトレーラーに向けた。遠目に担架が三つ、エネ研の中に運び込まれていく。

久保田が背後からシュウに身体を寄せた。

「なあ、妙だと思わんか」

「米軍のことか？」

「そうだ。奴らが我が物顔でここに入出入りするなんて、どう考えてもおかしい」

「取り引きがあつたんじゃないかな」

「取り引き——」

「何らかの、な」

米兵が久保田たちの背中を小突いた。

「お前たちは、こちらだ。ついてこい」

ヴァーチャルたちは銃口を突き付けられたまま、別の建物へと歩かされた。そこは以前、萌黄たちが軟禁された建物だった。他の建物はリアルたちの脱走の際に起きた地震によって崩れたり傾いたりしていたが、固い地盤に救われたその建物だけがほとんど無傷で生き残っていたのだ。

五階に到着し、シュウ、久保田、揣摩、柳瀬、和久井はひとり一室ずつに分けて押し込められた。これでは逃

げ出す相談もできない。

久保田は部屋に入ると、すぐに窓を開いて、東の空に目をやった。

（きつと萌黄さんは来る。きつと来る）

その頃、萌黄とハジメはすでに京都に侵入し、清水寺のあの有名な〈舞台〉の下に潜んでいた。

京都工大まで、ここからだと言と鼻の先だ。

「そんなことがあったのか……」

ハジメは大いに驚き、憤り、舞台を支える柱を殴ろうとした。萌黄はあわてて制止した。たとえヴァーチャルでも、ここは世界遺産だ。

驚くのも無理はなかった。ハジメが聞かされたのは、山寺総理から萌黄が読み取った話だった。もちろん心を読み取る能力については少しも触れず、総理は裏切られたと知って動転し、思わず自分に向かって小声で暴露したのだと苦しい嘘を追加した。

ハジメは丸ごと信用した。

「エネ研と米軍が結託してたなんて……これだから、オトナっていう生き物は——」

右の拳を左の手の平に打ちつける。

ふいに、萌黄の中に鮮烈な光景が流れ込んできた。ハジメの思考だった。

狭い部屋の中で食卓を囲む風景。中年夫婦、そして高校生くらいの男の子と女の子がひとりずつ。夫婦の子どもたちだろう。男の子はハジメに似ていた。女の子にもハジメの面影があり、なかなかの器量良しだ。

夫婦は時折こちらに笑顔を向けてくる。家族団欒。しかし彼らはハジメの本当の家族ではなかった。ハジメは両親を事故で失い、彼ら親戚夫婦に引き取られていたのだ。子供らはハジメに話しかけるどころか視線を向けようともしない。良好な関係を築いてはいなかったらしい。部屋はかなり狭そうだ。文化住宅と呼ばれるものかもしれない。何となく『昭和』のおいがした。

場面が変わる。ふすまのあいだから一家の主が髪あるじの薄くなつた頭を何度も畳にこすりつけているのが見えた。彼の前であぐらをかいて座布団に座る男が、貸した金をネチネチとした声で催促していた。主は数日の猶予を頼んでいる。ハジメにとって見飽きた光景だった。主は機械部品を作る小さな町工場の社長だった。ハジメは放課後学校から戻ると、毎日その工場でバイトとして働いていた。

主の娘が不用意に部屋に入ってきた。男は娘を見て、何ごとか言い放った。主があわてた顔で、男に向かって両手を合わせる。男は笑いながら主の頬を張った。娘は硬直したまま動けない。男のにやけた口が動いた。こん

な上玉を隠していたとはな。

娘は泣き顔になつて、ふすまの向こうに逃げ込んだ。男が立ち上がる。待ちなさい、お父さんを助けたくはないのかい？ おじさんの話を聞いておくれ。悪い話じゃない。キミに紹介したい仕事があるんだ。

男の前に主の息子が仁王立ちした。両手で包丁を握っている。息子は男に向かつて真つ直ぐに突進した。男は腹を押さえて崩れ落ちる。呆然とする主。冷たい目で男を見おろす息子。

また場面が変わつた。主の涙にまみれた顔がこちらに向かつて何ごとか訴えている。主はこう言つていた。

ハジメ。お前がやったことにしてくれ。息子を助けてやってくれ。あの男は死んじやいない。ほんのかすり傷だ。それにお前は未成年だから決して罪は重くならない。私が腕のいい弁護士を付けてやる。だから頼む。このとおりだ。それにな、お前が刑期を果たして無事戻つてきたら、娘を嫁にやろう。どうだ？ お前が娘に気があるのは前々から知つていた。だから、な、悪い話じやあるまい？

ハジメは血まみれの包丁を握つた。パトカーと救急車がやってきてハジメは手錠をかけられた。

裁判が始まつた。ハジメについた弁護士は事務的で、全く頼りにならなかつた。面会に来た主は、金がなくて

いい弁護士を雇えなかったとしきりに謝った。しかし主が面会に来たのは一度だけだった。ハジメは刑に服した。ある日、塀の中でハジメは刺された男の部下だというチンピラに出会った。チンピラは、主の会社はある機械部品がヒットしたせいで、今や飛ぶ取り落とす勢いだという。さらに娘を犯罪者の嫁にやるわけなろうと妙な噂を否定し、玉の輿狙いで、今じゃ娘の許嫁探しに奔走しているのだという。

「お前の弁護士は国選だったんだぜ。アイツは自分の懐を一円たりとも痛めちゃいないさ」

ハジメの心は、やり場のない憤りで満ちあふれた。

ある日ハジメは自分の周囲の光景がひっくり返ったことを知った。と同時に、不思議な力を身につけたことも。数日後、ハジメはネット広告を見た。萌黄たちが流したものだ。彼はこの世界に仲間がいることを知った。

ハジメは脱走した。理由はふたつあった。ひとつはリアルについてもっとよく知るために。もうひとつは――育ての親である主の考えを糾すために。

ところが。

気まぐれで立ち寄った寺の緑深い庭で、変わった老人に出くわした。

それがビッグジョーク齋藤こと齋藤道節だった――。

「聞ってるのか？ 萌黄さん」

我に返った。するとハジメが面食らった顔をしていた。
「なんだよ、なに泣いてんだよ？ どつか痛むのか？」
萌黄は打ちのめされていた。ハジメを襲った不当な事件の一部始終に、抑えられないほど身体がわなないた。
（あなたは犯罪者なんかやなかった。そやのに……）
目が開けられない。開けると涙が止まらなくなる。

「うん——そう——左腕がちよつと」

適当にごまかすと、真に受けたハジメはそつと自分の手で萌黄の左脇に触れた。

ハジメのリアルパワーがどくどくと流れ込んでくる。

（こんなに優しい子やったのに）

涙腺がさらに弛む。萌黄はハジメの手を押し戻すと、柱と柱に渡された横木の上ですつくと立ち上がった。萌黄はもう泣いてはいなかった。

「エネ研じゃわたしらを捕えようと、清香さんらを餌に罠を張つてると思う。覚悟せなアカンよ」

「判つてゐるって」

ハジメもにつこり笑って腰を上げた。年齢は二つ三つ下のはずなのに、萌黄には今のハジメがひどく大人っぽく見えた。

「どうなつとる！ ちゃんと報告せんか！」

伊椎製作所の副社長は、赤ら顔を沸騰させる勢いで怒

鳴っていた。

エネ研の地下研究室。誰も副社長の声に振り向きもしない。白衣の연구원たちは大声で議論し合い、またはモニターを食い入るように覗き込み、あるいは右へ左へと大あわてで駆けていた。

副社長はその中に光嶋博士の姿を認めた。他の者をはじき飛ばす勢いで走り寄ってくると、

「光嶋くん。いったいどうなつとるんだ？」

「あ、副社長」

「あ、じゃないよ、キミ。さっきの揺れは何だったんだね？ 聞けば、震源地は不明だというじゃないか」

「はあ。分析によりますと、揺れたのは地面ではなく、地上だそうです。それもエネ研の上空辺りで」

「この上か！」

副社長は思わず剥いた目を上に向けた。そこには白い天井があるだけだった。

「現在、ブラックホール発生装置との関連を調査中です。あとしばらくお待ち下さい」

ぼそぼそとした声で答えた博士は、モニターの前から顔を離すと、研究室中央に建造された巨大な装置に目をやった。

小型ブラックホール発生装置。今やそれは完成目前だった。

エネ研では、リアルたちが脱走した後も、彼らから採集したデータをもとに研究が続けられていた。野宮助教が開発した、リアルを無力化する黒い光線もそのひとつだったが、それはあくまでも副産物だった。

研究チームは今から数時間前、ついに本来の目標である、小型ブラックホールの発生装置を完成させるに至ったのだった。

ただし、その過程で彼らは大きな問題に行き当たった。電力である。真佐吉の影武者騒動で建造中の電力施設は破壊された。破壊に協力したのは研究チームの山上らだったが、彼らは脅された上でのやむを得ない行動だったということ、チームに戻ることを許された。有能なスタッフが不足していることも理由の一つだ。

ブラックホール発生装置の完成は、ヴァーチャル世界を救うことに直結していた。装置が動き出せば、たとえば米軍がリアルを仕留め損ねても、小型ブラックホールの放つパワーによって、地球上にいるリアルをへ破壊へすることができると予想された。そのため、発生装置の開発は急務だった。

そんな状況で電力の提供を申し出たのはアメリカだっ

た。他に頼るべき筋はない。そのため、完成したあかつきには、装置と研究チームは米国に渡る取り決めが交わされた。ただし、そこから得られる技術やパテントは、伊椎製作所が独占する。

光嶋博士は、アメリカ側の目的はいずれ研究を我がものにする布石だと反対した。しかしリアルな爆発まで残された時間はあまりにも少ない。結局エネ研はアメリカ側の言われるままに、申し出を受けざるを得なかった。

博士の顔色が晴れなかった理由は、もうひとつ、萌黄のことだった。装置は実の娘を始末するために作られるのだ。

『あくまでもヴァーチャル世界の平和のためだ』。

したり顔で語る副社長に、博士は返す言葉を思いつけなかった。ただひたすら心の中で娘に許しを乞うていた。「博士、連れてきましたか」

山中の顔が覗き込んだ。何度も声をかけていたらしい。博士は額から手を離れた。

「ああ、それじゃあ、装置の中に――」

運び込んでください。言いかけて言葉を飲み込んだ。数人の研究員がキャスターのついたベッドを押してきた。その上に伊里江真佐夫が横たわっていた。

病院のようなお仕着せに着替えさせられた伊里江は、誰が見ても重病人にしか見えなかった。顔色は蠟ろうのよう

に白くなり、うつろな目は時折明かりに反応する以外は動くことがない。肌はざらざらにかさついて皺が寄り、髪はちよつとした振動でも抜け落ちた。

（まるで老人だ）

伊里江真佐夫は兄の残した転送装置によってヴァーチャル世界にやってきた。しかし装置は不完全だった。弟はこの世界によつて、日々身体を蝕まれていったのだ。（萌黄と行動を共にしていたというが）

弟が自らを転送したのは、兄の行動を阻止するためだったという。とすれば彼は決して敵ではない。敵ではないが……。

伊里江は山中らによつてブラックホール発生装置の横に担ぎ上げられた。そこには別に銀色のベッドがしつらえてあつた。手枷足枷が伊里江を固定する。衰弱し切つた彼には不要ではないかと言いかけて、また飲み込む。腐つてもリアルはリアル。油断は禁物なのだ。

「それでは……始めましょうか」

研究員たちが装置から離れた。スイッチが入る。

エネ研初的小型ブラックホール発生装置。

かつて伊里江真佐吉が作り上げたものとは明らかに異なっていた。単にブラックホールを作るだけの代物ではない。そこから噴出するプラズマエネルギーの方位を重視し、装置は高さ、直径共に五メートルの円錐形に作ら

れた。ブラックホールはその円錐の先端に発生するので、これにより、プラズマ噴流の放出する向き、量などを調節することができる設計だ。だが――

（まるで大砲だ）

アメリカ側が用意した図面を見た時、博士は背筋に冷たいものが走るのを覚えた。居場所のつかめないリアルを退治するためなら、プラズマを拡散させればいいだけだ。こんな形にする必要はない。必要があるとすれば、それは明確な標的があった場合だ。

誰も口にしないが、この初号機は〈武器〉だった。

史上最大にして最悪の兵器だ。

兵器でもある発生装置に、いまスイッチが入れられた。動力が次第に音を高めていく。

円錐が支柱のあいだで縦に伸び始めた。円錐に見える立体は、じつは細い輪の集合体だった。それが各個に等しい距離を保ちながら離れていく。

グリーンと通低音を鳴らしながら円錐が傾いていく。やがて横倒しになり、斜め下を向いた時点で動きが止まった。

先端のすぐ前に、伊里江のベッドがあった。

「行きます」

山中が制御パネルのレバーを手前に引いた。

先端に光が集まり始めた。同時に液晶パネルにデジタ

ル表示された数値が目まぐるしく駆け上がっていく。

博士は伊里江から目を逸らした。

これは人体実験以外の何ものでもない。成功すれば、伊里江が体内にため込んだリアルパワーを除去することができるとしても。

数値が停止した。一〇〇〇〇。最大出力のコンマ〇〇〇〇一パーセントだ。

光を吸収した先端に黒い雲が現れている。超小型ブラックホールだ。

「放射しなさい」

「放射します」

山中の指が赤いボタンを押した。

火花のようなものが、ブラックホールと伊里江のあいだを走った。伊里江の顔がぴくりと歪んだ。

それだけだった。

博士は装置の停止を命じた。円錐が上向きながらゆっくりと縮まっていく。

ブラックホールは消えた。

すぐさま、伊里江の身体がチェックされた。リアルパワーの計測器が研究員たちによって接続される。

「計測完了。五〇〇です！」

博士は頷いた。伊里江が実験前に持っていたパワーの数値は五五〇〇。ほぼ十分の一に落ちたことになる。

「行けますね、博士！」

山中が拳を高々と上げた。博士は黙って頷いた。目を閉じた伊里江は、完全に気を失っていた。

「静かに！」

背中に硬い物が突き付けられ、久保田は飛び上がるほど驚いた。

「ハハハ、俺ですよ」

ポンと肩が叩かれる。その声にコノヤローと叫んで振り向くと、両手で相手を羽交い締めにした。

「ハジメっ、いつ来たんじゃ？」

「たった今。アンタがのほんと外を眺めてるうちに、頭上をサツとね」

そういえば、小さな風が通り過ぎたような気がしていた。気のせいではなかったのだ。

ここは建物の五階だ。忍者カリアルでなければできない芸当である。

「おっさん、いい加減に放せよ」ハジメは久保田の腕の中でもがいた。「俺は萌黄さんじゃないんだぜ」

「バカヤロー、何言つてやがる。……で、萌黄さんはどこだ？」

ハジメは自由になった手でくしゃくしゃになったTシャツを伸ばすと、見上げる目をしてにやりと笑った。

「そんなに心配なわけ？」

「バカヤロ、お前らふたりとも、ミサイルと一緒に消えたまんまだったろうが。さんざん心配させやがって」

「まーまーお静かに。外の見張りに気づかれますよ」

久保田はあわてて口をつぐんだ。ハジメも真顔になって、これまでのことを手短かに話した。

「清香さんらが黒い光線を浴びて、エネ研に連れ込まれたことは知ってる。萌黄さんは別の場所において、侵入路を探ってるんだ」

ハジメはキャンパス内の様子を聞きたがった。おおかた、一気に突入しようとして萌黄に止められ、情報を仕入れてくるよう命じられたのだろう。久保田はそう推察した。

「敵を甘く見るな。キャンパスの中には、なぜか米兵がウヨウヨしてやがる。武器や装備なんかもリアルキラーズの比じゃないぞ。シュウの見立てじゃ、ほぼ全員が黒い光線銃を所持しているらしい」

ハジメはチツと舌を鳴らした。

壁際の机から勢いよく尻を離すと、

「だいたい判ったよ。んじゃ俺、もう行くな」

久保田の肩を気安く叩いて窓辺に向かった。

「おい、待ってくれ。俺たちはこのままかよ」

するとハジメは振り向くとクスツと笑って、

「扉を開けてみな。ここに来る前に片付けといたよ」

まさか。久保田はおそろるおそろる扉に近づいて、ノブを回してみた。外から施錠されていたはずの鍵が開いている。扉を開けてみる。廊下と階段では三人の米兵が倒れていた。

「いつの間に――」

振り向いたが、ハジメの姿はすでになかった。

「来たようです。副社長」

青い目がノートパソコンの画面から赤ら顔へと写った。録音したばかりのハジメの声をパソコンが再生している。『扉を開けてみな。ここに来る前に……』。

隣のノートパソコンでは、キャンパスの地図が広げられていた。建物を飛び出した赤い点が、中庭の公園へと高速に移動していくのが映っていた。迷彩服たちも使っていたリアル探知機である。

「でもまだ、ひとりだけですな、大尉」副社長は汗を拭き拭き言った。「侵入路を探してるとか言っていたが」

「まあ、いずれ見つかるでしょう」

大尉と呼ばれた米兵は余裕の笑みで応えた。

「光嶋クン」副社長は膝を伸ばすと、研究室の中央に向かって呼びかけた。「調整はどうなつとる？」

「はあ……少々、具合の悪いことが起こりました」

「具合が悪いだア？」

赤い顔が膨れ上がり、そのままズンズンとやってくる。

「ハッキリ説明したまえ」

「はあ、じつはプラズマ噴流の誘導がうまくいきませんで……予定どおりの能力を発揮するには、あと数日は必要です」

「数日う？ リアルはすぐそこまで来とるし、捕えてある奴らも明日にはドカーンなんだぞ！」

「原因は、やはり今朝の地震のようです。あれが機械に微妙な狂いを生じさせたらしく、三百六十度放射は、現状では不可能です」

「言い訳などいらん！」

副社長は地面を踏み抜かんばかりの剣幕で怒鳴ったが、恥ずかしくなったのだろう、自分で自分の胸を抑えると、冷静さを取り戻し、問いかけた。

「今のままだと、どこまで使えるんだ？」

「精一杯広げて、三十度……くらいです」

つまり、リアルに円錐先端を直接向けなければ、プラズマを当てることはできないということだ。

「面白い」青い目の大尉が横に立った。「戦いはそうでなければいけない。我々も久しぶりに腕が鳴るというものです。まあご覧になっていてください。名古屋港でのお返しに、目にももの見せてやりますよ」

実験でリアルエネルギーを抜かれた伊里江は、すぐに実験台から下ろされ、医療班によるチェックがなされた。かなり衰弱してますとの報告が返ってくると、大尉は、殺すなよ、リアルは貴重だからなと念を押した。

光嶋博士はやるせない気持ちだった。どうしてこんな事態に巻き込まれたのか。どこかで道を踏み違えたのだろう。何度も自問自答していた。

しかしそんな心の懊悩おうれうは、ガチャガチャという騒々しい音に寸断された。

エレベータの扉が開き、新たなベッドが運び込まれてきたのだ。清香と炎少年だった。ベッドは一直線に発生装置へと向かっていく。

「どういうつもりですか？」

ベッドを押しているのは米兵である。大尉に問うと、「彼らは一時的に動けなくなっただけではいるが、決して内に蓄えたリアルエネルギーが消えたわけではない。放っておけば、明日には日本どころかアジアが吹っ飛ぶことになる」

「それぐらい判ってます」

「ならば」大尉の目の群青が深まった。「ただちに、残

るふたりからもエネルギーを除去したまえ。まだ元気なリアルが、すぐそこまで来ているのだ。我々も万全の備えて迎撃し、彼らの好きにさせるつもりはないが、万が一前回のようには手を取り合って逃げられると、一巻の終わりなのでね」

終わり。ついに明日が、ヴァーチャル世界誕生の日から数えて十四日目。世界最期の日。だが、萌黄はリアルエネルギーを発散する術を体得した。もうひとり逃亡中の小田切ハジメも、名古屋港からの報告では、やはり発散方法を身につけた可能性があるという。

米軍は、このふたりが自分たちのパワーを盾に、世界を牛耳るつもりではないかと分析している。言うことを聞かなければ自爆してやるぞ、と。

まさか萌黄がそんなことを。博士はそう言って取り合わなかったが、米軍は本気で検討し、作戦を組み立てている。

大尉が、万全の備えと表現したのは、単なる誇張ではない。研究室の内外には屈強な兵士たちが緊張感をたたえて配備に付いている。

W I B Aで救出された総理は、リアルの中で唯一、萌黄だけが人の心を読み、心に話しかける能力を持っていると告げた。

誰もが戦慄した。史上最強の存在が、読心術やテレパ

シーまで持っているとおつては、政治的手段による交渉など不可能だ。何があつても抹殺すべし。

いまや萌黄は、真佐吉以上に危険な存在だった。

（それでも……）

たとえリアルだったとしても、あの子はただの人間だ。数日前、久しぶりの再会を果たし、恨みつらみを聞かされたが、あの時、傷を負った自分を心配すらしてくれただではないか。

（なのに私は……）

米軍は萌黄の読心能力を逆手に取った。捕まえた清香と炎少年の救難の声を聞き取ることを踏まえて、彼女らに移送先を教えた。

これまでの経過から、萌黄たちが救出にやってくることは予想できた。ヒロインになったつもりでいる。リアルな能力を過信している。そう思われていたのだ。

そして自分は——自分もその作戦に組み込まれた。志願したのだ。

この世界の母親は亡くなったと、萌黄は告げた。生き残った片親としては、萌黄の運命を見届ける義務がある。だから自分はここにいる。

「博士」

山中が振り返った。指示を待っている。ベッドには清香が寝かされていた。意識はあるが、首

を左右に振る程度にしか身体を動かすことができない。

「それでは……先ほどと同じ手順で」

再びスイッチが入れられた。

円錐が通低音と共に伸び始める。水を飲もうとする鳥のように先端がゆつくりと垂れていく。

光が集まり始めた。ブラックホールが生まれつつある。

博士は身震いした。何度経験しても、この瞬間には馴れることができない。心のどこかに、宇宙の真理を弄もてあそんでいるのではないか、触れてはならぬものに触れたのではないかという、畏おそれにも似た感情が込み上げてくる。

画面の数値が九〇〇〇を超えた。

山中がレバーをじわじわと戻していく。数値の上昇にブレーキがかかる。

その手に別の手が重なった。

「え？」

レバーを逆方向に動き始める。

「ちよつと、やめてくださいよ」

大尉だった。屈託のない笑顔を光嶋博士に向けると、山中の脇腹をトンと突いた。山中はバランスを崩して床に尻餅をついた。理解できないという表情でぽかんと口を開けている。

博士にも大尉の行動が理解できなかった。ただはつきりしているのは、数値の上昇スピードが上がり始めたこと

いうことだけだ。

「ご存知なかったようだね」大尉は笑みをたたえたまま、口を開いた。「私はアメリカで真佐吉と同じ研究室にいたことがある。だからある程度の知識は持っているつもりだ」

数値が二五〇〇〇を超えた。博士には大尉の意図が読みとれない。

「ブラックボックスに同じデータを入力しても、出てくる結果は同じだ。発生装置が完成したといっても、ブラックホールやリアルには、まだまだ不明な点が多い。調べるのなら違うことをしないとね」

「さつきとは別の人間です。結果が同じになるとは限りません」

「時間がないのだよ。ほら」

大尉が空いてるほうの手で、ノートパソコンを指さした。数分前まではひとつだった赤い点が、二個に増えていた。

「あなたの一人娘が来たようだ。これで役者が揃った」レバーが押し戻される。

五三〇〇〇。

少尉はためらいもなく、赤いボタンを押した。

空間が収縮し、稲妻のような火花が幾本も走った。

視界が真っ白になる。博士は腕をかざして目を閉じた。

それでも光がまぶたを通して瞳を突き刺してくる。

研究員たちに悲鳴が上がる。火花はますます激しくなる。

博士は目を閉じたまま、コンソールに駆け寄った。大尉を突き飛ばし、レバーに手をかけた。

その時、薄く開いた視界が激しくブレた。

全てがダブって見えた。

博士は立っていらなくなり、制御パネルに手をついた。しかし眩しさと狂った三半規管が目測を誤らせ、パネルの端でしたたかに顎を打ちつけると、ウウとうなつて床の上に転がった。

（萌黄……）

まぶたの裏に、たったいま見たパソコン画面がよぎった。赤い点。萌黄なのか。生きてまた会えるのか。しかし――。

悲鳴が博士の思いを断ち切った。プラズマを浴びた清香の声であることは明白だ。

戦慄が走った。自分は何をやってるんだ？

痛みをこらえて立ち上がる。よろよろとレバーに両手を伸ばし、全体重をかけて押し返す。

途端に爆発が起きた。黒い炭のようなものが、博士の頭や肩を直撃した。

悲鳴は萌黄の全身を貫いた。

身体の中を戦車が駆け抜けたようだった。

その時、萌黄はエネ研の上空にいた。真上から丸い屋上と脇にくっつくように着陸した大型ヘリを眺めていた。ヘリは米軍のもので、ブラックホール発生に必要な電源ユニットを緊急輸送してきたのだ。

高高度から垂直に侵入すれば、二次元情報しか拾えないリアル検知器は困るだろう、敵もどう攻撃していいのか迷うかも知れない、そんな単純な発想で降下している最中だった。

清香が発した苦痛の波動は、萌黄の理性の衣を突き破り、敏感な神経をざらりとした手で荒々しくなぶった。

萌黄の頭が下を向いた。

見る見る加速していく。幾重もの空気の壁が鎧となつて肌の上に覆いかぶさる。

頭の中は空っぽになっていた。

怖れも怒りもなかった。それらは清香の悲痛な声によつて、脳味噌ごとどこかに消し飛んでいた。

エネ研の屋上が眼前に迫った。数人の米兵らしき人影が見えた。彼らは手に持った黒い銃を、落下してくる萌黄に向けようとしたが、その動きは超低速度撮影された映像のように緩慢だった。

中庭の公園の樹上に隠れていたハジメは、萌黄の落下を目の当たりにした。

プリンを縦に引き延ばしたようなエネ研の建物は、萌黄によって中央を貫かれ、膨らんだエアシールドによって、内部から〈破裂〉した。

破片は百メートル以上離れた公園にまで飛んできた。ハジメはエアクッションで身を守らねばならなかった。

「チツ、打ち合わせと違うじゃないか」

ハジメの陽動作戦で敵の目を引きつけ、そのあいだに萌黄が侵入を試みる。そのつもりで、公園の大きな樹木をパワーで引き抜き、エネ研の窓という窓に突き刺してやろうと目論んでいたところなのだ。

「ムチャクチャだ。死ぬつもりかよ」

エネ研を白い煙が包む。火災も起きている。大きな破片に潰された米兵の姿も見える。建物の中にどれくらいの人がいいたのか知らないが、被害は小さくないだろう。

「萌黄さんらしくない。全然らしくないぞ！」

しばらくすると何ごともしなかったかのように、天井や壁の震動は治まった。

ブラックホール発生装置の出力が低下した直後、エネ研は大きな地震に見舞われた。少なくとも地下研究室にいた者はそう思った。山中ら研究員は机の下でガタガタ

と震えていた。

ところがパソコン画面に外の様子が映し出されるや、誰もが絶句した。風に流れる煙の下、エネ研の地上部分は瓦礫の山と化していた。

「ど、どうということだね、これは!？」

副社長が喚いた。

「リアル of 攻撃だ」

大尉は苛立った口調で断定すると、各部所に対して連絡を取り始めた。

「み、光嶋クン、キミの娘さんの仕業かね？」

「私に訊かれましても——」

崩れた地上部には、数十人からの研究員がいた。画面に映る砂埃は、彼ら彼女らの成れの果てかもしれない。

たまらず、博士は目を逸らした。身体が鉛を背負ったように重かった。

（何ということ——）

博士は両手で顔を覆った。

机の下から出てきた山中は、制御パネルにもたれると大声で叫んだ。

「博士、発生装置に電力が来ていません!」

「映像を見れば判るよ」

博士は虚ろな目で室内を見渡した。

新しい電源装置も破壊された。つくづくエネ研は呪わ

れている。この世界は一体どうなるのか。

清香が寝かされていたベッドはねじくれていて、黒い燃えカスが散乱している。過剰なプラズマを浴びて、灰になってしまったか。

《リアル、降りてきます！》

階上を守る兵士の緊迫した声が伝わってくると、室内は混乱の極みに陥った。研究員たちはエレベータと階段に殺到した。エレベータが動かないのは判っているはずなのに、味わったことのないパニックは皆から日頃の冷静さを奪っていた。

両極にふたつある階段では別の騒ぎが起きていた。一方では、愚かにも上に逃げ道を求めた研究員たちを、上階から転げ降りてきた山上や山下が押しとどめている。

「瓦礫で塞がってるんだ！」

他方の階段からは銃声が聞こえた。黒い光線銃の発射音もする。萌黄はこっちから接近している。

《敵の動きは素早く、全く捕捉できません！》

米兵が絶叫する。が、彼の声はギャツという悲鳴と共に消えた。

研究員たちは「地下だ！」と叫び、階下に向かって雪崩を打って逃げ始めた。

室内に残ったのは博士と副社長、そして副社長に「逃げる」とクビだ」と怒鳴られた山上山中山下の三名。あと

は大尉を始めとする米兵たちだけだった。

頭上からズズン、ズシンと爆撃のような音が響いてくる。横でリアルな野郎と大尉が舌打ちした。

「エネ研の設備をことごとく破壊している」

それを聞いて博士はハツとした。

（なるほど、萌黄はブラックホール生成装置のことをどこかで知り、災いの元を絶つべく、研究を根絶やしにするつもりだな）

「分析を誤った」手について起き上がった大尉がうめくように言った。「これほどの行動に出るとは――」

博士にしろ、我が娘の行動に鳥肌が立つのを禁じ得なかった。これがあの引っ込み思案な萌黄と同一人物なのか！

「提案があります！」山中が優等生が発言するように挙手した。「コンピュータも照明も落ちますが、予備電源を回せば、一回目の実験程度のプラズマ放射は可能です。ただし一度きりですが」

（よけいなことを！）

よし、それで行けと大尉は号令を下した。

博士はしかめた顔を山中に向けた。しかし山中はそれに気づかず、勇躍して制御パネルに飛びつくと、予備電源回路の接続作業を開始した。

その時だった。

「……………ああ」

地獄の底から聞こえてくるような声が博士の耳を捉えた。

女性の声のようだった。研究員の誰かか？

目を走らせる。すると、装置の向こう側、壁際に転がっていた黒い物体から、傷だらけの細腕がよろよると持ち上がった。

28

瓦礫の上に降り立ったハジメは、すぐに崩れたコンクリートの塊を取り除き始めた。

大地震の被災者を救出するような悠長なやり方ではなく、イメージしたエアドリルで片っ端から砕き、はじき飛ばしていく。

散発的に黒い光線を撃ってくる兵士がいたが、瓦礫の下からでは遠すぎる。もともと射程距離は短かったし、ハジメは掘り起こした塊を投げ返してくるので、不用意に近づくことができない。

しかしハジメの念頭には狙撃者のことなどなかった。

（萌黄さん、生きてろよ）

心の中で呼びかけながら、ひたすら倒れた壁を引き起こしていく。

一階の床が見えた時、二の腕を冷たい風がスーッと横切った。ハジメはしめたと指を鳴らして、エアドリルの回転を止めた。

（目の付けどころに狂いがなけりや……）

彼は温度の異なる風を見分けることができる。冷気のあとをたどって大きな瓦礫の山をひとつ乗り越えようと、ついに目指すものを発見した。

地下へと通じる階段。

冷気はその四角い穴から立ちのぼっていた。地階を満たしていた冷房の空気が抜け出していたのだ。

「ハジメくん」

遠くで呼ぶ声をした。ふわりと空中に浮くと、足場の悪い瓦礫の上を、雛田を先頭にシュウや揣摩らが登ってくるのが見えた。

「危ないぞ、近づくな」

「そうはいかない」雛田は肩で息をしながら、「清香が、拉致されてるんだ、指くわえて、見てられるか」

シュウと柳瀬は銃を持っていた。

「米兵から奪い取った」

「さすが現役の傭兵さんだ。でも少し下がってくれ」ハジメは全員に注意を促すと、階段のほうに向き直り、半ば埋まっている四角い穴に神経を集中した。

ボンッ。大砲を撃ったような音がして瓦礫が空に四散

した。ハジメは砂埃が晴れるのも待たず、通じたばかりの階段を急ぎ降りていった。

階段の踊り場をまたひとつ巡る。下方の手すりの影に銃口を向ける人影があった。人影は引き金を引いた。黒い光線が射出される。だがその速度はあまりにもノロい。萌黄は周囲とは違う時間の流れの中にいた。

ひとつ飛びに階段を下りる。銃を構えたまま硬直しているようにも見える米兵に対して、右手に溜めた空気を投げる。米兵ははじき飛ばされ、壁に叩き付けられると、ゆっくり床の上に落ちた。おそらく米兵は自分に何が起きたのか理解できないまま伸びてしまった。

目を転じる。

階段から続く廊下は、どの階とも同じく、建物の形に合わせ、大きな円を描いて奥に消えている。

斜め前に大きな扉があった。いまその片側が、中に向かってわずかに開いていた。

その扉の向こうが、以前リアルたちを元の世界に送り返すべく、転送装置の開発がおこなわれていた研究室であることを萌黄は知っていた。そしていま自分が目指す場所であることも知っていた。その中に清香がいることも。

正確には「いるはず」である。

悲鳴のあと、清香の意識は萌黄のアンテナに引つかからなくなっていた。

開いた扉に誘われるように萌黄は歩を進める。部屋の内側には人の気配があった。部屋の様子をまさぐるべく、アンテナを真横に伸ばす。

その時、全ての明かりがふっと消えた。廊下も、扉のあいだから見える研究室の中も真っ暗になった。

ずっと上の階で、誰かの転ける音と、わあっという悲鳴が聞こえた。突然の暗転に足を取られたのだろう。その声は雛田に似ていた。

再びアンテナの拡張に集中する。

しかし、気配にもかからわず、誰の意識も読み取ることができなかった。その代わり、部屋の中央から、とてつもなく圧縮された力のようなものが伝わってくるのを萌黄は肌で感じていた。

直感が危険を知らせる。近づくなと頭の中で警告ランプが明滅する。

萌黄は壁に背中を寄せ、じっと聞き耳を立てた。

静かだった。さっきまでの混乱が嘘のようだ。

ここへたどり着くまで、萌黄は各階で文字どおり破壊の限りを尽くした。ブラックホール生成に関するものは、一切残してはいけないと思った。何かが残れば、それが災いの種となり、第二第三の真佐吉を生み出す。

そしてたどり着いたのが、敵が頼みとする最後の砦であるここ。数日前、リアルたちをあと一步で元の世界に戻すところまで迫った場所。それが、この研究室だ。

間接照明のフットライトだけがひんやりと廊下を浮かび上がらせている。逆に研究室の中からは、めらめらと燃えるような感情が闇に混じってしみ出してくる。

罨であることは間違いない。それでも――

（行く）

それだけだ。

恐怖心はなかった。怒りに駆られて我を失ってもいなかった。ただ、やるべきことをやるだけ。

リアルパワーが心をエアクッションで包んでいる。その実感が、身体を包むエアクッション以上に、彼女を強くしていた。

右手を胸の高さに上げる。見つめる手の平に、高密度のエアボールが出現した。萌黄は振りかぶり、エアボールを開いている扉に向けて投げた。

ドンツと扉は鈍い音を立てた。

たちまち銃弾と黒い光線が降り注いだ。

その間、たつぷり五秒は続いただろうか。

ストップと通る声が叫び、攻撃が弱まった。

萌黄はその瞬間を待っていた。低い体勢で跳躍すると、床にぎりぎりの高さで室内に滑り込んだ。

アッと戸惑う声上がる。すでに萌黄は書棚の裏にまわっており、体勢を整えると、隙間から室内の様子を静かに観察した。

どちらを向いても闇。コンピュータや装置のインジケータの明かりすらない。なぜ？

隣りの背の高い書棚に昇ってみる。すると、緑色のデジタル数値を光らせた操作パネルを発見した。表示されている数値は、一一八〇〇。

「光嶋萌黄くん！」

突然名前を呼ばれ、萌黄は姿勢を低くした。

「君は友人を助けるために来たのだろうか？」

その声には不思議な訛なまりが含まれていた。一体だれだ？
「お探しの友人くんはここにいます」

小さなライトが灯った。部屋の反対側だ。持っているのは声の主らしい。青い色をきらめかせながら、壁を背に座っている。

「我々はとても気の毒なことをしてしまった。見たまえ、ほら」

青い目の男はペンライトを右手に持ち替え、左手で床の上から黒い物体を持ち上げた。

（ああっ）

萌黄は漏れそうになった声を必死で我慢した。

「君の友人である影松清香くんは、実験の犠牲となり、

瀕死の重傷を負った。我々にはもう手の施しようがない。どうすればいいかな？」

最後まで聞いてはいなかった。弧を描いた萌黄の身体が清香のそばに着地したと同時に、青い目の男は天井高く跳ね飛ばされていた。

「しっかり！」

萌黄は清香の身体を抱き起こした。だが、床に落ちたペンライトが浮かび上がらせた清香の姿に、萌黄はそれ以上、声が出せなかった。

半分以上が抜け落ちた長い黒髪は、ほとんど白いまでに脱色していた。皮膚は干上がった川底のようにひび割れ、あちこちから血がしみ出している。

「なんで、こんな……」

萌黄は急いで自分のリアルパワーを注ぎ込んだ。しかし皮膚の色はどす黒くなる一方で、もはや清香の身体がパワーに耐えられなくなっていることは明白だった。

（こんなんで……こんなでお別れなんてイヤや！）

熱い涙がとめどもなくあふれる。萌黄はTシャツの肩口でそれを拭うと、大きく息を吸って呼吸を整え、清香のまわりをエアクッションで包んだ。

清香を地上まで連れて行く。せめて雛田に一目会わせてやらねば。

「……………うう」

残った睫毛を震わせて、清香が焦点の合わない目を開いた。

「……誰？ ……そこにいるのは」

「も、萌黄です！」

萌黄は右手に持ったペンライトを、自分と清香の顔のあいだにかざした。清香はアワアワと口をわななかせて、「萌黄さん……そこにいるの？ ……暗くて見えない」萌黄は深い衝撃を受けた。

青い目の男が言った〈実験〉。

「いったい——」声がどうしようもなく震えた。怒りが全身を沸騰させた。「ナニしたんや、アンタら！」

萌黄の声が室内の空気を震わせた。

「撃てっ！」

短い命令が空気を切り裂いた。するとそれに応えるようにヴーンという低音が大きくなった。萌黄はその音が、ずっと鳴りっぱなしだったことにいま気づいた。しかしそれがプラズマ放射装置のアイドリングの音で、彼女の読心能力を邪魔した元凶だとまでは判らなかった。

目の前で小さな火花が散った。

（——なんや？）

引き寄せられるように、身体が前にのめった。

火花が蛇の舌なめずりのようにパチパチと爆ぜる。

その彩りに萌黄は一瞬、心を囚^{とら}われた。

その萌黄の脇腹を、清香の両手が力いっぱい突いた。
ドンッ。

萌黄は受け身も取れず、大きく転がって床に肩と後頭部を打ちつけた。それでも勢いが止まらなかったのは、清香の両手にリアルパワーが込められていたからだ。

（どうして???）

助けにきて突き飛ばされたショックが、萌黄をさらに遠くまで転がし、書架に激突してようやく停止した。

その時、視神経の奥まで刺し貫くような光が走った。

反射的に萌黄は目を閉じた。

閉じたまぶたの上からでも判る放電がバリバリと稲妻のような音を立てて起こり、数秒後それは突然消えた。

驚くべきことが起こった。何人もの意識が、いきなり

萌黄の頭の中で会話を始めたのだ。

（仕留めたか!）

（このプラズマ噴流で動けなくなっただけ。今のうちにとどめをささないよ）

（もうオレ、イヤだよー。こんなとこ逃げたいよー）

萌黄は放電の意味を理解した。それが自分を狙っていたことも。そして清香がなぜ彼女を突き飛ばしたのかも。

暗闇の中に次々と湧き上がる意識。それらに対して、萌黄は空気をつぶてを片っ端から投げつけた。

「ぐわっ」「OH!」。声が命中を教えた。

全ての意識が途切れ、または痛みに悶絶するのを確認すると、萌黄は清香の意識を目当てに、彼女のそばに駆け寄った。しかし清香の意識は混濁を極めており、ほとんど生気がなかった。

萌黄の手が清香の首に触れた時、

（お父さん……）

と、ひと言がイメージとなつて浮かび上がった。それは、雛田のようでもあり、影松豊にも似ていた。

意識は線香花火のようにスツと消えた。

そして二度と萌黄のアンテナに引つかからなかった。

29

扉から光が差した。

「萌黄さーん、いるかい？」

小声で呼んだのは雛田だった。

「……はい」

萌黄は応じると、居場所を教えるため、青いペンライトを拾って左右に振った。

真っ先に入ってきたのはハジメで、シュウ、雛田、揣摩、柳瀬が続いた。彼らは手に手に、火の灯った木切れを松明たいまつのようにして歩いていた。

雛田はすぐ状況に気づいた。松明を放り出し、萌黄の

そばに駆け寄ると、そのままストンと膝を落とした。

差し出された両手に清香を渡した。

雛田はしばし慟哭した。

誰も声をかけなかった。

真つ暗な部屋で、松明の火が作る研究機材の影だけが、
小人の踊りのように蠢うごめいていた。

（まともな親子の名乗りもしてなかったのに……）

萌黄はアンテナを閉じた。そうしないと、雛田の激情に足許をすくわれそうな気がしたからだ。

泣いている余裕はない。

まだやるべきことが残っている。

萌黄は入ったのとは別の扉の前に進んだ。

ふたつのベッドが並んでいる。一方には伊里江が、もう一方には炎少年が横たわっていた。

「よか、った、来て、くれたんや」

炎少年が口を動かした。ペンライトの弱い光で見る限り、少年の身体には異常は見られなかった。

逆に伊里江は無惨な様をさらしていた。抜けた髪が周囲に散らばり、お仕着せから覗く皮膚には紫色の斑点が浮き出ている。虚ろな目は開いたまま、まばたきもせず、胸の上下するのが、かろうじて彼の生を知らせていた。

ひとつ息をついて動揺を抑え込むと、萌黄は炎少年の首に手を置いた。リアルエネルギーを注入する。炎少年

はすぐに身体を動かし始めた。無理にも手を伸ばし、上半身を起こそうともがいている。動けないことが、車椅子生活を思い出させるからかもしれない。

交代に今度は伊里江の首筋に触れる。しかし伊里江にはなかなか生気が戻ってこなかった。斑点の色が心無しか薄まった程度である。

誰かが萌黄の肩を叩いた。ハジメである。

「俺が交代する。親父さんがいるぞ。知ってたか？」
父が。

やはりここにいたのか。

ハジメは親指で背後を指さし、早く行けと促した。

部屋の真ん中では、揣摩と柳瀬が落ちていたプリンタ用紙をくしゃくしゃにして、焚き火を作っていた。

シュウは萌黄のエアボール攻撃で倒された米兵たちをロープで手際よく縛り上げている。

萌黄は炎に照らされたプラズマ放射装置を一瞥した。

デジタル表示の数字は、ゼロを示している。

光嶋博士は装置を回り込んだところに横たわっていた。

「萌黄か」

先に声をかけたのは父親だった。彼は身体を持ち上げようとして、痛そうに額の^{あざ}癍に手を当てた。萌黄のエアボールが当たったのだ。

「……その腕はどうした？」

博士は焚き火を背にした娘のシルエットに驚き、目を見はった。萌黄はTシャツの左袖を右手でヒラヒラとはためかせ、

「怪獣の相手をしてて」

と自嘲気味に答えた。

「そうか……大変だったな」

「お父さん。わたしがここに戻ってきたのはね——」

判ってるよと博士は手の平を見せた。

「判ってる。ブラックホール生成に関するものを全て消去しようというんだろう？」

萌黄はウンと頷き、片膝を床に着いた。

博士は背広の内ポケットから二枚のカードを取り出すと、

「この建物の最下階に地下シェルターがある。そこにはバックアップデータを蓄積するコンピュータサーバが置いてある。データはアメリカ側にも伊椎製作所の本社にも一切出していない。だからそのサーバを破壊すれば、完成したブラックホール生成装置に関する資料やデータはこの世界から消滅する」

博士は顔を上げた。つられて萌黄も見上げる。円錐を擁する巨大な装置。これがそうだったのか。萌黄はしばし見つめると、目を父親に戻した。

「このカードキーは、シェルターに入るためのものと、

サーバ室に入るためのものだ。エレベータは動かないので、階段で行きなさい」

「なんで——？」

萌黄は戸惑った。容認するどころか、協力？

博士はそれに答えず、萌黄の後ろの焚き火を瞳に映しながら、

「……状況に流されるのが父さんの悪い癖だった。誰も傷つけないから、いつも大事な場面で逃げてしまう。そして気がつけば、こんなところまで来てしまった。人類が食べてはいけない果実に手の届くところまで……」

博士は娘を見た。萌黄も父の視線を受け止めた。

「もう少しで取り返しがつかなくなるところだった——が、萌黄、お前が現れた。私には宇宙の意思がそうさせたような気がしてしょうがないよ」

萌黄は首を傾げた。言ってることが理解できない。

「長年この研究に携わってきたが、知れば知るほど判らないことだらけだった。理解できたと思うと、すぐその先に深遠な謎が横たわっている。転送装置に続き、小型ブラックホール生成装置を完成させたが、まだまだ未知の領域だらけだ。……でもね——今になって何だが——こんなものを作るべきじゃなかったと悔やんでいる」

いつの間にか、シュウや久保田らもそばにいた。

博士は大きく息を吸い込んで続ける。

「宇宙は謎に満ちている。それでも私は常々 “気品ある
バランス” というものをそこに感じていた。ブラック
ホールのような特異な存在にしても例外ではない。……
なのに彼らは畏敬の念を持つこともなく、ブラックホー
ルのクローンを作るのに躍起になった。これこそ宇宙万
物の運行をつかさどる神の逆鱗に触れる所業言わずして

――」

「お父さん」

萌黄は父親の肩を軽く揺すった。博士は突然夢から醒
めたように驚いた顔をした。

「教えて。わたしリアルはこれからどうしたらええの
ん？ 時々リアルエネルギーを発散させながら、互いに
遠く離れて生きていく……。そんな孤独な人生しか選択
肢は残されてへんのん？」

博士はしばしまぶたを閉じた。そして再び開くと、

「萌黄。これから大事なことを言おう。気を落ち着けて
聴きなさい」

「……うん」

博士は深く息を吸うと、

「人工ブラックホール研究の初期の段階から、ブラック
ホールの生成には、あるイオンが密接に関係しているこ
とが判っていた。我々はこれを仮にBHイオンと呼んで
いる。人工ブラックホールが誕生する際には、このBH

イオンが多量に発生するんだ。BHイオンは不安定さの尺度でもある。だからブラックホールが安定すると発生は止まる。

北海道消失の際にもおびただしいBHイオンが計測された。このヴァーチャル世界でも、空中に均等に存在しているんだよ。

厄介なことにBHイオンは増えることはあっても減少しない。そしてなんと、君たちリアルがパワーを使ったエネルギーを発散するたびに、空中に含まれるBHイオンは増大していたんだ。一時期、君たちにセンサーを取り付けさせてもらったね。得られたデータを分析した結果、それがハッキリした。

——思い出してみてくれ。ヴァーチャル世界は十二人のリアルを〈種〉として生まれたコピーだ。促成栽培のイミテーションだ。それもリアルが爆発するまでのたった二週間という期限付きのはずだった。だから……そのしわ寄せが、人体の砂状化現象として現れたのだろう。まるでクローンで生まれたひ弱な羊や牛のように。

——何を言いたいのか、判るね？ 地震などによるエネルギー発散は、リアル自身の爆発を遅らせるかもしれない。しかしながらそれは結局、この脆弱な世界を不安定にするだけだ。しかもいずれは……世界を崩壊へと導く避けようのない一本道なんだ」

衝撃だった。

それではハジメの生き残り作戦すら、意味をなさないことになる。

「死んだ人——亡くなった人たちの身体は影響せえへんの？」

萌黄は呆然としながらも訊ねた。

「調査したよ。遺体からはほとんどB Hイオンは出てこなかった。おそらく、生きてることが最低条件なのだろうな」

父親の返事は、さらに萌黄を打ちのめした。

（リアルの存在自体が、この世界の害悪か……）

自分たちは生き延びることさえ許されない。

ウォーツとハジメが吠えた。彼にも博士の話が聞こえていたのだ。

「俺たちがこんな事に巻き込まれる理由なんてない！
なのになんで……」

その先は泣き声混じりになり、よく聞こえなかった。

萌黄も同感だった。この十三日間で何度目かの憤りが胸を突いた。よりによって、どうして自分たちが——

「なんでなん？」

我知らず詰問調になった。語り続ける博士に、萌黄は昔、一緒に生活していた頃の父親の面影を見ていた。萌黄の幼い問いかけに、いつも丁寧に答えてくれた父。だ

から問えばどんな疑問にも答えてくれるような気がした。
今もそうだった。

父はやはり答えを用意していた。あくまでも仮定だが
と断って、

「人間はストレスを感じる時、微量のB Hイオンを脳内に作り出す。……そこから推量すると、真佐吉の人工ブラックホールは、大きなストレスを抱えた人間を選んだのかも知れん。あの日、あの時刻に」

十三日前の早朝。

まどろみの中。

ハンマーで殴られたような頭痛の嵐。

萌黄は父親の手から二枚のカードキーをひったくると、
後も振り返らずに出口に向かった。

「……すまん」

父親の小さな声が聞こえた。萌黄は無性に苛いらついた。

（何がスマンよ。何に対してスマンなんよ。わたしを攻撃するのに加勢したこと？ ブラックホール研究に手を染めたこと？ ——気が弱くていつもペコペコ謝ってばかりなんやから）

とにかく地下へ行こう。データを消してからまた考えよう。

唇を噛みしめながら、倒れた机の上を乗り越えた。

正面に、清香の遺体に頭を埋める雛田の姿があった。

とても見ていられない。そう思って、足早に通り過ぎようとした時、見知らぬ手が暗い中から伸びてきて、萌黄の足首を握った。

30

足首にまとわりついた手は、妙に熱っぽかった。

バランスを崩した萌黄は、右手で頭を庇^{かば}いながら床に転んだ。正体を確かめようと向けた目は、暗がりの中にザワザワと蠢く怪物の姿を映し出した。

恐怖に身体がすくむ。それでもエアボールで迎撃しようとして、背中を床にして構えた。

しかしその手がすんでのところで止まった。怪物が人間の女性の声を発したからだ。

「苦……しい……」

（——逃げ遅れた研究員さん？）

萌黄は足首を離さない手を握り返し、力を込めて女性を暗がりから引きずり出した。

女性は黒く焦げた卵の殻のようなものに覆われていた。萌黄は足首の手を優しく外すと、彼女の長い髪にかかった殻を払ってやった。

「大丈夫です……か——」

そこまで言って、今度は言葉が凍りついた。

萌黄の前に現れた女性は“清香”だった。

よく似た女性だ！　そう思おうと、頭の中で混乱と格闘する萌黄に対して、彼女は荒い息遣いの下で、

「萌黄さん……」

と呼びかけてきた。

異常を感じてやってきたシュウや久保田らも、口をあんぐりと開けて立ち尽くした。

萌黄は雛田を振り返った。彼はまだ壁際に座り込んでいた。そして、その手の中にはまぎれもなく彼の娘の死に顔があった。

（清香さんが、ふたりいる……………）

清香似の女性はフラフラと立ち上がり、身体をブルツと震わせると、肩や髪にかぶさった殻を振り落とした。

「わたし、どうしてたのかな」

その高く可愛らしい声は間違えようがない。萌黄はもう一度雛田のほうを見やり、目の前の女性を恐る恐る見上げた。

「本当に、清香さんなん？」

「あら、萌黄さんが助けてくれたのね——キャッ！」

ふたり目の清香は悲鳴を上げてしゃがみ込んだ。萌黄もようやく気づいたが、彼女は全裸だったのだ。

シュウは探してきた白衣を放ってよこし、萌黄は急いで彼女に着せかけた。

目の前の女性は確かに実在する。驚きと恐怖を感じながら、萌黄は彼女をそばの椅子に腰かけさせた。

女性は震えながら何度も髪をかき上げた。その動作に萌黄はアッと叫んだ。女性は不安げな目で萌黄を見た。

「清香さん……あなたは……ヴァーチャルやね」

そこにいた人々は息を飲み、互いに顔を見合わせた。

清香は常に右手で髪を梳いていた。それを萌黄は思い出したのだ。

（なんてことを……）

萌黄は全身に鳥肌を立てた。

突拍子もない事態ではあるが、プラズマ噴流を浴びせられた清香は、リアルとヴァーチャルに分離したのだ。

「嘘だろう？」

いつの間にか、背後に雛田が立っていた。萌黄は道を空けると雛田に向かい、

「嘘じゃありません。清香さんは、ヴァーチャルとして生まれ変わったんです」

すると雛田は顔を左右に振り、そして両手で自分の頬を激しく張ると、

「リアルだろうがヴァーチャルだろうが関係ない。私の娘だ！」

彼は駆け寄って、白衣の上から清香を抱きしめた。わずかに身長の高い清香も父親の首に腕を回した。

(こんなことって——)

萌黄は目を壁際に転じた。そこには痛ましい姿で横たわる、リアルの清香が永遠に眠っていた。

萌黄は回廊に出てきた。

いろんなことが一度に起き、心の中は台風一過の海岸のように、雑多な漂流物であふれていた。とにかく今はすべきことを早急に片付けよう。当初の決心を思い出した萌黄は、研究室を後にしたのだった。

手には二枚のカードキーが握られている。これで全てのデータを削除する。それが自らに課した最後の使命だ。足が階段にかかった。核シエルターは地下十階の、まだ下だ。

——ギョーンツ。

(……………?)

奇妙な音がした。階上からだった。

萌黄はギョツとして、下ろしかけた足を止めた。

しかし音はそれっきりだった。

(今のは何? どこかで聞いたことがあるような)

「俺もついでいこうか?」

シュウが研究室の入口から心配げな顔を向けた。

「ううん、大丈夫」

萌黄は邪念を振り払うと、階段をリアルならではのハ

イスピードで駆け下りていった。

たまらないぜ。

クビだぞと脅されて研究室に残ったものの、暴れ放題のリアルには空気玉を投げつけられるし、リアルの生んだ卵から同じ人間がヴァーチャルになって生まれてくるし。頭脳明晰が自慢のこの山上様でも、さすがにシヨツクは隠せないぜ。

この世界は狂ってる。あつてはならないことばかり起こりやがる。

全ての元凶は伊里江真佐吉だが、こつそり聞いた博士の話では、真佐吉亡き現在、残された問題はリアルだけだとのこと。

奴らが消えてなくなれば、この狂った世界にも多少はマシな明日が来るのかも知れない。

——伊椎研究所から派遣されて、俺の給料は数倍に跳ね上がった。今回の事件もうまく解決すればケチな副社長もボーナスに色を付けてくれるんじゃないか。そのために、世間から評価を得る形で、きつちりとした手柄を立てないといけない。

シュウという男が、たったいま扉を離れた。

ついさつき、萌黄がひとりで地下に向かったのだ。

リアルは不意を突きさえすれば倒せる。前々から言わ

れていたことだ。ところが奴らはやたらに勘が鋭い。隙を突くなんて無茶だ。

しかし——この建物の中なら、勤務歴一年の俺のほうに分がある。残念ながら、地下シェルターに入る権限はいまだにももらえてないが、そこまでのあいだで狙いをつければ、俺にもチャンスはあるはず。

よし、誰にも気づかれずに回廊に出られたぞ……げつ、萌黄のヤツ、もう姿が見えない。チクショー、急がないと間に合わない。

おや？ 上の階で物音がする。機械音みたいな。まさかアイツ、下に行く前に上に寄ったのか？ ちよつと様子を見てみよう。

——うわわっ。何だコイツ！ お、俺の腹が……！
ま、また来やがった！

来るな！

来るな！

来——。

（ここがサーバルームか）

数日のあいだ、軟禁された部屋のある地下十階を通過し、最初の扉を一枚目のカードキーで開いた。そして点々と灯る暗い電灯の下を歩いていくと、突き当たりに目指す部屋があった。

二枚目のカードキーを、扉の横の読み取り装置に滑らせる。ガコンと重々しい解錠音がして、扉は手前にせり出した。隙間から中を覗く。

細長い部屋だった。奥行き十メートルほどの空間の中央に、電車のように並んだ四角いサーバが静かなファンの音を立てていた。

他には、隅にコンソールとキーボードの乗ったテーブルがあるくらいだ。サーバ様の個室は実に殺風景だ。

一步中に入る。周囲の壁には一定の間隔で穴が空いていた。手を当てるとひんやりとした空気が吹き出していた。空調システムも完備だ。人間はひとりもないのに。のんきに観察している時ではない。萌黄はタツタツとコンソールに近づくと、ポケットから携帯を取り出した。雛田に借りたそのメモリには、萌黄のP A I、モジがカバ松と同居したままである。

「しつかりね」

《へいへい》

まずは携帯から引き延ばしたコードをコンソール横のコネクタに差し込む。これでモジはサーバに侵入し、ウイルスをバラまくという手はずだった。

ふいに頭の中でアラームが鳴った。

空調の音が若干高くなったかと思うと、鼻腔に違和感を感じ、次いで頭の奥にチクリと痛みが走った。

携帯を持った手であわてて鼻を押さえる。空調の音はさらに高まった。そしてそれに合わせたように、部屋の扉がプシューッと密閉音を鳴らして閉じてしまった。

壁の穴から出る気体は、明らかに別のもの変わっていった。

毒ガスだ！

萌黄は急いで携帯を離すと、エアボールを扉の小さな窓に目がけて投げた。

しかし扉は遥かに頑丈だった。エアボールはわずかにへこみを作っただけで跳ね返された。さらに二投、三投と試みても、ほとんど成果は得られなかった。

萌黄は厚い空気の層を作って身体を包み込んだ。

頭痛が広がっていく。立っているのがやっとだ。

（考えろ。何か方法はあるはずや）

床に四つん這いになり、顔を上げて室内を見渡す。あるのはサーバの大きな筐体、小さなコンソール、キーボード、テーブル、椅子。

萌黄はその中のひとつを選び、全リアルパワーを使って覆い込んだ。

選ばれたのはサーバだ。萌黄のパワーは筐体をまるごと抱えると、周囲から強烈な圧力をかけ、握りつぶした。イヤな破壊音が狭い部屋に響く。ただ破壊するだけではない。スクラップと化したサーバをさらにペシャンコ

にし、細長いロケット状に整形した。

ガスのせいで、目からは堰を切ったように涙があふれ出す。ありったけのパワーをサーバに送ったので、身体
の防御が手薄になっていたのだ。

スクラップがドスンと床に落ちた。集中力がダウンしている。アカン、思うように焦点が合わへん。

《なんじゃこらア！ 罨やんけーっ》

モジの雄叫びが耳を打った。

（罨——？）

誰が、何のために？

どうしてわたしが——まさか……!?

萌黄はカツとまぶたを開いて、四つん這いのまま前進した。そしてスクラップに右手を添えると、再び宙に浮かせ、ぐるんと回した。

「イケーッ！」

スクラップは激しく回転し、そのまま扉へと激突した。扉は紙のように押し潰れ、スクラップを突き刺したまま、火花と煙を上げて廊下を滑っていった。

とぼとぼと重たい足を交互に動かし、ようやく階段下にたどり着いた。

萌黄の心は、沈鬱な思いに打ちしおれていた。

サーバにアクセスするには、もう一枚カードキーが

必要だったのだ。後でよく見ると、テーブル横の判りにくい場所に、カード読み取り装置があった。萌黄が受け取ったカードキーは一枚足りなかった。

そしてカードキーを使わずに、不正にアクセスしようとする者がいれば、ただちにガス攻撃をおこなうよう、罠が仕組まれていたのだ。

最初から萌黄を消すつもりだった。

この世に害を及ぼすリアルとして。

たまらず萌黄は階段に腰を落とした。膝に置いた右腕に顔を埋め、ひとしきり泣いた。

ポケットの中では、モジが代わりに怒りを炸裂させていた。

どれくらい経ったろう。物音に萌黄は我に返った。涙を拭うと頭上の階段を仰いだ。

激しい金属音。悲鳴。

萌黄の全身は雷に撃たれたように緊張した。

彼女はすぐさま跳躍した。わずか十数秒で彼女の身体は研究室の前に降り着いた。

そんな萌黄を、最後の〈敵〉は舌なめずりをして待っていたのだった。

研究室の異変の原因が、何者かによる攻撃であることは明らかだった。

銃声。怒号。爆裂音。そして、およそ状況には不似合いな、気持ち悪いほど間延びした〈遠吠え〉。

（猛獣――）

それは動物園から逃げた虎かライオンを想像させ、萌黄の足を暫時、萎縮させた。

回廊の真ん中で見上げた入口は、恐竜の爪に搔きむしられたように斜めに深々と抉^{えぐ}られており、扉は全く原形をとどめていなかった。

また遠吠えが空気を切り裂いた。続いて銃声。

萌黄は急いで扉をこじ開けた。

「なんで……」

その瞬間、萌黄は悪夢がよみがえったことを認識した。倒したはずの円盤の怪物。そいつは小振りになって再び現れたのだった。逆方向に回転する二重の刃^{やいば}も、W I B Aで見た時より格段に数を増しており、ボディの中央に空いた穴から奇矯な声を吐き出すと、逃げ惑う仲間に次々と襲いかかっていた。

「真崎いいーっ」

萌黄はエアボールを握りしめ、力いっぱい投げつけた。しかし、怪物は軽々と宙返りでかわし、萌黄に向かって一直線に向かってきた。

『もーへーぎー、みーふーひーはーもーへーひー』

怪物の奇声は萌黄の名を呼んでいた。萌黄は生理的嫌悪感を感じて、部屋の隅へと逃げた。怪物は萌黄がいた床に突っ込むと、ガリガリとけたたましい音を立ててもがいた。

（みんなは無事？）

焚き火があちこちに飛火したせいで、室内はさつきよりも明るくなっていた。それでもほとんどが暗がりの中に没しており、萌黄は必死に目を凝らさなくてはならなかった。

真っ先に発見したのは、焚き火を背に銃を構えたシュウだった。萌黄はジャンプし、彼の横に着地した。するとシュウは、

「やつと帰ってきてくれたか」

と、疲れた顔をかすかにゆるめた。

「ハジメ君はどこにいてるの？」

「右側のロッカーの下で気を失ってる」

シュウは顎をしゃくった。揺らめく火に照らされた丸い壁の下にハジメの姿があった。背にしたロッカー群の潰れ具合が彼の受けた攻撃の強さを物語っている。

「伊里江君と炎君にパワーを割き過ぎたようだ。彼らしくもなく一撃で吹き飛ばされてしまった。なので我々は部屋の中を逃げ回りながら、君の帰りを待ちわびていた

んだ」

萌黄は当惑した。プロの傭兵が明らかに彼女を心強い助っ人だと感じている。

（何をアホな！）

シウはそんな萌黄の心の動きを読み取ったらしく、顔を前に戻すと、短い言葉を投げてよこした。

「自覚を持て。——来るぞ！」

萌黄は目眩を感じたが、首をひと振りして、すぐに顔を上げた。他の仲間が無事かどうか、訊ねる暇もなかった。

「もーえーひー、もーへー」

怪物は再び襲いかかってきた。

萌黄はもう一度エアボールを正面から投げた。怪物はドンツという音を発してはじかれると、ブーメランのように斜めに飛んで側面の壁に突き刺さった。

地下競技場の戦いの再現だ。

それにしても芸がない。この怪物の攻撃は一本調子だ。ヤツはもともと、本体の一部が千切れて誕生したに過ぎない、半端な生き物だ。萌黄の名前を呼ばわるところを見ると、ひたすら彼女を追うことだけが本能として刷り込まれているだけで、真崎だった頃の記憶は残っていないのではないか？

壁にはまった怪物は、なかなか抜け出すことができず

に往生している。

「どうすればヤツの息の根を止められる？」

油断なく銃を構えながらシュウが訊ねた。しかし萌黄には答えられなかった。

（わたしにはスーパーヒーローのような必殺ワザなんてない。相手がコンピュータやったら、ウイルスで倒すこともできるけど。それに……）

怪物はまだ壁から自由になれないでいる。

その姿がひどく惨めに映った。真崎はリアルだった。だからこの怪物も真正銘のリアルだ。自分と同じ境遇の生き物なのだ。なのに自分までリアル狩りに手を貸すなんて——こんな皮肉があるだろうか。

（くっそーっ、どないしたらええっちゅうねん）

奥歯がギリリと鳴る。爪が手の平に食い込む。

「萌黄さん！」

シュウが催促する。だが萌黄は動けない。どうしていいのか判らない。

すると彼女の背中に、萌黄、と呼びかけた者がいる。

「何とかしてくれ。このままではみんなやられる！」

父親の光嶋博士だった。振り向くと父親に寄り添うように、雛田や清香らが息を潜めている。

ここに至って頼みの綱は、リアルの中でも萌黄だけ。そんなヴァーチャルたちの強い期待に背中を押され、父

親としては檄を飛ばさずにはいられなかったのだ。

萌黄はきつと振り向くと、鋭く言い放った。

「戻ってこれるとは思ってなかったんやろ？」

炎に揺らぐ父親の顔が翳^{かげ}った。

雛田が「何のことだ？」という表情を見せる。

萌黄はいまこそ、父の「すまん」の意味を悟った。

『この世界を守るための犠牲にしまつて、すまん』
そう謝りたかったのだ。

善人にも悪人にもなりきれない父。

調子、良すぎや！

ガチャンとガラスの割れる音が響いた。萌黄は視線を戻す。散らばった炎に浮かび上がる室内は、さながら爆撃現場のようだった。

「何があつた？」

「えっ」

「出ていった時よりも服装が汚れている。地下での作業は、楽ではなかったらしいな」

さすがにシュウの観察眼は並ではない。

萌黄は黙って首を振った。しゃべりたくなかった。

シュウもそれ以上、追求しなかった。

二、三分が経過した。

壁の怪物は、依然として抜け出せないでいる。萌黄は張りつめた緊張の糸が、徐々にたるんでくるのを覚えた。

シユウが見えている腹に向け、一発銃弾を発射したが、座布団にビー玉を叩きつけたような手応えしかなく、銃弾はぼろりと床に落ちた。

そうだとシユウは平板な声でつぶやいた。彼はどんな状況でも淡々としていて、声の調子がほとんど変わらない。

「米兵の対リアル用の光線銃があつたはずだ。アレを使おう」

そう言つて、辺りに目を走らせた。

なるほどその手があつたか。萌黄は感心した。自分は撃たれる側だったので、そこまでは考えが及ばなかった。

（そや。怪物の思考を読まれへんやろか？ 相手は猛獣やし期待でけへんけど）

たちまち頭の高さから角のように、見えないアンテナが伸びていく。操りかたにも随分と馴れた。

（……も……えぎ）

それらしき反応をすぐに捕捉した。

（……頃合い……そろそろ……ろ……逸れ始……めた……注意）

どういう意味だ？ そもそも怪物は意味のある思考が可能なのか？

萌黄がさらにアンテナの受信範囲を狭めようとした時、別の思考が割って入った。

(……OK……行く！)

怪物に似ていたが、別な場所から発した言葉だった。そしてそのひと言には、行動への強い意志が込められていた。誰だ？

無音の圧力を全面に感じて、萌黄は暗闇の一点に目を据えた。すると獰猛で狡猾な意思が、唐突に暗闇の奥から突進してきた。

萌黄は咄嗟に身体を反らし、間一髪で攻撃をかわした。回転する刃が彼女の片頬をかすめた。その瞬間、視野の片隅に、壁に刺さったままの怪物の姿を認めた。

(しまった、二匹いてたんか！)

同じ手に二度かかった。萌黄は頭の中で敵を甘く見たことを悔やんだ。

しかしそれも一瞬のこと。萌黄を捉え損ねた怪物は、勢い余って彼女の背後に突っ込んだ。そこには光嶋博士がいた。

ガリガリと金属を掻く音に、悲鳴が重なった。

萌黄は転がったまま空気で鞭を作り、怪物を力いっぱい払った。怪物はフリスビーのように反対側の壁へと飛んでいった。

急いで父親のそばに駆け寄る。しかし雛田に助け起こされた光嶋博士は、腹を真っ赤に染め、すでに事切れていた。萌黄は両目をぎゅっと閉じ、赤い砂を手ですくつ

た。が、すぐに払い落とし、全身に緊張を走らせ、戦闘態勢をとった。

一匹目の怪物がのそりと壁から抜け出した。二匹目も体勢を立て直そうとしている。両者の刃はそれぞれ一枚しかない。あたかもハンバーガーのパティを上下に分けたようだ。元の怪物がふたつに分離したことは明らかだった。

思考力がないなどともない。怪物たちは、いまでも真崎なのだ。

萌黄はシュウに、隙を見て外に逃げるよう指示すると、ハジメのそばへと向かった。

ハジメは口から血を垂らしていた。名前を呼んで身体を揺さぶるとようやく目を開き、やあと力なく微笑んだ。「肋骨が二三本いっちゃったみたいだ。ザマあないな」そんなものではないはずだ。おそらく内臓も傷ついているに違いない。

「ムチャするから……。ふたりにエネルギーを分け過ぎたんでしょ」

伊里江と炎少年の姿はベッドの上から消えている。誰かがふたりを安全なところへ避難させたようだ。

チェーンソーのような回転音が左右から近づいてきた。萌黄たちのいるところは、焚き火にまともに照らされて、どこからでもよく見えた。二匹は今度こそ逃がすまいと、

じりじり間合いを詰めてくる。萌黄はハジメを背負い、扉から離れる方向へとゆっくり足を動かした。

（陽動作戦は、アンタらの専売特許やないからね）

こうしているあいだに、久保田や雛田たちが逃げおおせてくれればいい。どうせ怪物の狙いはリアルだし、中でも自分が一番憎まれているようだし――。

萌黄の思いは通じたようだ。今のうちに安全なところへという皆の考えがアンテナ伝いに聞こえてくる。

よし。もうちょい時間が稼げたら――。

だが萌黄の計算は、予期せぬ人物によって狂わされた。

32

怪物の姿はまたも変貌を遂げていた。

回転刃を支える胴体の下からは、多数の肢^{あし}が伸びており、それが倒れた机や転けた椅子などを避けながら歩く姿は、イカというよりもクモに近く、思わず目を背けたくなるグロテスクさだった。

その一匹が壊れた計測器を乗り越えようとした時、黄色い声を張り上げて飛び出したきた人間がいた。赤ら顔の顔は忘れもしない、伊椎研究所の副社長だ。隠れていたところに突然怪物が頭上に現れたものだから、肝をつぶしたのだろう。あられもなくうわああと叫びながら扉

に突進していく。

ところがその行動は、ヴァーチャルには興味がないはずの怪物の気を引いてしまった。

怪物は身体をひねると、ふわりと宙に浮いて、副社長を追い始めた。すると完全に動転した副社長はさらに大きな悲鳴を上げ、自分の居場所を教えながら逃げていく。バカな、とシュウは心の中でなじると、物陰から飛び出した。

シュウは出口の近くにいた。久保田や雛田らを連れ、壁際を影づたいに移動中だったのだ。怪物二匹は萌黄が引きつけてくれている。この間にヴァーチャルを外へ。萌黄がそれを意図していることは容易に想像できた。今では萌黄の考えていることが手に取るように判るような気さえしていた。

「出口に向かって走れ！」

シュウは久保田らにそう叫ぶと、銃を構えた。

副社長は出口にあと一步というところで、装置のコードに足を取られて転倒した。追っていた怪物は肢の一本を伸ばして副社長の腰に巻きつけた。

シュウは近接距離に迫ると、すぐに引き金を引いた。銃弾が二発三発と発射される。だがやはり怪物には何らダメージを与えることができない。

「おいっ」すぐそばで声がした。「この縄を解け」

あの青い目の大尉がそこにいた。手足をがっしりと縛られている。

「解いてどうする？」

「対リアル用のプラズマ銃がある」

怪物が副社長を引きずり始めた。

「よこせ」

シュウは手を出して腰から奪おうとした。

「やめとけ。特殊な銃だ。初めての奴には使えない」

大尉は傲然と言い放った。シュウは嘘だと思ったが、無言でひざまづく、すぐにナイフを取り出し、ロープを切って大尉を自由にした。

大尉はロープの切れ端を振り捨てると、腰からラッパのような形をした銃を抜き、怪物に向かって照準を合わせた。

怪物はすぐ目の前の、見上げる位置にいた。

引き金が引かれた。黒い光線が怪物の下腹へと伸びる。効果はてきめんだった。

『やーめーろーっ』

怪物は人とも獣ともつかない声で吠え、円盤のボディを裏返して、立て込んだ装置の後ろに倒れ込んだ。

大尉は機を逃すまいと床を蹴り、机を踏み台にして、倒れずに残っていた戸棚の上に躍り上がった。

「油断するな」

シュウが声をかけると、大尉は床に向かって唾を吐き、「俺にはアフリカの猛獣狩りの血が混じってるのさ。そこで見てろ」

と早口でまくしたてた。

シュウは別の一匹に警戒の目を向けた。

黒い光線が発射されると、萌黄は頭の中に焼かれるような激痛を感じた。逸れた光線の一部が彼女のほうにも飛んできたのだ。

萌黄と対峙していた怪物も同じだったようだ。グアツとうなると円盤を傾げた。回転刃が当たるものをことごとく削っていく。

副社長を捉えた怪物は、ひっくり返ると、起き上がる力が出ないのか、じたばたと暴れている。

短い会話が聞こえた。撃ったのは誰？

見ているうちに、戸棚の上に男が現れた。銃を構えている。唾を吐いて何ごとか言い捨てると、男の銃が黒い光線を発射した。

ついに黒い光線が怪物の動きを止めるのか――。

「あっ」

ボンツと破裂音を響かせ、回転刃が空中に飛び散った。それは一種の小型ミサイルだった。刃のいくつかは萌黄のそばの壁を、ガツツと砕いて突き立った。

驚いて戸棚に視線を戻す。すると、身体に無数の刃を受けた大尉が仰向けに倒れていくところだった。

相打ち。なんという怪物の攻撃能力だろう。

怪物の脇には、身体を真つ二つに裂かれた副社長の遺体が転がっていた。

萌黄は黙然と頭を垂れると、すぐ眼前の敵に注意を戻した。残された怪物は、兄弟を救いに向かおうとして、思いとどまったようだ。

視界の片隅で、大きな火が燃え上がった。シュウがリアルパワーを失った怪物に放ったのだ。火の色は思わず見とれてしまうほど美しい青だった。ラピスラズリ——瑠璃色と言えば近い。

（わたしが燃えても、あんな色が出たらええけど）

萌黄は背中の伊里江を床に下ろした。

「さあ、残るはアンタひとりや」

自分の恐怖心に打ち勝つため、萌黄は怪物に語りかけた。円盤の怪物は反応を見せない。

「真崎さん——もう終わりにしよ。嫌われ者同士が争っても、何の得にもならへんよ」

「……………」

「あなたがどんな思いでリアルを追っかけてたんかは知らん。けど、この世界に放り込まれて、すぐ自分がリアルやて判ったよね？ それやのにずっと隠して追いかけ

てたやなんて、ぶっちゃけ、わたし感心するわ」

『……たかった』

えっ？ 萌黄は耳をそばだてた。

『ほ……めら……れたか……た』

萌黄は耳を疑った。

「ほめられたかった……って、誰に？」

問いかけた瞬間、怪物は数本の刃を投げてよこした。

萌黄はエアシールドでこれらを跳ね飛ばした。

「やめなさいっちゅーてんの」

また刃が飛んでくる。今度も萌黄には一本も届かない。

「わたしらはストレスが強かったから、この世界に呼ばれたんやて。知ってた？」

萌黄は一歩前に出た。

「思い出したら、心当たりがあったわ。二週間前の明け方……うん、その時だけやなくて、わたしは毎日がストレスの連続やった。親友のむんがいてたから大学には入学したけど、そやなかったら、ずっと家の自分の部屋に引きこもってたと思うわ。普段から引きこもりがちのわたしは、パソコン相手にプログラミングして、P A Iのバージョンアップして、そんなんばっかりしてたんだよ。なんでわたしは外に出られへんのやろ、なんでむんみたいにバイトしたりでけへんのやろって、始終悩んだ。わたしは他のコとは違うんやろか、きつと違うんや

なって、毎朝毎晩、自問自答してた。できそこないやって、さげすみもした。……でも、そんなことを考えてたから、こんな世界に来てしもたんやね。あはは」

また一步前に出る。怪物はわずかだが後ずさった。

「清香さんも、あの朝は森の小道を歩きながら、自分の音楽のことで悩んでたって言うてはった。植物状態やった炎君もきつとそうやろうし、ハジメさんも、齋藤のお爺ちゃんも、五十嵐さんも、柊さんも。それに、ハモリさんや、出会う前に亡くなった他の人たちも。……それに、あなたも大きな悩みを抱えてたんやね、真崎さん」
とうとう萌黄は、怪物を壁際まで追い詰めた。イカのような肢に支えられ、回転する刃を持ったベージュのボディはゆらゆら揺れるばかりで、萌黄のアンテナにも、形のある思考は読み取れなかった。

「あなたはリアルクリアズとして十分働いたやん。後はあなたもわたしも含めて、生き残ってるリアルがみんなこの世界からいなくなったら、それで終わり。あなたがほめてほしいと思ってる人も、きつと認めてくれるんじゃないかな。真崎さんのがんばりを、ようやくたつて。そやからもう争うのはやめて、わたしらと一緒に――」

「萌黄さん。どくんだ！」

シュウの声が、萌黄と怪物を包んでいた空気を破った。彼は手の中の対リアル光線銃の照準を、ピタリと怪物に

つけていた。

「シュウさん、ちよつと待つて——」

「伏せろ！」

シュウは叫ぶや、光線を放った。しかし怪物の動きは遙かに敏捷だった。全ての肢で床を蹴ると、見事に光線かわし、そのままシュウ目がけて突進した。

危ない、と萌黄も遅れて跳躍すると、空中で身体を傾けたまま、エアボールを怪物の下腹に投げ込んだ。

空気の塊を喰らった怪物は、飛行コースを変えられて、プラズマ装置へと突っ込んだ。

巨大な円錐が崩れ落ち、そばで燃えていた火が移って、たちまち装置は熱によって歪み始めた。

シュウはその火をかいくぐって、装置の下を無事脱出した。そして迷彩服がくすぶっているにもめげず、さらに光線銃を連射した。怪物は激しく動きながら、広い研究室の中を逃げ続ける。

萌黄も追った。

どんな形にせよ、ここで決着をつけないければならない。そう思えば思うほど、心臓が破裂しそうなほど高鳴った。「くわっ」

シュウが突然倒れた。萌黄はあわてて飛び降り、エアシールドでシュウの身体を覆った。

シュウの右腕に怪物の太い歯が刺さっていた。刃を抜

き取ると、赤い砂がすさまじい勢いで噴出した。萌黄はパワーを込めた手の平で、傷口をしつかりと押さえた。

「大したことはない」

シュウは言ったが当てにはならない。萌黄は一層腕にパワーを込めながら、目だけは怪物を追跡すべく、空中を見上げた。

ズズズーン。

室内が激しくゆれ、コンクリートの大きな塊がふたりのすぐそばに落下した。萌黄はシュウを庇って彼の上にかぶさった。

「天井が落ちてきたぞ！」

シュウは頭上を指さした。萌黄が見上げた時、天井の一部と思われる塊が彼女の上に落ちてきた。だがエアシールドは完璧にそれらを受け止め、脇へと払い落とし、てくれた。

細かなホコリが暗い室内を一面の灰色にした。すぐには何が起きたのか判らなかった。

（しもた、ハジメさんが！）

視界はもうもうと舞い上がったホコリで何も見えない。崩落は手の平を空中に向けた。手の平の先に精神を集中させると、ホコリが一カ所に集まり始めた。

みるみるうちに視界が晴れていく。だがそこに怪物の姿はなかった。そして天井には巨大な穴が空いていた。

「逃げたな」

シュウが舌打ちした。そのあいだに、萌黄はハジメを探した。

ようやく発見したハジメは落ちた天井の下敷きになっていたが、幸い意識はあった。

「俺、もうダメみたいだよ」

事実、彼は腰に最も大きな直撃を受けていた。あまりの痛みに呼吸すら困難なようだった。

「アホなことは、聞く耳持たんからね」

萌黄は重傷のハジメを慎重に背負った。

「マズいぞ」シュウが対リアル銃を腰にはさんで駆け寄ってきた。「先に地上に逃げた久保田たちが危ない」

萌黄はハツとなり、すぐに眉を引き締めると、力強い声で言った。

「このまま行きます。わたしのそばに来て」

萌黄はハジメとシュウを空気でくるみ、ふんわりと宙に浮いた。そして怪物の逃げた穴に狙いを定め、一気に上昇を開始した。

地上に抜けた途端、雲の欠片もない青空に一瞬目がくらんだ。

ふたりを抱えた萌黄は、エアクッションで地上に軟着陸した。彼女はすでに怪物の姿を捉えていた。

瀕死のハジメは、やわらかな地面を見つけて寝かせた。
シュウは対リアル銃を抜いて、萌黄の前に出る。

怪物は崩れた瓦礫の真上にいた。萌黄は怪物の回転刃を睨みつけた。

怪物はなんと、久保田を始め、揣摩、柳瀬、雛田、清香、炎少年、そして伊里江の全員を人質として、その蠢く肢の中に捕えていたのだった。

「その人たちを放しなさい」

萌黄の声はリアルパワーに乗って、瓦礫を震動させた。

『……じゅう……を……すてろ』

シュウは構えを下ろさず、怪物に一步二歩と近づく。

『……とまれ……うてば……こいつら……も……つぶれて……しぬ』

「卑怯な奴め！」

シュウの声が虚しく轟いた。

『おまえ……そのじゅうで……もえぎを……うて』

怪物のおぞましい形をした唇が、にやりと笑ったように見えた。

『おれが……しぬのは……もえぎ……おまえのさいごを……みとどけてからだ』

怪物はその肢を久保田たちひとりずつに巻き付け、身動きできないようにしていた。中でも伊里江と炎少年に對しては、首にまで何重にも念入りに巻き付いている。リアルであることを十分認識しているのだ。

萌黄と怪物のあいだは約十メートル。ひと飛びで躍りかけれる距離だ。試みに、右足を別の瓦礫の上に動かし、怪物はどこに目があるのか、彼女の動きを敏感に察知すると、わずかに向きを変えた。これでは、飛びかかろうと腰を屈めることも難しい。

対リアル銃を構えたシュウも、どうすることもできず、様子をうかがっている。そのシュウに怪物は『萌黄を撃て』と言ったのである。

『……いつつ……かぞ……える』怪物のたどたどしい言葉が言った。『うたねば……ひとりずつ……ころす』

「隊長代理！」

相手が人間だった頃の名前をシュウは呼んだ。しかし怪物は何の反応も示すことなく、カウントダウンを開始した。

『ひと……つ』

萌黄はすつと目を細めた。

「シュウさん。わたしを撃ってください」

「聞こえんな」

にべもない返事だった。

「わたしが撃たれたら油断するかも。そこを狙っ——」
「普通の銃弾とワケが違うんだぞ。そんなのは作戦でも何でも無い。ヤケを起こすな」

凶星だった。

「疲れが限界に達してるは判る。でもな」

『ふ……たっ』

「ここまで来て放り出したら、今までの二週間は無意味なことになるぞ」

意味なんかあらへん。ただ逃げ回ってただけや。

ずっと押さえつけていた感情だった。状況が悪くなる
とすぐにもたげてくる悪い性格だと彼女は思った。

「俺は傭兵だ。ひと様に胸を張れる職業だとは思わない
が、そんな俺が長年の経験と、そして真崎さんから学んだ
ことがある。あきらめない、ということをだ」

『みっ……っ』

「ヒューマンドラマにありがちな精神論とは全く違う。
いわば、突破できない壁はない。抜け出せない密室はな
い。破れない非常線はない。盗めない重要機密はない。
つまり人間が作った状況で、乗り越えられないものはひ
とつもないということだ。そうやって俺たちは生き延び、
目的を達してきた。そしてもうひとつ。倒せない敵も、
ない」

シュウの言いたいことは理解できた。頭脳を最大限に

働かせ、この事態を打開する方法を見つけると言っているのだ。

しかし追い込まれたいま、うまい考えが反射的に浮かぶほど、自分はピンチに強くは――。

その時、天啓が訪れた。

『よっ……っ』

普通の銃弾とは違う。シュウの言葉を思い出した。

「シュウさん、撃って！」

「だから――」

〈大丈夫。わたしは死なない〉

萌黄はシュウの頭の中に、直接話しかけた。

『いつ……』

シュウは意を決した顔で振り向くと、萌黄に向かって対リアル銃を発射した。

狙いは正確だった。

萌黄は黒い光線が近づいてくるのを、ゆっくりした時間の中で見つめていた。

（一発勝負！）

右手を前に構える。腕の先にリアルパワーを集中させる。たちまち目の前の空気が凝縮し始めた。

（もつと、もつと）

温度が急速に下がっていった。萌黄はさらにパワーを込める。凝縮された空気は、徐々に黒ずんだ色合いを帯

びてきた。

エアシールド。文字どおり空気の盾。萌黄の前に広がったそれはまるで、パラボラアンテナのような曲面を持っていた。

黒い光線はできたばかりのエアシールドに達した。そして光線は透過することなく、盾の上を別な方向にへ反射した。盾の曲面によって、空中の一点に収束しながら。

グアアアアツ。

怪物がボディを仰け反らせた。収束した光線によって、その肢が付け根からナイフを浴びせられたように、ざっくりと切り取られたのだ。萌黄の『対リアル光線・反射作戦』は予想以上の成果を上げたのだった。

彼女は盾を捨てると、十メートルの距離を一瞬で移動した。手早くエアクッションを作ると、久保田たちを中心に包み込み、そのまま瓦礫の外へと連れ出すことに成功した。

「うひゃつ、たす、助かった」

雛田の声が裏返った。

「萌黄さん。まだふたりが」

揣摩が瓦礫の方向を指さした。

怪物は瓦礫の山の上にひっくり返ったまま、残った肢をじたばたさせていた。伊里江と炎少年はその中に取り

込まれたまま、右へ左へと翻弄されている。

（リアルだけは逃がさへんつもりやね）

反撃の機会を与えては行けない。萌黄は再度飛び上がるべく、膝に力を込めた。

〈萌黄〉

そのまま膝が固まった。振り向く。揣摩や柳瀬が驚いて身体を引いた。

「いま呼んだ？」

「いいや」

男たちは首を振るばかりだ。

〈萌黄。聞こえる？〉

また同じ声がした。今度は声質まで聴き取れた。

（むん???）

W I B Aで聞いた靈魂の再来か？

でも、なぜ、いま？

グルルルと怪物が喉を鳴らした。起き上がろうとしている。急がねば。

〈危ないよ〉

声は執拗に話しかけてくる。その調子には何か別のことを訴えようとする必死さが込められていた。

（これは——靈魂なんかやない！）

萌黄はアンテナを極限まで伸ばした。前後左右上下へと全方向に。するとある一端が、声ではなくその奥に潜

む、かすかな思考を捉えた。

〈パワーの〉 〈危険〉 〈時間との〉 〈プラズマで〉 〈垂直に〉 〈光〉

それらは、全くつながらない言葉の羅列だった。

だが〈危険〉という単語の裏に、場所に関する情報がくつついているのを萌黄は見逃さなかった。

ここだ。エネ研だ。

すでに“跡地”と化してしまったこの場所に、声が言うところの〈危険〉が迫っていたのだ。

それがいつなのか――。

萌黄は〈垂直〉に顔を上げ、空を見つめた。

いつの間にか、一力所だけ雲がしみ出していた。雲は大砲のような縦長で、中央に穴があり、その暗い穴の向こうには空はなく、小さな稲妻が走っていた。

大砲が狙っているのは間違いなく、エネ研。

萌黄は急ぎ、宙を飛んだ。

怪物の姿が迫る。怪物はようやく裏返ったボディを起こしたところだった。萌黄は瓦礫の上で呆然と立つシユウを突き飛ばした。そしてカーブを描いて、怪物の下に頭から飛び込んでいった。

その時だった。

大空に浮かぶ大砲から、強烈な光が地上に向かって落ちてきた。同時に辺りは真っ白な光に包まれた。

『あああああああ』

光線を浴びた怪物がのたうち、絶叫した。そしてボディに火がつくと、激しく燃え出した。

「これは——この光の束は、プラズマ噴流なのか!？」

シュウは呼吸することも忘れて、指のあいだから信じがたい光景を眺めていた。

まるで光の柱だ。なぜこんなものが。

「萌黄さんは——」

彼女に瓦礫の外まで突き飛ばされていなければ、シュウは今頃生きてはいなかった。

「すると彼女は、こうなることを知っていたのか」

光は瓦礫全体を覆い尽くすほどの広さで降り注いでいた。その中で怪物は黒く焦げ、断末魔の叫びを残して、ついにどさりと倒れた。

「あの下に萌黄さんたちが……」

助けに行くこともできず、指をこまねいていると、少し離れたところの地面が割れるのが見えた。三人の人影がその下から現れた。シュウは思わず拳を握りしめて駆け出していた。光の柱の向こうでも、久保田たちが立ち上がった。

土にまみれた萌黄は、息をついて横たわると、そそり立つ光の柱に魅入られたように微笑みを浮かべた。駆け

つけた揣摩たちは、手を伸ばして彼女を地面の上に引き上げた。他に出てきたのはもちろん炎少年と伊里江だった。少年はハジメに充電されて元気を取り戻していたが、伊里江はエネ研に入る前と、さして容態に変化はないように見受けられた。

（ムチャクチャ綺麗やなあ）

萌黄の素直な感想だった。肉体も精神も疲労の極地にいた彼女を、その光景は温かく癒してくれた。

夢の中で見た〈光の塔〉。あれは予知夢だったのだ。自分はこうなることを知っていた。こうなることを待っていた。

光は、真っ白だった最初の状態から虹色へと遷移していた。

萌黄はジーンズの泥を適当に払い落とすと、オーロラのようにゆらめく光に近づいていった。

「お、おい」

久保田が止めようとする前に、萌黄は腕を肘まで差し込んでいた。

「大丈夫。もう害はあらへんよ」

「光の正体を知ってるみたいだな」

しかし萌黄は首を振った。

「ただ、こうなることは何となく……」

「予想できたってのか」

全員が光の柱を仰いだ。真っ青な空の中、ぽつんと穴の空いた雲が浮いており、光はそこからめどなく降り注いでいる。萌黄ばかりでなく、誰もがその美しさに魅了されていた。

《電話やでー》

カバ松が唐突に着信を告げた。雛田はこんな時に誰かと携帯を取り出しながら、

「例の『ふゆうくん』はもうやめか？」
と問うた。

《バカバカしい。バレちゃったら、もう二度とあんな媚びた真似なんてできるかい》

液晶画面を覗き込んだ雛田は、変だな番号が出てないぞと訝しげに言う、受話口を耳にあてた。が次の瞬間「あーっ」と大声で喚き、携帯を地面に放り投げた。

「どうした、誰からだ？」

「む、む、む、む、む」

「落ち着け」

「むんさんだ！」

全員が地面の携帯に目を向けた。

「いたずらに決まってるじゃないか」

揣摩が苦笑混じりに言ったが、雛田はふるふると首を振り、

「そっくり。声。生き写し」

とおびえたように言った。

誰も拾わないのでシユウがつかみ上げた。通話ボタンを押す。すると画面に立体映像が浮かび上がった。

「ほら、俺の言ったとおりだろ？」

雛田の耳は正しかった。服装こそ見慣れない地味な背広姿だったが、長い髪を後ろでまとめた女性は、記憶の中のむんと同じ姿かたちをしていた。

しかし画質は非常に悪くて、数秒ごとにブレたり消えたりを繰り返す。

「むんや」 萌黄が進み出たので、シユウは彼女に携帯を手渡した。「この顔——リアルのむんや……」

萌黄の目から涙があふれた。

《萌黄？ その声は萌黄やの？》

画面の女性は前屈みになって、きよろきよろと辺りを見回す仕草をした。しかし感極まった萌黄は応じることができない。代わりにシユウが答えた。

「萌黄さんはここにいますよ」

《本当ですか？ よかった——！ こちらからはそちらを見る事ができないんです》

「了解。ところで、そちらはリアル世界ですか？」

《そうです。そちらはヴァーチャルの世界ですね？》

「ええ」

ほおーっと皆から溜息が漏れた。今この時、両方の世界がつながっている。そのことに誰もが感銘を受けていた。

画面のむんが早口に説明し始めた。

《実はあまり時間がありません。だから手短にお話します。そちらでは今、空中から強い光が差していることと思います。それはこちらとそちらをつなぐ通路なのです。こちらのエネ研がようやく完成させたブラックホール生成装置によって作られ、つい先ほど安定化に成功したばかりです。わたしたちの目的はもちろん、リアルの皆様をこちらの世界に連れ戻すことです。でも許された時間は、たった三十分。……だからお願い、萌黄！急いで！》

34

三十分。

それが、ヴァーチャルとリアル、ふたつの世界をつないでいられる時間。

携帯を通じて語りかけてくる、リアル世界のむんは、あらかじめ必要事項を紙にでも書き留めておいたのだろう、最初こそはつつかえ気味だったが、徐々に冷静な口調を取り戻した。

むん曰く、ヴァーチャル世界が誕生したことは、諸々の観測によって、リアル世界の側でも初日のうちにつかんでいたのだという。

へこのまま世界が滅亡するのを、指をくわえて見ているわけにはいかない。事態を打開するには、ヴァーチャル世界に取り込まれたリアルたちを奪還する以外に方法はない。

エネ研に結集した世界的頭脳は、すぐさまヴァーチャル世界へのアクセス方法の発見に全精力を注いだ。

結果、リアルが発するエネルギーを特殊レーダーが捕捉したのが数日前。

《それが萌黄でした。萌黄はすでにリアル候補者にリストアップされていたので、すぐに彼女のご家族が呼ばれ、開発中のプラズマ装置を通じてコミュニケーションが試みられました。ですが……》

実験はうまくいかなかった。ところがダメ元で話しかけたむんの声に萌黄は反応した。残念なことに、通話状態を安定させることができなかったので、ろくに話ができないうちに切れてしまった。

しかしこれに気をよくした科学者連はさらに実験を重ね、ついにヴァーチャル世界に通じる道を開くことに成功した。それは同時に、伊里江真佐吉以外にはなし得なかったへ人工ブラックホール生成の謎を解明すること

にもつながったという。

今朝方、萌黄とハジメが見た「光の塔」。エネ研に天から注いだ光は、この通路の前触れだったのだ。

《このようにして道は完成しました。でも三十分すると道は閉じてしまいます。その理由は、単に通路を維持する電力が莫大であるということだけではなく、わたしたちリアル世界における太陽系が、銀河の中でもとりわけ特殊な位置に移動しつつあるからだそうです。だからこの機会を逃すと、次に道を作れるのは、千年後だろうと言われています。もっともその前に世界は消滅することになります》

説明を聞き終えた一同は、一斉に息を吐いた。互いに顔を見合わせたりしているが、どの顔にもそれほど驚きはしない。すでにこの二週間、誰もが驚くべき経験を積んでいた。いま彼らの心を支配しているのは、突然現れた、事態の終焉しゆうえんに対する戸惑いだけだった。

萌黄は「三十分」と聞いた時から熱に浮かされたような気分になり、その後の話は、右から左へと通り過ぎていた。

（たったの半時間で、この世界にお別れ……）

「——ハジメ君は？」

シュウが沈黙を破った。ハジメがいない。全員がどこだ？ と首をめぐらせた時、おーいと声を上げながら、

久保田が小走りで戻ってきた。両手にハジメを抱えている。

腕をだらりと下げたハジメは、地面に横たえられても、なかなか声を発しなかった。

「おい、喜べ」久保田が優しい声で語りかけた。「元の世界に戻る道ができたんだぞ」

「——まさか」

ハジメは荒い息の下で、唇を少しだけ開けた。

「嘘じゃないぞ。ほら、あのオーロラのカーテンみたいなのが見えるだろ？ あれで帰れるんだと」

「——へえ」

しかしハジメはウツとうなると、苦しげに身体を折り曲げた。

「ハジメさん！」

あわてて駆け寄った萌黄は、右手を後頭部に添えて持ち上げてやった。

「萌黄さん……本当に帰れるのか？」

「ホンマにホンマよ。リアルのむんが添乗員になって、連れにきてくれたんやから」

シュウが携帯の画面を示す。

「へえ……俺の知ってるむんさんにそっくりだ」

せいっぱいの軽口に、萌黄は笑ってみせた。

「そやから、あと少しがんばって、一緒に帰ろ」

「OK……」

ハジメは答えて、少し顔を傾けると、誰もいない空中に向かって話しかけた。

「ジイさん……アンタも一緒にな……」

ハジメの双眸から、スーッと光が消えた。

萌黄は彼の頭を地面に置くと、頭を垂れて黙祷した。皆もそれにならった。

「——あの」小さなむんが耳に手をかざして呼びかけてきた。「そちらの状況が判らないんですが——」

「残りは何分ですか？」

シュウが問うと、二十一分という答えが返ってきた。

「萌黄さん、行け」

「——はい」

ゆつくりと立ち上がる。そして目を炎少年に向け、そばの木にもたれた伊里江に向けた。

生き残ったリアルはこの三人だけになってしまった。

「世話になったな」

照れくさそうに頭を掻きながら、揣摩が前に出た。当代きつての人気アイドル、揣摩太郎。本来なら一生口を利くこともないはずの彼と知り合い、危ないところを助けたり助けられたりしながら、ここまでやってきた。

揣摩は萌黄の手を取ると、強く握りしめ、もう一方の手で肩を叩いた。

「向こうに帰っても、俺のファンでいてくれよ」

「今まで、本当にありがとう」

そう言って下げた頭を、揣摩は軽く抱いた。

「元気だね」

柳瀬も目を真っ赤にして手を振った。

久保田が涙^{はな}をすすりながら前に出た。

「これつきりなのか……これが永遠のお別れってやつなんだな？」

言うなり、ガバツと萌黄を太い腕で抱きしめた。

「わたし、絶対に忘れへんから」

「当たり前だあーっ」

力こぶが頬を締めつける。萌黄が腕をバタつかせたので、彼もようやく気づいて腕を解いた。

「……でもみんなに悪い気がする。この世界でこれから生きていくのって大変そうやし」

「魚が食えないんじゃ、漁師にも戻れないしな。しょうがないから農家にでもなるよ。……俺、考えてたんだ。

この世界で唯一食えるものは野菜だけになるだろ。人類全員がベジタリアンの世界って想像できるかい？ ハハハ、きつとみんな穏やかな顔になるんじゃないかな」

萌黄はこくりと頷いた。

争って相手を傷つけければ、即、命に関わる世界。おいそれと喧嘩もできないだろう。もしかしたら、戦争だっ

てなくなるかもしれない。

「空の彼方から、応援してるね」

「おう」

さようなら。初キスのひと——。

「さあ、早く来なさい」

雛田が清香を引っ張るようにして萌黄の前に立った。

清香は顔を手で覆って泣いていた。萌黄は彼女に対して、どんな顔をしていいのか判らなかった。

「萌黄さん」雛田は身体の前で丁寧に腕を重ねると、お辞儀した。「いろいろとお世話になったね」

「とんでもない。こちらこそ」

外交辞令のようなやりとり。萌黄は横に立つ不憫な清香に、同情の視線を送るしかなかった。

本来なら一緒に帰れるはずだった。なのにリアルな清香は無惨にも殺され、同時にヴァーチャルの清香が誕生してしまった。彼女はいまだに自分がヴァーチャルであることを受け入れられないでいるのだ。

「わたしのほうが年下やけど」萌黄は思い切って話しかけた。「生意気なことを言わせてもらいますね。……この世界で、雛田さんは大切な相方さんを失いはった。だから……その、雛田さんには支えてあげる人が必要やと思います。それが長年、名乗り合えなかった親子やったらなおさら——」

「間違いなく、正真正銘のお父さんなの？」

清香が涙目を雛田に向けた。

「ちゃんと言うてよ、お父さんならお父さんだって！」

その時、背後のシュウの手の上でカバ松が怒鳴った。

《いい加減にしろよ。まだ父親の資格だなんだと、ウジウジしてんのかい。これを見ろってんだ》

雛田が携帯を受け取ると、清香の映像が隠れ、代わりに白い立方体が飛び出してきた。萌黄にも見覚えのあるそれは〈衛星証明書〉と呼ばれるものだった。

情報機器の進歩と普及によって、世の中には複製物、つまりコピーやまがい物が氾濫している。この問題に対して、ひとつの答えとして登場したのが〈衛星証明書〉である。信頼のおける機関が発行した証明書を、絶対にコピーできない場所——人工衛星——に収め、その信頼性を確保、保証しようというものだ。非常に高価だが、契約する企業が引きも切らないという。

《ボタンを押してみな》

雛田は言われるまま、立方体の上面にあるボタンらしきものに触れた。

花が咲いたような動きと共に立方体は展開し、一枚の証明書が広がった。萌黄もふたりに合わせて覗き込む。

「……DNA鑑定……上記のふたりは、間違いなく親子であることを……証明する！」

所定の欄には雛田、清香のふたりの名前、写真、そして指紋が掲載されていた。清香は指を持ち上げ、そこに当てた。ポンと音が鳴り、「ご本人様です」の機械音声。雛田も震える指を伸ばした。ポン。「ご本人様です」。すでにカバ松は引っ込んでいた。あとは知らんというつもりだろう。

「清香。僕が……私が、本当の父さんだ」

清香は彼の胸に飛び込み、今度こそ声を上げながら泣き出した。

「今まで済まなかった。これから僕がカゲに代わって、ちゃんとお父さん役を果たすから」

「……お母さんも……喜ぶよね」

「もちろんだ。僕たちだけのために是非、アルパのリサイタルを開いてほしい」

清香の頭が頷いたように見えた。

「萌黄さん」雛田は携帯をもう一度胸の高さに上げた。

「この世界は厳しい時代に突入するだろう。だからこそ、今まで以上に〈笑い〉が必要になると思うんだ。僕はね、コイツとコンビを組んで再デビューするつもりだよ」

証明書が消えると、ピンク色の鼻の穴がふたつ、浮上した。

「新米の相方さん。よろしく頼むぞ」

《ニュー・カゲヒナタってわけだな。取り分は七三でい

いか？》

雛田は笑った。すると、カバ松の横にモジが現れた。

《オレはどないしたらええんや？》

「モジはね」萌黄はしばし考えて、「そや。清香さんの携帯に住まわせてもらたら？」

「え、いいの!？」

清香が明るいい顔を見せた。

「おイヤでなければ」

「ありがとう」

清香は大事そうに、雛田の携帯を受け取った。

背後から萌黄の肩が叩かれた。

「時間がもう残り少ない」シュウはそう言って、木の根元に寝そべっている伊里江へと足を向けた。

萌黄はその背中を追いながら、礼を言った。

「シュウさん、あの、今までどうもありがとう」

「妙な縁だったな」

背中向きで答えが返ってきた。彼は伊里江を背負い上げると、雛田の携帯に、残り何分だ？ と問いかけた。

《九分です》

再び、清香の姿が現れていた。その声にも顔つきにも焦りの色があらわに出ていた。

「行くぞ」

シュウはすたすたと、光のほうに歩き出す。

「炎君。おいで」

萌黄も少年の手を取り、後を追った。久保田たちももちろんついてくる。

シュウはちらと萌黄に目を向け、

「この下に埋まつてるブラックホール装置の残骸や、その他諸々については心配するな。俺が責任を持って完璧に処分しておく」

「お願いします」

光の外縁部に到着した。ヴァーチャルが近づけるのはここまでだ。

「シュウさん、あの――」

「あちらの世界に戻ると、君もただの人なんだな。それもなかなか大変なことだろう。しかし、君なら、乗り越えられる。……それから最後にひとつだけ」

力強い目が萌黄を射た。

「みんな言いにくいようだから私が言うが――君は人類を救った。のみならず、宇宙を救ったのだ。このことは誇りに思っている」

萌黄は背筋を伸ばすと、右手を上げて敬礼した。シュウも敬礼で返した。

「坊主、お前も達者でな」

「坊主じゃねえよ。……でも、みんな、ありがとう」

炎少年は神妙な表情になって、両手を膝について頭を

下げた。

「もう、母さんを泣かすなよ」と雛田。

「うるせえや」少年は目をごしごしとこすった。

萌黄は伊里江を背負い、少年の手を引いて、光のカーテンをくぐった。中は不思議な温かさに満ちていた。

「いま入った」

シュウが冷静な声でむんに伝えた。

《了解しました。引き揚げを開始します》

足許がぐらりと揺れた。

身体が浮上し始めた。

「がんばれよーっ」

「元気でなーっ」

久保田、揣摩、柳瀬、清香、雛田、シュウ。

手を振る人々の姿が下へ下へと下がり始める。

「みんなもねーっ」

萌黄はあらん限りの力で右手を大きく振った。

彼らの姿が点になっても振り続けた。

やがて下界は薄暗くなり、漆黒の闇に取って代わった。

萌黄たち三人は、七色の光の中を、どこまでも上昇していった。

まるで黄昏時を迎えたように、周囲から明るさが消えていった。反対に、虹色のカーテンは後ろが暗くなればなるほど輝きを増した。

カーテンは風にたなびく旗のようにゆらゆらとたゆたいながら後方へと飛び過ぎていく。その様子だけが唯一、自分たちの飛行速度を認識できる手がかりだった。

耳を澄ましてみる。風切り音さえしない中で、ずっと遠くから雷鳴にも似たとどろきが聞こえてくる。

鼻を嗅いでみる。かすかにコーヒーを思い出させる香りがした。

二つの世界をつなぐ通路。ここは宇宙のどこか知らない場所なのだろうか。それとも別の次元なのだろうか。判らない。まあ判らなくて当たり前だ。

ただ判っているのは、自分たちは無重力の中にいるということ。

進行方向に目をやると、七色の光が静かに渦巻いていた。上下感覚がないので何とも奇妙な気分に襲われる。

あの渦巻きは自分たちより〈上〉にあるのか、それとも〈下〉なのか。〈上〉と思えば、自分たちは上昇していることになるが、〈下〉と思えば、地獄の底まで落ちていくような不安感に囚われ、叫び声を漏らしそうになる。「スゲえっ」

炎少年は、キラキラと目を輝かせて七色のカーテンに

見入っていた。気をつけていないと、つないだ手を振りほどき、そのまま飛んでいってしまいそうなほど興奮している。

「何がスゴいん？」

「ほら、あそこ」

少年は真っ暗な空間を指さした。カーテンの光が邪魔をして何も見えない。

「もっと近づくんだ」

少年は萌黄を誘って無重力の中を泳いだ。萌黄が動く、互いにベルトをロープで結びつけた伊里江も動いた。

「ね？」

少年が感動したものが何なのか、ようやく判った。それはまるでアニメーション映画の一場面を観るような光景だった。

色とりどりの光が集合する。ぶつかる。火花が散る。

ガスが広がる。しばらくするとガスは個々に集まり出す。集まってくると中心が明るくなる。それぞれが固有の色を放つ。光は大きくなると、互いを引き寄せようとする――。

一連の流れが何度も繰り返されていた。毎回、光の色も違うし、火花の色も違う。すべてが変化するので、見ていて飽きないし、美しさはたえようもない。

だから炎少年がカーテンに手を伸ばした時も、萌黄は

危ないとも思わなかった。

炎少年の手がカーテンの裾に触れた瞬間だった。カーテンが突如生き物のように動き、少年の腕に絡み付いた。「うわああああ！」

萌黄も伊里江も引きずられてバランスを崩した。ものすごい力だった。つないだ手を離さないのがやっとだった。

（くっ）

宙返りしながら、萌黄はエアボールを投げた。

カーテンが激しく波打つ。少年が解放される。萌黄はふたりを連れて、急ぎ後退した。

「何だよ、これーっ」

「わたしに訊かんというてよ。とにかく近づかへんのが一番や」

飛行はまだまだ続いた。三人は通路の中心から外れないよう、互いに注意を払った。

「寒くなってきたね」

炎少年が腕をさすった。確かに温度が下がってきた。

「エアボールに潜り込もうか？」

萌黄は提案し、三人を空気玉で包み込むイメージを浮かべた。ところがエアボールがうまく生成されない。

（パワーが弱くなってる）

萌黄は直感した。伊里江も同じだったらしく、

「……いよいよ境界線に近づいたようですね」

言った途端、ウツと顔をしかめた。

萌黄がなくなった左腕の付け根に激痛を感じたのも同時だった。

「……リアルパワーで傷の痛みを抑制していたのが……効かなくなったのです」

その通りだった。萌黄は広げた手の平に血が付くのを見て愕然とし、Tシャツの袖をたくし上げた。綺麗に閉じていた傷跡はぱっくりと開き、血があふれ出していた。覚悟しておくべきだったのだ。

萌黄は今さらながら考えの至らなさを後悔した。

（——覚悟してても、おんなじか）

こうなるからと、光の通路に入るのを拒否することなどできない。

痛みの度合いがますます強くなっていく。これが本来の痛みなのだ。リアルではなく人間として当然の。

三人は散り散りに漂った。萌黄は自分の痛みをこらえるのに精一杯だった。いやそれもいつまで続くか。このままでは気を失って、カーテンに巻き付かれかねない。

「……萌黄さん」

伊里江が呼んだ。どうにか片目だけを開けると、彼は衝撃的な言葉を口にした。

「……ここでお別れです」

「え——？」

「……満身創痍で体力のない私は……これ以上、耐えられそうにありません」

伊里江の身体がふらふらとカーテンのほうに動いていく。つかまえようと萌黄は右手を伸ばした。しかし伊里江はぎこちなく首を振り、

「……無駄なことです。私の命はリアル世界に着くまで保ち^もそうにありません。構わず行ってください」

苦痛に歪む表情とは裏腹に、口調はいつも通りの丁寧さだった。そして、

「……おめおめと死体で帰り着き、人類の敵の弟と罵られて石を投げられるよりは——」

と独り言のようにつぶやくと、震える手を上げて、萌黄に小さく手を振った。

「伊里江……さん！」

「……苦しかったけど……楽しい二週間でしたよ……幸運を祈っています」

虹色のカーテンが爆発したように膨らみ、さまざまな色が混じり合って、萌黄の目をかく乱した。

ようやく治まった時に、通路に伊里江の姿はなかった。必死に目に凝らすと、カーテンのはるか向こうを、伊里江の身体が飛び去っていくのが見えた。

（伊里江さん——）

萌黄は目を左肩に戻した。血のせいでモスグリーンのTシャツは、肩から脇腹にかけてどす黒く染まっている。せめて止血しないと。そう思ってTシャツに手をかけた。丸めて傷口に当てれば、少しはマシかと考えたのだ。その手が途中で止まった。つかんだ部分から生地がボロボロと碎けていく。

原因はすぐに思い至った。いま着ている服は、全てヴァーチャル世界で手に入れたものだ。思い出せば、リアル世界からヴァーチャル世界に移った時も、身体ひとつだけだったではないか。

ふっと意識が遠のいた。マズい、血を流し過ぎた。

萌黄は服も下着も消えていくのにまかせ、片手で宙を泳ぎ、炎少年に近づいた。少年はぐったりとしていて、もう少しでカーテンに触れるところだった。萌黄は右手で少年の小さな身体を胸に抱くと、頭上の渦巻きに向かって、ひたすら念を飛ばした。

（早く到着して！）

そうしているうちにも、気が遠くなったり、痛みに目が覚めたりを繰り返した。気づかないうちに何度かカーテンに触れそうになって、危ういところで持ち治った。

どれくらい時間が経過したろう。三時間か、あるいは三十時間か、萌黄には見当がつかなかった。

夢うつつの状態の中で、ふいにまぶたの裏に熱を感じ

た。うつすらと目を開けてみると、胸元に抱いた炎少年のつむじに自分の頭の影が落ちている。

振り仰げば、渦巻きがあつた上空からは、真っ白で温かい光が差していた。

萌黄はどこか遠くで自分の名を呼ぶ声を聞いた気がした。

＊

——ここは、どこ？

脇腹の下が妙に温かい。指を動してみる。つるつるとした金属かタイルかだ。

むちゃくちゃに眩しい光が自分に注いでる。

腕を動かそうとすると、胸の下に炎君がいることに気づいた。まだここにおったんや。生きてるかー。

ああ、身体がものすごダルい。熱もありそうや。頭をちよつと上げただけでクラクラするやん。

ガヤガヤと声が寄ってきた。

〈萌黄、萌黄〉。誰かが呼んでくれてる。むん？

〈うわっ、血が出てる、腕がないぞ、なぜだっ〉

そない驚いてやんと、早よ手当してよ。半分は血イ失うたと思うから、生命維持の限界超えてるかもよ。

〈医師の皆さん、急いでください！〉

ああよかった。お医者さんが待機してくれてたんや。
へなげふたりしか、帰ってこないんだ？ 残りは？ 計
画は失敗なのか！

ああそうか、積み残しのリアルがいると思てはるんや
な。そうやないって教えてあげんと。

ふたりでええんです。他のリアルの人たちは、みんな、
みんな――

＊

次に目が覚めたとき、萌黄は白い壁に囲まれたベッド
の上にいた。身体中ぐるぐるに巻かれた包帯と、右腕に
は点滴。そして布団の下から無数に伸びた線が、そばの
機械に伸びている。機械のディスプレイでは白い線が規
則正しいグラフを描いていた。

部屋には萌黄しかいなかった。個室だ。ひとりで使う
にはもったいないほどの広さがある。

テーブル越しの壁に、磨りガラスの窓があった。明る
い様子から、時刻はお昼前後と思われる。

テーブルには花束が置いてあった。首をねじると、他
にも床までいっぱいに置かれていることに気がついた。

萌黄はただ純粋に、綺麗やな、と思った。

顔を仰向けに戻す。すると、頭の上にデジタル時計を

発見した。22、ちよつと空いて、11。二十二時十一分。

（ん？ そんなワケないやろ）

頭を浮かせてみる。少し目眩がした。

その時、数字が変わった。と、彼女は自分の間違いに気づいた。

（そうか。反対に見てたんや）

時刻は十一時二十三分。やはりお昼前。萌黄は納得して、頭を枕に落とした。

数秒後、目を大きく見開き、今度はガバツと身体を起こした。

液晶表示の数字は、裏返っていない。

（他に文字は？）

探そうと頭を振った途端、激しい目眩に襲われ、たまらず萌黄は横になった。

（戻ってこれたんよね？ ね？）

何かで確かめたいが、頭の中が嵐の海の船のように激しく揺れている。

静かな足音が近づいてきた。看護師さんだろうか。足許にあるドアが開かれる。誰かが部屋に入り、ドアを閉めた。訪問者は荷物をテーブルの前の椅子に置くと、顔を近づけてきた。萌黄はうつすらと目を開いた。

「あつ、むん！ おはよう……」

萌黄がいきなり話しかけると、むんは驚いた顔をして、すぐにぼろぼろと涙をこぼし始めた。

「よか……よかった！ 気がついて」あわてて取り出したハンカチで目頭を拭う。「このまま覚めへんのちゃうかと心配してたんよ……五日も眠ってたんやもん」

（五日も？ そんなに長いこと——）

萌黄は息せき切って訊ねた。

「なあ、ここはホンマにリアルの世界よね？」

「当たり前やないの。元の世界よ。帰ってきたんよ！」

むんはそう叫ぶと、椅子に置いたバッグの中から新聞を取り出した。

「ほら、文字を見てごらん。ちゃんとなってるやろ？」

すると、何かを思い出したように手を打って、新聞を萌黄の胸元に置くと、

「待っててな。目が覚めたこと、お医者さんに伝えなあかんから。また後で話、しよな」

むんは言い残すと、大急ぎでドアの外に駆け出していった。

萌黄は安堵の息を吐いて、身体から力を抜いた。新聞の文字は確かにここがリアル世界であることを示していた。

（よかった……これで元通りの生活に戻るんや……。逃げたり隠れたりせんでもええんや。撃たれる心配もな

いんや。誰かが目の前で砂になったりすることもないんや）

顔を明るさに満ちた窓に向ける。

（それから、この明るい世界が、爆発してなくなる心配も、二度とせんでええんや。全て解決したんや）

涙があふれそうになったので、あわてて我慢した。

（むんがお見舞いにきてくれてんのに、泣くのはやめとこ。積もる話もいっぱいしたいしい）

萌黄はもう一度、新聞に目を落とした。

一面は隅から隅まで、今回の事件の関連記事で埋め尽くされていた。

『少女と少年、奇跡の生還！』

それは最も大きな見出しだった。

少女かあ、と思わずため息が出る。続いて、他の見出しに目を移す。

『日本物理学界の勝利！ 首相がエネ研を表敬訪問』

『光嶋博士。愛娘と涙の再会！』

『ブラックホール生成装置は今後平和利用に 野宮助教 授大いに語る』

萌黄の顔から、徐々に笑顔が消えた。

〈エピローグにつづく〉